

長「マアお二人さま、お待ちなすつて下さいまし。そのお金と云ふのは、一體幾何あると丹さんを勘忍することが出来るのでございます。」

●「これはお娘が仲人かい。大ぶ物のわかつた娘御だ。サアそんならお前に免じて丹次郎を見遁してやるその代りに、小判でザット五十兩。」

×「コレお娘、何も六ヶ敷い事はねえ、お前が一二年花魁になれあ事はすむのだ。思ふ男の身の難儀なら、そこを立て盡すのが操だぜ。」

丹「飛んでもないこと、この子は義理ある私の妹、どうしてそんな事が……。」

●「出来ざあ直に代官所へ。」

●「エ、面倒だ、兄哥、打縛つてしまへ。」

と懐から繩を出しますから、お長は泣き聲を出してその手を押へ、

長「マア／＼どうぞ暫く待つて下さいまし。丹さんの身がはりには私が體をどうともして、吃度お金を差上げますから、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。」

●「ヤレ／＼いゝ子だ／＼。さう物が分れば何も無粹に騒ぐこともねえのだ。サアそんならお

娘、得心ついたらお互に早い方がいゝぜ。」

と二人の破落戸があはやお長の兩手を引捕へようと致します所へ、物をも言はず門口からズイとこの家へ這入つてまゐりましたのは深編笠をかぶつた一人のお侍、この様子を見まして上り口からいきなり破鐘のやうな聲で、

侍「ヤイ曲者、其處動くな。丹次郎は許しても、許されぬは騙取の悪者。」

と怒鳴りつけましたから、破落戸の奴驚いたの驚かないの、早腰を抜かしてうろ／＼するところをかの侍手早く引据ゑまして手に持った鐵扇で叩きつけ、

侍「ヤイ盗人ども、丹次郎やこの娘を何とするのぢや。」

●「サアそれがその、畠山の賣の一件で。」

侍「黙れ曲者、賣の一件詮議致すは譽田の次郎、この近常が人には頼まぬワ。」

×「エッ。そんならあなたは畠山様の。」

侍「家中と知らぬ白痴者がッ。」

とカラリと編笠をぬぎ捨てますと破落戸どもはびつくり、



●「ナニソノ又ほかにも詮議の節があることゆゑ……。」  
 譽「アハ、。怪しい身なりで人の詮索、コレ其方どもはいづれの御家來ぢや。吹貫襦袍に三尺帯、見れば丸腰五分月代、ハテめづらしい御家風ぢやな。目通り早く退かぬと、そのまゝには捨て置かぬぞ。」

と又もや鐵扇でした、か打たれましたから、破落戸どもは匍々の體で逃げ歸ります。さて譽田次郎近常は改めて丹次郎に向ひまして、

譽「コリヤコレ丹次郎、其方まつたく存ぜぬ事ながら、手代が据ゑたる印形は謀判なれば、そちが身の上のがれぬ落度。さりながら、右の金、年々に割付上納いたすならば、格別の慈悲をもつて濟ましてくれんと同役の相談、よつて内金二十兩、明後日まで金役所まで持參いたせ。迷惑ならんが金高の百分一にも足らざる上納、ありがたいと存ぜよ。さらばこれにて御免。」

と譽田次郎近常、大藩の家中だけありまして諄々申しません、手短かに殿の命を達しますると、そのまゝさつさと歸つて參ります。まことにさつぱり致したもので、丹次郎とお長はその後姿をしばらく伏拜んでをりましたが、さて顔を見合はせ、降つて湧いた騙りの難儀はのがれた代りに、ここにまた身に降りかゝる急場の金の才角に又もや思案に耽り入るといふ、この後の仕末はいかゞ相成りまするか、一と息入れて申し上げます。

## 第十一回

偕お話頭かはつて唐琴屋の花魁此糸は、この頃あれほど以前は足繁く通つてまゐりました最良客の藤兵衛がまるで颯が道を切つたやうにさつぱり姿を見せませんので、いろ／＼と思ひ案じてをります。もともと自分には半次郎といふ二世三世かけて契つた情人がございますから、藤兵衛の身を案じると申しても決して色戀から案じる譯ではございませぬ。實は人の噂によると、近頃大ぶ藤兵衛が深川へ入浸つてゐるといふ噂、ハ、アさてはてつきり米八に乗り替へたか知らん。しかしさうだとすると、米八といふ人も随分義理人情を辨へない不實な女だ。自分が命までもと思ふ丹次郎が浪々の身の上だから、金を貢いでやつて自儘に逢ひたいと云ふからこそ、こつちは古主を助ける一つの道だと考へて、意地悪番頭の鬼兵衛の前を無事に通してやるため



に、おのれが最良客の藤兵衛に無理に頼んで譯をこしらへ、深川へ住替へさせてやつたのは、みんな此方の計らひからだ。それを今更藤兵衛と可笑しな仲になつたとすれば、自分に對してまるで恩を仇で返すやうな仕打だ。べつに悋氣や嫉妬で怒る譯ではないが、義理と恩とを踏みつけにしたその遣り方がいかにも面憎い。しかしそれも人の噂からこつちの勝手な當推量ではあるが、兎も角一度米八に會つてその事をよく聞き糺した上で、もしそれが本當だつたなら犬畜生にも劣るあの女の面皮を思ふさま剝いでやらうと思つてをりました矢先、今朝がたちやうど客を送つて桐屋といふ引手茶屋の表二階で休んでをりますところへ、ひよつこり米八がやつてまゐりました。迎ひ酒の皿小鉢など取散らかつてをります部屋の中を女中が片付けましたあと、他に人のないのを幸ひ、此糸はすこし改まつた調子で米八に向ひ、

此「米八さん、私はお前はんには折入つてちいつと聞きたいことがありすよ。私はお前はんも知つての通り、愚痴や厭味は願がけたよりきつい禁物と心に誓つてをりいしたが、お前はんもまああんまりぢやありませんか。それあ成程藤さんは男心のいたづらに、何とかお言ひなりましたかも知れないが、譬ひどういふ譯があつたにしろ、私がお前はんへの達引で今まで盡し

た親切を、こんな仕儀になりいしては、あんまりひどいぢやありませんか。」

といつにない氣色ばんだ様子で申しますから、米八もかねて藤兵衛との間のことはひよつとしたら此糸に疑ひをかけられてゐるかも知れない、折があつたらはつきり言つて置かうと思つてゐた矢先でございますから、少し膝をすゝめまして、

米「おらん、そりやもうお前はんがその事について何と恨みを仰言つても、私はちつとも無理とは思ひません。今更私がどんなに言つて見たところで、どうせ拵へ事の言譯だと思召しになるでせうが、決してさういふ譯ぢやあないんですよ。」

此「いゝえ、私もどうせ今度の事は、初めから公然で顔を踏まれる覺悟でお世話をあげえしたのだから、それが過誤でありいしたのさ。」

米「いゝえ花魁、私やお前はんにはさう言はれると、まことに辛いんですよ。じつはね、昨夜私や藤さんのお供をして爰まで來たんですの。むろん藤さんは花魁の所へお出でだとは言はずと知れた事ですし、私はあすこの内證には遠慮のある體だから、おらんへはこの家の人によく言傳を願んで置いて、私はそのまゝ堀の船宿へ行つたんですが、思ひがけなく延津賀さんに



逢つちやつてね、お互に久振りだもんだから今夜はこつちへ泊つてお出でよといふので、私や昨夜は山の宿へ泊つて、今朝がた藤さんのお迎ひがてらおらんにもお目にかゝらうと思つて、ここの家へ来て見たら、藤さんは昨夜他所へお出でで、もうお歸りになつてしまつたと聞いて、アラそれぢやあどうしたらいいだらうと、實は一人で思案に暮れてゐたところなんですよ。」

此「それお米八さん、お前はんの前だが、茶屋衆と馴れ合つた日にやあ、何とでも言へますわね。」

と此糸は少し口惜しい思入で、泪ぐんで厭味を申しますから、米八もいつそ藤兵衛のこの頃の仕打をこの機會に洗ひ浚ひ此糸に打明けてしまつた方が却つてよからうと肚をきめ、

米「おらん、お前はんのその恨みは重々御尤。御尤ですけどね、しかしまた私の身になつて見たら、そこにはそこで、言ふに言はれない随分口惜しいこともありますのさ。それお初めは私も藤さんのお蔭で、あゝして望みどほり深川へも住替へ、身儘になつて丹さんに思ひ通り貢ぐことが出来ました。これと申すもみんな花魁、お前はんの親切から。そりやあもう花魁の御恩

は仇やおろそかに思つてゐませんよ。その當座は藤さんもまことに通人らしく、こつちがきまりの悪いほどさつぱりした氣性で、厭らしいこと一つ言ふではなし、馴染由縁のない深川の船宿料理茶屋へは蔭にひなたに私を押立て、下さるその親切、お蔭で私も近頃ではどうやらかうやら押しも押されもしない賣れつ妓になりましたが、元はと言へばみんなこれは藤さんが慾を離れた親切から。私やほんとに冥加に盡きて、その當座明け暮れ嬉し涙に暮れてばかりゐましたよ。ところがその藤さんが、此頃はどうした風の吹き廻しか、それとも魔でもさしたのか、まるで女にでも事を缺いたやうに私ばかりを呼び詰めにして、やれ自由になれの言ふ事を聞けのと、聞くも辛い責め難題。私やおらん、ほんとに骨身を削られるやうな思ひですよ。こんなことを花魁に打明けければ、さぞお前はんもお腹立ちだらうが、私としてはどこまでもお前はんへの義理があるから、泣つ口説いつ言ひ抜けてはゐますが、藤さんの身になつて見たら、さぞ我儘な義理知らず恩知らずな女と思ふだらうと、それを考へると實際血の出るやうな思ひですよ。好きでもない酒で殺して愛想づかしの百萬遍、もうこれぎり腹を立つて呼んでくれなさははしまいと思つてゐると、三日と待たず翌る日翌る晩はまた輪に輪をかけた勿體ないほどの



親切。それを無理にも目をつぶつていつも私から何だかんだと突かゝり、しがくに盡きた揚句の果は、ふて寝の假病けびやうで斷りを言へば、米八どうだ、ちつとはいゝかと部屋まで見舞の土産も。あたしももといゝ看板主ではなし、抱への子供や朋輩衆の手前もありますから、あんまりすげなくすると己惚おぼが増長すると蔭口をいはれるその時の私の胸の辛さ。おるらん、これあ誰のための苦勞でもありません。初めをいへば丹さんの貧苦をみつぐおるらんの情を仇で返すまい、どうかこの先おるらんへ御恩がへしの出来るやうにと、妙見様へ千遍のお題目をあげるその口で、浮いた調子の騷唄を弾いても、おるらん、お前はんのお心意氣は日に幾たびいはないことはありあしませんよ。ネエおるらん、あたしの胸の中もちつとは察しておくんなさいよ。」と涙をこぼして米八が義理と情に挟まれた心中を述べますから、此糸もその言葉に動かされまして、さてはさうであつたか、それとは知らずに疑つたのは此方こちが悪かつたとハラ／＼と涙を流し、

此「米八さん、どうぞ勘忍しておくんなしよ。私わちが悪うございました、あやまりいすよ。眞逆さうとは思つても、この頃さつぱり藤さんの足は遠し、たよりもなから、それで心にもなくお

前はんを疑ひいしたが、いま聞けば藤さんはお前はんに心が移つたのさます。お前はんもさぞ辛いでござんせう。あれが藤さんの癖くせさんすよ。ふだんはあの通り何事にも如才のない人さますが、ふと氣が移るといふと、そこへ一途に凝る氣になるのが藤さんの持ちまへざんす。それだから實をいへば私もまあ……。」

と此糸跡を言ひ紛らして申しませんのは、長らく藤兵衛の世話にはなつてをりますが、まだ本當の情人まがとはしてゐないものと相見えます。昔の花魁なんといふものは寔にどうも操の固いものでございます。

米「おるらん、お前はんの疑ひが晴れて、私やこんな嬉しいことはありませんよ。ほんとにお前はんとは、どういふ因縁なのか知らないが、かうして今まで姉妹にも及ばぬいろ／＼の御親切、まあどうかこの先も變らず最眞まことにしておくんなさいよ。」

と二人は手に手を取らばかりに涙を流して喜び合ひます。米八はやゝあつて小聲になり、米「それはさうと、藤さんは半さんのことをよく御存知ですよ。」

此「おや、さうございますか。なんと云つてゐたえ。」







米「おらん、なにか此節半さんのことで苦勞になさることもありませんか。」

此「ナニ今始まつた苦勞ぢやありませんが、私わちあこんなおみくじは嫌ひなすよ。今はたとひ悪くつても、末には嬉しいとか言ふのなら樂しみにもなりいすが、これぢやあ何が何だか分りいせんわね。悪人ではないが身の爲めに悪いなんて、諦められるぐらゐなら初手から氣なんぞ揉みやあしいせんわ。」

花「だから、おらん、私がおみくじなんぞおよしなさいと申したのにさ。」

米「まあ、おらん、お案じなさいますなよ。凶は吉にかへるといふ事もありますからね。それにしても氣にかゝる半さんの身の上……。」

と三人顔を見合はせて思ひに沈みますが、さて此糸と半次郎のこの後の成行如何相成りまするか、また回を改めて申し上げます。

## 第十二回

唐琴屋の娘お長は丹次郎が畠山家へ上納の金子二十兩の才覺のために、小梅のお由と圖らひまして、あれから直ぐに下谷同朋町のお阿くまといふ音曲の子供を抱へる家へ二十五兩で淨瑠璃語となつて住込みました。このお阿と申すのは、もとは唐琴屋の二階に勤めてをりました遣手でございますまして、まことに強慾婆で、廊ちやうにをります頃ちやうから廊の者に小金を貸したり致して大分溜めましたところから、今では下谷の同朋町に一軒借りて住み、音曲の子供屋をして渡世致してをります。下世話にいふ藝が身を助ける世の習ひ、お長は義太夫は銀座の宮芝にみつちり仕込まれましたから寔に確かなもので、名も竹蝶吉と替へまして、その頃流行の髪を切つて若衆鬻うに結び、毎日諸所のお屋敷方のお座敷へ呼ばれてまゐります。表は派手な藝人渡世、きれいな衣装みじまひに化粧美しくいたして、昨日はどこの寮、今日はどこのお屋敷と毎日浮き／＼と暮してをりますが、家へ歸ればもとは自分の家で使つてをりました遣手が今は假の親、これがまた一通りでない強突婆と來てをりますから、朝に晩に口汚く叱り罵られます。飼ひ殺しの召使同然になりまして仕へてをりますが、變れば變る世の中で、まことに見るも氣の毒な身の上でございます。けふもけふとて、ちやうど今夜呼ばれたお客の好みものを、二階でひとり浚つてをり



ますのが長吉殺しの愁嘆場でございます。

上るりへナヲく姉様、わしは切れいでも死なねばならぬ事が有り、やあそりやなぜに、さればいの此中來た時だんくの咄し。やるせも金故ひんゆゑと聞いたときの其のかなしさ、どうぞと思ふ心からわしや此金はぬすんできたのじやはいの、くるとしんじよと思つたが、親方の物ちり一本そまつにすなとの御いけん、どうもやらうとゑいはで見せびらかしてゐました。たつた一人の姉様、何ぼ程かうくにしてもしあきはなけれど、丁稚の内はじゆうにならず、ぬすんでなりとも苦を助け、あとでは直ぐに身を投げて、さいごはおばせの野中の井戸、わしや來しなに死ぬる所まで見て來たわいのとすがり付きしやくりあげたる有様に、小梅は身も世もあらばこそ。そのやさしい心ざし、聞けば聞くほどなほ悲しい、二た親に別れてよりそなたもわしも難行苦行。

とお長は我身に引較べ語るうちより涙をこぼして忍び泣いてをりますところへ、階下からお阿が梯子をやけに叩きながら、

くま「おい蝶吉々々、コレお蝶、こんなに呼んでゐるのが聞えないのか、この金費。」

長「はいくお呼びかえ。」

くま「いゝ加減に空耳つかやあがつて、この金費め。もう九つが鳴つたよ。さつさと支度をしねえか。莫迦々々しいにも程があらあ。」

長「でも今日の出ものは私が語りつけないものだから、よく浚つて行かないと困るもの。」

くま「エ、言はねえことか。口の掛らねえ時には浚へくといくら言つたつて、うぢくしてゐるやがる癖に、お屋敷へ出るとか座敷があるとかいふと、足元から鳥の立つやうに騒ぎやあらあ。何でもおれを莫迦にしてゐるやがるからだ。コレ蝶吉、よく聞け。毎度いふやうだが、假りにもお前の親だぞ。その親に口返答したり、我儘がしたくばしたいやうにして、つべこべ叱言を言はねえやうにしる。手前の藝ぐらゐで、二十の三十のといふ金の利が取れるものか。それだからこの間からおれが言ふことを聞いて、ソレあの左文太さまの……。」

といひかけてお阿は梯子を上つてまゐりましてお長の側へびつたりと坐り、

くま「コレお蝶、お前よく聞きなよ。この間から話の古鳥左文太さまはな、大層な御内福だといふことはお前も萬長で聞いたぢやねえか。さういふお金持の旦那が世話をしてやらうと仰言



るのを、今もつて返事もせず。……オやお前もう涙ぐんでゐるのか。コレお蝶、なにが悲しい。なにがそれほど口惜しいのだ。縁喜でもねえ。」

長「アレ阿母さん、勘忍して下さい。私や今まで浚つてゐた長吉殺しの所が可哀想だつたもんだから、ツイ涙が出たのでござんす。」

くま「フン手前で語つて手前で泣いてゐりや世話がねえや。どうぞ聞手がその半分も情が移るやうならいゝが、座敷へ出して弾かしたら、ヘン駄菓子をくれる客もあれあしめえ。すこし長く語られたら、お客は欠伸で涙が出らあ。まあ、まだしも色が白くて、目鼻立がちつとまじなのがお仕合せさ。だからお前なんざ藝で立派な身なりは出来ねえから、おれが旦那を探してやれば、どうかのかうのと返事を濫りやあがる。とんだ冥加につきた奴だぜ。いまだき手前ぐらゐの面を持つてゐて、旦那の二人や三人取らねえ白痴がどこの世界にあるものか。」

長「いゝえ阿母さん、私や淨瑠璃にはどんなにでも精を出してお客を大事に勤めますが、旦那を取るの、左文太さまのお世話になるのと、それだけはどうぞ堪忍しておくんさいまし。」

くま「エ、聞分けのねえ餓鬼だ。手前がさう強情を張るなら此方も意地だ。手前勝手を言はし

ておくものか。コレお蝶、いまだき淨るりを語り候ぐらゐで、三十兩からの大金を出すものがあると思ふのか。まあ、さう云つて我儘を言つてゐるがいゝ。こつちにや眞逆の時の用心にちやんと二枚の證文が取つてあるんだ。旦那がいやなら、手前が生れ故郷の吉原へやつて、年一ぱい顔馴染の中で苦界するのも亦よからうさ。旦那はいやだもすさまじいや。」

長「阿母さん、もういゝ加減によして下さいよ。私や出がけにお前に叱言をいはれると、氣になつてお座敷の機嫌がとりにくいからさ。」

くま「取りにくきやあ往かねえがいゝやな。おとなしく出れあ口巧者な、何を言やがるんだ。叱言をいふと澄ました顔でゐるが、大かた手前の腹の中ぢやあ、元は主人だといふ氣でゐるんだらう。それあ成程六七年前に、たしか一年ばかり、據所なく頼まれて唐琴屋の女郎衆の世話はしたこともあるが、なにも奉公人ときまつて居た譯ぢやねえんだよ。なんだ、高慢ぢやくれた顔をしやがつて、過ぎた昔が可恐くつてこの世間が渡れるか。」

長「私は阿母さん、そんな事なんぞ露ほども思つてゐやしませんわね。どつちを向いても身寄りのない身だから、お前を阿母さんだと思つて私や眞身に盡してゐるのに……。」



と思はずお阿の雑言にはらくと無念の涙を落すところへ、表の格子戸をがらりとあけて、  
 どうやら武家の使らしい男が尋ねてまゐります。

男「あい、ちとお願申します。梶原の屋敷から参りました。蝶吉さんの迎ひでございます。」  
 くま「おやく／＼それはまあ／＼御苦労までございます。まあ／＼ちつとお掛けなすつて。蝶  
 吉や、早く支度をしなよ。まあお茶でもお喫あがんなすつて。今日は何でございますか、お客様は  
 大勢さんでいらつしやいますか。」

使「ナニお客より藝人衆の方が多いうですよ。幫間たすけでは櫻川善好、櫻川新孝、嘶家では龍調  
 に柳橋、清元は志津太夫に壽女太夫に延津賀、踊りは西川扇藏、義太夫はこちらのお蝶さんに  
 小でんさんさ。なんでも大ぶ大騒ぎサネ。」

くま「おやく／＼、それはまあ嘸結構なことでございますねえ。」

使「イヤまだあつた。宅うちの旦那の御最眞の深川の米八、梅次なんていふ仇者も來ますぜ。」

と話すところへお長は二階から支度をして下りてまゐります。

長「アラ米八さんもお出でになりますの。」

くま「まあ、人さんの事はいゝから、お前は忘れ物でもねえやうに氣をつけな。それはどうか  
 お願ひ申します。他所よそさんのと違ひまして、からもう嬰兒ねんねで氣がつかなくつて困りますよ。エ  
 へ、へ、へ。」

使「ナアニ阿母おつかあ。娘子供の出來すぎたのは却つて困りものだよ。おぼこなうちが可愛らしくつ  
 ていゝのさ。さあ蝶吉さん、それぢやあ参りませう。けふはどうせ晝夜ちゅうやになりますぜ。」

長「はい。ありがたうございます。阿母さん、行つてまゐりますよ。」

くま「あいよ、氣を付けて行つて來なよ。」

とお長は使の者と、とも／＼龜井戸の梶原の屋敷へと出掛けてまゐります。

## 第十三回

こちらは龜井戸の梶原さまのお屋敷、けふはお茶會のお催しで、大勢のお客様が詰めかけて  
 まゐります。お座敷を取り持つ藝人衆、幫間たいこまち、さては藝人衆、いやもう一座揃つての大騒ぎで



ございます。すこし離れた供待部屋に、箱屋のなりをいたして、しよんぼり待つてをりますのはかの丹次郎でございます。待ちくたびれまして少し眠氣がさしてまゐりましたから、ちつと眠氣さましにお勝手口からそつと庭先の方へ氣を抜きに出て見ますと、お庭からずつと花畑につゞきまして、まことにどうも結構な眺め、お手入れがすつかり行届きまして、折柄これへ月がさしまして植込のかけから心持のよい夜風がそよ／＼通つてまゐりますから、丹次郎いゝ心持になりまして浮々うぶくとそゞろ歩きを致します。あちらの方に小高い築山つぎやまがございまして、これに數寄屋好みの結構な離れがございまして。丹次郎築山つぎやまへ登りまして、その縁側へ腰をかけますと、下はずつと泉水で奇岩珍石のたゞずまる、遙か向ふがお廣座敷で、唯今やんやと御酒宴の最中でございます。思はず柱に倚れてうつとりといたしながらそよ吹く夜風にツイうと／＼と眠り込みましたが、さてどのくらゐ眠りましたものか、ふと何やら人の足音がするのを目が覺めまして向ふを窺ひますと、誰やら枝折戸を押開けてこちらへ駆込んでまゐる様子。丹次郎今頃こんな所へ誰だらうと不審に思つてヌツと立上りましたが、誰も居ないと思つた眞暗闇の中でいきなり人が立上つたから相手は驚いたと見え、月の光によく／＼すかして見て、

「オヤそこにあるのは丹さんかえ。」

丹「さういふお前は、なんだお長か。びつくりしたぜ。まあ／＼此方へ來ねえ。お前もけふはお屋敷へ呼ばれて來たのか。そしてまたどうして今頃こんな所へ來たのだ。」

長「あゝ可恐かつた。眞暗闇の中からいきなり人が立ち上つたから、私や大入道かと思つたわ。それはいゝが、兄さんはどうして今夜このお屋敷へ……。」

丹「俺か。俺はソノ何だ。」

長「米八さんを案じてお屋敷まで一緒にいらつしたのかい。」

丹「ナニさういふ譯ぢやあねえが、米八にすこし頼んだことがあつて來たのだ。それよりお前は どうしてここへ逃げて來たのだ。」

長「兄さん、まあ聞いてお呉れな。あたしがここへ逃げて來たのは。」

丹「鳥渡待ちねえ。人が來ると不可ねえから、ここの離れへ上つて聞かう。さあ、ここをかうして閉めて置けば誰にも知れやしねえ。ウムそれでお前がここへ逃げて來たのは。」

長「このお屋敷の御用人で、番場の忠太様といふお方があるんだよ。その忠太様の若旦那の忠



吉さまといふのがね、もう此間からわたしにいろんな事を言つて、無理に自由になれの言ふ事を聞けのと言つて、もう／＼厭で／＼ならないの。ところが今日は大勢のお客様が酔ひ切つて正體なくしていらつしやるものだから、それを幸ひに先刻から私をつかまへて、困り切つてゐたら皆んなで隠れん坊が始まつてさ、

來ただけけれど、いつまでもこんな所にある譯

には行かないし、兄さんどうしたらよからうねえ。」

丹「さういふ譯か。其奴ア困つたものだが、しかしお長、相手はこの御用人の若旦那なら、始終お前の爲にもなることだから、いつそそのお方の機嫌の直るやうにして上げたら……。」

長「まあ兄さん、お前それでは私がお客や何かの言ふことをきくとも思つてゐるなさるのか  
し。」

とお長ははや涙ごゑになりまして、

長「兄さん、お前は何も知らないだらうが、家へ歸つてけふお屋敷でこれ／＼の譯だと話せば、

うちの阿母おつかさんは寔に邪見な人だから、金になるならそのお方の心に随へと、そりやもう言ふにきまつてゐるんだよ。そればかりぢやない、日頃から旦那を取れ／＼と言つて、宅へ遊びに来る人でも少しお金のありさうな人には、面白可笑しく挨拶して、何でも貰ふ算段をしろと口癖のやうに言つてゐる人だもの。もう朝晩いやなことばかり。それを私が我慢をして、かうやつて座敷勤めをしてゐるのは、及ばずながら兄さん、お前に盡す奉公と思つてしてゐるのに、厭らしいお客の機嫌のすむやうにしろとは、いくら何でもあんまり兄さん、情ない言葉ぢやないか。いゝわよ、私は今にどうせ死んでしまひますからね。どうぞ米八さんと仲よくお暮らしなさいましょ。」

丹「なぜさう腹を立てるのだ。今のは俺が言つたのが悪かつた。むろん俺だつて、なんでお前を人の自由にされられるものか。それはさうだが、俺のために罪もねえお前を、かうして座敷勤めまでさせて苦勞をさせてゐると思ふと、始終心の休まる時はねえのだ。それよりいつそさういふお方の側にゐれば、ちつとはお前の苦艱も休まるかと思つて、ツイお前の身を思つて言つたのだ。まあ／＼勘忍してくれ。」



長「兄さんの心持はありがたいが、私や兄さんの側にゐるよりほかに苦艱の休まる時はありやしないもの。どうして兄さんとあたしはかうも苦勞をするものかねえ。兄さんは御存知ないだらうが、私が今居る下谷の家の阿母さんといふのはね、驚くぢやありませんか、元廊もとむらの家にゐた遺手のお熊どんですよ。」

丹「ナニあのお阿くまの家にお前はゐるのか。あの強突張りのお阿の家にか。」

長「あゝさうなの。もう〳〵意地が悪くつて〳〵ね、箸の上げ下しに叱言を言つてさ、辛くて仕方がないけれど、まあその中にはどうかして兄さんと一緒になれる時もあるだらうと、當もないことを頼りにして辛棒してゐるんだけれど、それなのに兄さんは米八さんばかり思つて、かうしてお屋敷へまで送り迎ひにお出でだもの。私なんかいくら苦勞をしても所詮駄目だから、あゝ〳〵早く死んでしまひたいよ。」

丹「莫迦な。そんな詰らねえ事を言ふもんぢやあねえ。俺がかうして米八の方へ附いて來るのも、早く何とか金の都合をつけて、お前を下谷の家からお由さんの方へ一旦歸してしまはなければ、俺の男が立たねえからさ。まあ、もうちつとの間辛棒してゐてくん。そのうちには吃

度どうかしてお前を取返すからな。くれ〳〵も短氣を起しちやならねえぜ。」

長「いゝえ、私だつて今直ぐに兄さんのお側へ行かなくてもいゝけれど、先の目當がついて、ならう事なら二日置き三日置きぐるゐに顔が見られるといゝと思ふが、下谷の家にゐてはそれも出來ないから、一層辛さが身に沁みますよ。」

と兩人愁ひに沈む折から、虫の音すだく庭を隔てた廣間からしんみりと連彈の聲が聞えてまゐります。

「噂にも氣だてが粹すくでなりふりまでも、いきではすはでしやんとして、桂男のぬしさんに惚れたが縁かえエ

丹「あれはたしか深川の政吉姐さんに大吉姐さんの聲だらう。」

長「あゝさうですよ。節廻しがうまいねえ。」

丹「お前は今夜は何を語つたのだ。」

長「私は仲町の今助さんと掛合で、琴責を語りました。だけど今夜のやうな騒々しいお座敷には、義太夫はなんだか焦じれつたいやうね。やつぱり端唄か都々逸のやうな短くて乙おなものか適



ひますね。」

「惚れてこがれた甲斐ない今宵、あへばくだらぬことばかり

へおもふほど思ふまいかとはなれてゐれば、愚痴なことだが腹が立つ

長「兄さんお聞きよ。唄にさへあの通りうたつてゐるもの。兄さんは米八さんがあるから、私  
のことなどは思ひ出してお呉れぢやないだらう。」

丹「お長、お前思ひ出すといふが、思ひ出すといふのは忘れるといふ不實があるから起ること  
だけ、おれはお前のことは思ひつゞけだから、別に思ひ出すなんといふことはねえよ。」

長「アラ兄さんは巧いことを言つて。兄さんが忘れる隙ひまのないといふのは米八さんのことよ。」

丹「また米八のことか。もういゝ加減にしねえか。またいつかのやうに灰神樂があがるぜ。そ  
りやさうと、ばかに座敷の方が静かになつたが、櫻川の藝づくしでも始まつたかな。」

長「イ、エたしか龍調の落し咄はなでしよ。晝間も遊蝶が新内のはいつた噺はなをしましたが、ずるぶ  
ん面白かつたわ。」

丹「フウムさうか。若手の中ぢやあ遊蝶が一番上手になりさうだ。」

長「ぎすくししないでおとなしいからいゝわね。」

丹「此こゝ奴咄はなを褒めるかと思へば男振りを褒めるのか。うつかりしてお前の惚話のろけを眞に受けて聞  
いてゐたぜ。いつの間にか隅すみに置けなくなつたな。」

長「兄さん、ひどいわ。いくら何でも私が遊蝶に惚れやしませんわね。遊蝶には私のお友達の  
お喜久といふ子が惚れてゐますよ。とても見てゐて憎らしいくらゐよ。」

丹「ソラ見ろ。憎らしいと云ふ位だから、満更氣のねえこともなささうだぞ。」

長「嘘よ兄さん、その位ならこんなに苦勞はしませんよ。憎らしい人。」

丹「おいらは又可愛らしいよ。」

あとはたゞ草葉にすだく虫の聲、月もどうやら雲間に入りましたものか、あたりは眞の闇、  
廣間で時々どつと笑ふ聲が手に取るやうに聞えるばかりでございます。

## 第十四回



見ればたゞ何の苦もなき水鳥の足にひまなき思ひなるかな、人の活業といふものも他から見ると誠に樂で暢氣に見えるものでございますが、その道に這入れればどうして皆誰しもそこにそれ相當の苦しみはございますもので、年中お蠶絲ぐるみで、浮いたことを言つて、芝居や物見遊山は望み次第で、苦勞といへばお客の鼻毛を讀むぐらゐに世間から思はれてゐる藝者稼業も、裏へはいつて見れば、三筋の糸で世を渡るまことに果敢なく遣瀨ないもの。まづ突出しの氣苦勞は座敷の取廻し、これがあまり内端に致しますとお座が淋しくなりますし、さうかと申してふざけるお客の調子に乗り過ぎれば通客のお氣に合はず、お客は口を開けば藝者の悪口いふのを穿ちと思つて顔や姿の棚下ろしばかり、藝者も親のある身の秘藏娘だと思ふものなど一人もございませぬ。茶屋小屋への義理、朋輩への達引、浮かれて暮らすその日、その日がまことに地獄の關所でございます。米八は藤兵衛の義理と情の柵に、昨夜舟をもやつた向島料亭の平岩の奥の一と間、藤兵衛は例によつて戀の意地から無理呑みの酒に酔ひまして肱枕でごろりと轉寢をしてをりますその側で、米八所在なさに誰かゞ置きわすれて行つた小本か何かに讀み耽つてをります。

213

みよご梅

「無量壽の佛のをしへ聞くならく、さればはかなき朝顔も、千年の松に枯れ残る、無常の風の吹とぢよ、お花をつれて半七が。△客「アレあの淨瑠璃は、お花半七が情死のところ、名も似寄つたるおめえは花山。女郎「ぬしも似た名の半兵衛さん。半「ア、身につまされた文句ぢやあねえか。花「他に知られいせんうちに早く殺しておくんなんし。半「ホンニそれく、人の見ぬうちちつとも早く、少しの苦痛しんばうしやト、屏風を手早く引廻らし、刀を抜いて半兵衛は、既にかうよと見えたる所に、たれとも知れず障子の外にて、「了簡ちがひさつしやるな。死んで花は咲きませぬ。これを見たうへ兎も角もト、障子ほそめにおしあけて、二人が中へ投げ込む一通、これ花山が年季狀、半兵衛は手に取り上げ、とつくと讀んでほつと息。半「こりやこれ、そなたの年季狀。花「たしかに今のしはがれ聲は花町さんの客人で、霄に上つた番頭風俗、私キのことをいろくくと聞きなましたお方でござんす。半「ハテナア。それぢやア忠七があいもかはらぬ信切か。花「その人さんはなんざんすえ。半「家内のしまりの重手代、親父が秘藏の白鼠、



その名も忠義の忠七が、ハテ心得ぬ此場の仕末。花「この證文が有イすれば死なでもよ  
うおす。半兵衛さん。半「ホンニこれでは死なずとも、誠にこれは（作者曰）めでたし  
めでたし。」

是より後編にくはしく入御覽候。

と読みおはつて米八、

米「おや憎らしい。これからといふところでいつも切るのが作者の癖だよ。もうこのあとはな  
いのかねえ。」

と獨言を云ひながら藤兵衛を見ますと、昨夜の酒で正體もなく肝をかいてぐつすり寝込んで  
をります。

米「ほんとにこの本を見るにつけても、此糸さんのことが氣にかゝる。あゝいふ氣性だけに、  
今更引くに引かれぬ根岸の半さん。ひよつとして二人とも、この本にあるやうな事でも……。」  
藤「そりやあるめえとも言はれねえぜ。」

米「エ。まあ藤さん、お前はん目をお覺ましかい。」

藤「とうから覺めて聞いてゐたさ。よし聞かねえでも知つてゐらあな。あの此糸が突出しから  
世話にもなつた根岸の半兵衛、零落しても突出さず、義理と派手とは二道に、諸分を知つたお  
ゐらんと氣性を買つたこの藤兵衛だ。さうして見れば、コウ米八、お前もさう固苦しく此糸へ  
義理もいるめえぢやあねえか。」

米「そりやねえ藤さん、私や心でお前に惚れても、そこはまた女の意地づく、これだけはどう  
言はれても返事の出來ない義理と、相かはらずだが堪忍しておくんなさいな。」  
藤「なるほど此奴アどこまでも情のこわい女だぞ。」

と藤兵衛、米八の横顔をじつと見詰めながら、獨り何やら思案深げな體でございます。

## 第十五回

向島弘福寺の垣根道、平岩の庭下駄をいた木場の藤兵衛手拭を肩にいたし、幫間櫻川由次



郎とつれだちまして、錢湯へまゐります途々、

藤「なあ由公、かう言ふのは言ふ方が無理かも知れねえが、どうも朝は湯へ這入らねえと気がすまねえ奴さ。朝湯のねえのは不便だが、しかし向島はいつ見ても閑靜で命が延び／＼するな。どうだ、どこかの寮の庭で鶯が鳴いてゐるぜ。」

由「旦那また今朝はすてきに早くお目がさめましたね。」

藤「昨夜は到頭呑み倒れたが、あれからちつとも寝入りはしねえもの、ときに湯はもう沸いたらうか。」

由「もう明きましたらう。そのかはり、まだ女湯が沸かねえだらうから、悪くすると腫臉はれまぶたの藝者が箱まはしに浴衣をもたして、今朝は化粧みじまひするのも大儀だ、船で先へ歸りたいねえとか何とか言つて、狭い流しを糠だらけにして居ませうぜ。」

藤「といふのは假の名で、じつはその藝者がお前の顔を見て、アラ由さん、お前も昨夜はこつちかい、どこにお出でだったかちつとも知らなかつたよ、悔しいねえとか何とか言はれるつもりかなんかで、これが内の湯を待ちかねる振り、俺おいらを引張り出したんぢやあねえのか。」

由「冗、冗談でげせう。そんなあなた、素人じみて、さう女にのろけもしますめえ。」

藤「ナアニいくら櫻川善孝の御曹子でも、別に女嫌ひだといふ請人はまだあるめえ。」

と冗談口を叩きながら、武藏屋の向ふの湯屋の前までまゐりますと、ちやうど湯屋の障子を明けて出てまゐりましたのは、髪を意氣な若衆鬘わかしゅに結びました十六七の女藝人らしい美しい娘、替り縞の寝巻に細帯をしめ、手拭ひを口にくわへて、小さな黄木わづげの櫛で鬢のほつれを搔きあげながら、出會がしらに藤兵衛とバツタリ顔を見向はせ、

娘「アラ藤さん。」

藤「オヤ誰だと思つたらお長坊か。ヤレ／＼どうも久しく逢はないうちに、見違へるやうに大きくなつたな。お前、いま何處に居るんだ。ゆうべこの近所へでも泊つたのか。」

長「いゝえ、小梅の姉さんが病つて、この横町の寮へ來てゐるもんですから、そこへ來てをりますの。」

藤「さうか。なんにしてもめづらしい所で逢つたものだ。」

と立話の中に、櫻川由次郎はわざと氣をきかして外はずすつもりと見えてニヤ／＼笑ひながら、



由「旦那、私あつしや一と足お先へお燗を見て來ますぜ。まあ、ごゆつくり、へ、へ、へ。」

と藤兵衛の肩中をボンと叩いて、これは湯屋の障子をガラリと明けて中へ這入ると、入違ひに垣根つゞきの横町からあたふた出てまゐつたのは、お長を抱へる同朋町のお阿婆でございませぬ。

くま「まあ、いゝ所で逢つた。もう少しでけふも無駄足をするところだつた。さあお蝶、一緒に歸つた。」

長「オヤ阿母おつかさんかい。私やびつくりしましたよ。」

くま「ナニびつくりしましたと。此奴、太おと々しい奴だ。コレお蝶、いゝ加減に年寄を馬鹿にしなよ。姉御が病氣で二三日暇をくれろといふから情をかけて出してやれば、そのまゝ十日も鐵砲とは太い阿魔だ。今日で幾日足を運ぶと思ふ。ヤレ醫者どのへ薬取りに行つたの、ヤレ堀の内へお貼り護符ごまじを頂きにやつたのと、引張るだけ引張りやあがつて、其方の勝手はよからうが、此方の腹は日ぼしにならあ。さあ、湯の歸りでも何でも、ここから直ぐに連れて歸らなきやあ承知が出來ねえ。」

と往來中で口汚くガミ／＼怒鳴りちらしますから、お長は顔を赧らめ口惜しいとは思ひますが仕方がございませぬ。

長「まあ阿母さん、大へん遅くなつて濟みませんでした、もう二三日すると姉さんの看病をしてくれる伯母さんが來ますから、それまでどうか我慢して下さいな。」

くま「なんだと。もう二三日暇をくれと。途方もねえことだ。そんなことがなるものか。コレお蝶、只ちやあ日は過せねえのだぞ。まして三十兩といふ大金のかゝつた手前の體、さう勝手に遊んでゐられて耐たるものか。さあ、今日は何でも連れて歸るからさう思つてゐろ。」

とお阿婆なほも嵩にかゝつて怒鳴り散らしますから、側で見てゐた藤兵衛は氣の毒に思ひまして、

藤「コウ婆さんや、俺あくはしい譯は知らねえが、この子はまだ子供のことだ、さう頭からガミ／＼云はずと、その姉御とやらに掛合つて連れて行きなすつたらいゝぢやあねえか。」

くま「おや、横合から口を出しなざるお前さんは一體どこのお方ですね。」

藤「お前は見忘れたか知らねえが、これでも唐琴屋の二階ぢやあちつとは人に知られた藤兵衛



といふ者だよ。紋目物目にも相應にして置いたが、コウ婆さん、たしかお阿さんとやら言つたつけの、此糸の座敷ぢやあ随分お辭儀を澤山させたぜ。」

くま「ま、さういへば、アラほんただよ、こちらはまあ木場の旦那。」

藤「おれを旦那といふよりは、お長は手前の元の主人だ。それを今聞いてるれば口汚く、子供と思つて輕しめたら、あんまり冥利がよくあるめえぜ。」

と言はれてさすがのお阿も少ししよげ返りましたが、何やら心を据ゑ、

くま「モシ旦那、お前さんはこの子の世話でもなさる氣で、御親切に仰有るのかね。そりや元は主従か知らねえが、今ぢやあ互ひに得心づくで表向は親子だよ。まさかの時は抱への奉公人さ。しかも一切わたしが賄ひで、手取りに渡した二十兩といふ大金。元の主人も糞もあるものかね。まあ旦那、ご親切のお心持があるなら、喰ひ雑用から元利の金をすつかり揃つて返つたら證文を上げませう。旦那は知んなさるめえが、これでも小厭らしく情夫があるから御勘辨ものだよ。」

と齒に衣きせずさも憎體にくていに申しますから、藤兵衛はム、この遣手婆が主人を主人と思はず、

世話になつた客の俺に向つて悪口雜言、ふざけた婆あめと無性に腹が立ち、こんな婆あにお長の體を預けちや置かれぬと、持つて生れた負けぬ氣の江戸氣質の意氣地がムラ／＼と頭を持ち上げてまゐりましたから、

藤「コウ婆さん、そんな入譯は俺にはさつぱり分らねえがね、遣手婆や引手の伯母御おばおに張り込まれちやあ俺も男が立たねえ、といふのは野暮な話だが、實はお長、俺あお前が可哀想だ。乗掛つた船ぢやあねえが、まあ案じなさんな、俺がもやひの綱を引き止めて綺麗に濟ましをつけてやらう。コウ阿母おつかあ、けふはまあお長は俺に預けなせえ。」

といふ所へ平岩の女中が湯上りの浴衣を持つてやつてまゐります。

女「アラ旦那、まだお湯へお這入りにならないんですか。」

藤「なんだ浴衣か。こりや御苦勞々々々。丁度いゝ所へ來た。」

と藤兵衛女中の耳に何やら囁きますと、女中は領いて急いで駆け歸る。お長はモジ／＼しながら、

長「藤さん、何ですか私のことで御迷惑をかけてお氣の毒でございます。」



藤「マア、いゝやな。案じなさんな。」

と言つてゐる所へ風呂の格子から櫻川の由次郎が顔を覗けて、

由「旦那、あつしやもうあがりませうぜ。」

藤「オット由公、ちつと面倒なことが出来て来た。俺あま湯は後にしようよ。」

と、そこへ最前の平岩の女中が戻つてまゐりまして藤兵衛に何やら紙に包んだ物を渡します。

藤兵衛は紙の上から探りあらためて、お阿にそれをわたし、

藤「それぢやあ阿母、いづれ俺が仲人になつてやるから、少ねえだらうがこれで二三日延を  
つけて置きな。」

くま「いゝえ、こんな事をして頂いてはあなたにお氣の毒で。ナニあなた、わたくしだつて譯  
さへ分れば、なにもさう八釜しくいふ氣はございせんが。」

藤「まあいゝさ、いづれにしても俺が呑込んだ上は兩方のために悪いやうにはしねえよ。」

くま「それではこれは頂いてまゐりますが、ぢやあお蝶、お前ゆつくり姉さんの看病をな、私  
やこれで歸るから。旦那、御免下さいまし。」

とお阿は壹兩貫つてほく／＼顔で歸つてまゐります。藤兵衛はお長をつれまして一先づ平岩  
へ戻つて離れ座敷へ落着きます。

長「ほんとにまあ、ひよんなことで御迷惑をかけて、藤さん、どうぞ勘忍して下さいまし。」

藤「なに詰らねえ。あやまる事があるものか。定めしこれには譯もある事だらうが、それにし  
たつて、あのお阿の奴は、此糸なんぞも目をかけてやつたお前の家の遣手ぢやねえか。それを  
お前、たとひどうあらうと元の主人の娘のお前をさ、あんまり面憎いこなし方だから、持前の  
癩にさはつて、いらざる世話をやく氣になつたんだが、お前まあ一體どうした譯で今の身の上  
になつたのだ。」

と、これからお長は小梅のお由の家に厄介になるうちに丹次郎の身を救ふために一時娘義太  
夫となつてお阿の家へ抱へられた顛末を一伍一什藤兵衛に物語ります。藤兵衛はお長の話を  
く／＼聞きまして、

藤「そりやまあ可哀さうに、聞けば聞くほどとんだ苦勞な身の上になつたもののだ。しかしも  
う案じなさんな。これから俺がその姉御といふ人に逢つて、お阿の方は綺麗さつぱり形をつけ



てやるから。」

と話してをりますうちに、女中が酒肴を運んでまゐります。

藤「それからね姐さん、俺はいゝが、この子に御飯を早くやつて呉んな。トキニ由公はどうした。」

女中「由さんはさつき牛の御前さまの所に立つていらつしやいましたよ。」

藤「彼奴また悪く勘ぐつて外すつもりでゐるやあがる。ハ、ハ、ハ。お前の情夫を風邪でも引かせるといけねえから後で呼んで来て呉んな。」

女中「まあ旦那は御冗談ばかり。直ぐに呼んでまゐります。」

と女中が下つて行くとお長は銚子を取り上げて、

長「藤さん、お酌をいたしませう。」

藤「まあ、俺にかまはずに、お前は御飯を食べて一ト足先へ歸んな。姉さんが案じてゐるといけねえから。」

長「いゝえ、私は淨泉寺のお祖師さまへお詣りして歸るつもりで出ましたから、いゝんですよ。」

藤「淨泉寺ツて、お前朝湯から直ぐと深川へ行くつもりか。」

長「いゝえ、深川のぢやありませんわ。この直き土手下の、ソラあのお屋敷の際の。」

藤「おゝさうか。あの小梅の瓦を焼く手前のか。でもここからは鳥渡あるぜ。」

長「三町ばかりありますかしら。でもここいらの人は皆んな隣りへ行く位に思つてゐますわ。と言つてゐる所へお長の膳も出、由次郎も歸つてまゐります。」

藤「どうした、由公。牛の御前で立ちン棒か。悪くまた粹をきかせたもんだの。」

由「エへ、ナニさういふ譯でもねえが、旦那、今日は私ちつとお暇を頂いてようござんすか。」

藤「そりやいゝが、何故よ。どこか約束でもあるのか。」

由「いゝえね、實は瀧亭の鯉丈と茶利屋と私を一座にする御座敷があるてんで、この間から里八が約束をしましてね。」

藤「さうか。そんなら丁度いゝ。俺もお屋敷の御用があるから、今日はいちんち眞面目にならう。お前は直ぐに行つたがいゝぜ。」

由「いゝえ私はお晝過ぎからでもよろしいので。」



藤「ナニ俺ももう直ぐに出掛けるから遠慮はいらねえ。その代り鳥渡頼みがあるが、御苦勞だが山の宿の河岸へ言傳をして下せえ。」

由「山の宿てえと延津賀さんの所で。」

藤「さうよく。夷講には間違ひなく来るやうに、それから宮戸川のお鐵も来る筈になつてゐるから、一緒に誘つて河岸から船で来てくれろと、さう言つて呉んな。」

由「へい畏りました。ぢやあ旦那、勝手なやうですが御免を蒙つて。姉さん、ごゆるりと。」

と由次郎、藤兵衛の顔を見てニヤリと笑ひながら出てまゐりますから、藤兵衛は呼び留めて、藤「オイ由公、悪推ばかりしねえで、忘れずに山の宿へ寄つて呉んなよ。土手から向ふへ渡りましたがツイ失念をいつものお株をやつちやあ不可ねえぜ。」

由「ナニあなた、その御用で乗切るんだから忘れませうものか。……しかし何ですよ。向島も便利になりましたね。渡しの舟が今では六人で替り／＼に渡しますぜ。」

藤「いやに又詳しく穿つな。船頭の數までは俺も知らなかつた。しかし開けたものよなあ。昨日まで竹屋の渡しを呼ぶのに聲を喧らしたものだつたつけが。故人になつた白毛舎の歌に、

須田堤立ちつゝ呼べどこの雪に

寝たか竹屋の音さたもなし

といふのがあるが、この歌なんぞももう少し經つと、ここは山谷舟を土手より呼びて山谷堀へ乗切りし頃の風情を詠めりとか何とか前書がねえと分らなくなるぜ。イヤこれは出舟のもやひを悪く引張つた。勘忍々々。」

由「旦那、けふはいつそ廢しにしませうか。」

藤「なぜ。」

由「でも、どうもちつと跡の幕が氣になるやうで、かう何となく後髪を引かれるやうな心持で。」

藤「ハ、ハ、ハ。莫迦を云はねえで早く行きねえ。」

由「ぢやあまあ思ひ切つて、へい御機嫌よろしう。」

と由次郎、平岩を立ち出で土手へ出ます木戸口に平岩の女中衆が大勢並んでをりまして、女中「へい御機嫌よう、またお近いうちに。オヤ由さんばかりお退ちなのかい。旦那は跡からかえ。」



由「旦那はこれから後幕あともくがあらあ。いつそ旦那を先へ歸して、俺を置きたいだらう。」

女中「厭だよ、この人は。いけ好かない。」

由「とんだ内端なおとなしい子だぜ。」

女中「旦那、由さんがあんなことを言つてます。」

と何やら他あいなことに笑ひ興しながら由次郎、やがて向島の土手へかゝりますが、ちやうど時は正月の十四日あまりのことで梅枝やうやく綻びそめる梅曆のころ、川の水も紫色に霞みわたりました、折柄弘福寺の巳の刻の鐘の音、瓦焼く煙とともにボーンとうすく消えゆく川向ふ、今戸邊でございませう河岸揚の材木の木遣の聲が風の間に、遙かに定使ぢやうづかひを呼ぶ法螺の貝がブー／＼と聞えてまゐります。まことに長暢ながどやかな景色でございます。さて後に残りました藤兵衛はお長とともに一杯やり、腹をこしらへまして、これからお長をつれてお由の家へ参らうといふ、お由、藤兵衛の邂逅であひはちよつと一息入れて申上げます。

## 第十六回

さて小梅の女髪結お由は暮から引續いてふとした風邪が元で暫く病の床に臥してをりましたが、ちやうど向島の須崎村にお由の伯母で後家がをりまして、唯今伯母は國許の本家に據所ない用事があつて留守のところから、その留守居がてら出養生にこの須崎村の寮へ来て居ります。何分手がございせんからお長を四五日借りました、何かと身の廻りの世話をして貰つてをりますが、ちやうど今日はお長が淨泉寺のお祖師様へ日参に出掛けましたそのあと、幸ひ天氣も春らしく温かなので大ぶ氣分もすぐれ、徒然でございますから枕元の本など讀み散らしながら氣を紛らしてをりますところへ、お長が藤兵衛を伴ひまして歸つてまゐります。竹の木戸を明けてお長は縁から上へあがり、お由の枕元へ坐りまして、

長「姉さん唯今戻りました。氣分は何ともありませんか。歸りがいつもより遅かつたでせう。」

と途中でお阿に逢ひ往來中で怒鳴り散らされたところを、廓ちやうの家之最眞客で顔見知りの藤さんといふ方に難儀を救はれて、これ／＼の譯で今その方を門口までお連れして來たと手短かに譯を話しましたから、お由も喜びまして、

由「おやまあ、さうかえ。御親切なお方だねえ。早くこちらへお通し申しな。こんな穢い所だ



が私からも一言お禮を申したいから。」といふのでお長は藤兵衛を中戸口から請じ入れます。

藤「いゝのか、お鹽梅あんばいが悪くてお出でだといふのに。」

由「いゝえ、もう今日は大きによろしいのでございますから、どうぞまあお上りなさいまして。取亂してをりますからお出迎ひ致しませんから、どうぞその儘。お長ちゃん、お前お茶の支度をしな。」

藤「イヤ私ならどうぞお構ひなさらずに、では遠慮なく通りますぜ、御免なせえ。」

と藤兵衛お由の部屋へ通つて座につきますから、お由は床の中から半身起き上りまして、

由「まあ、そこではあまり端近はしぢかでございませう。どうぞこちらへ。」

と上座へすゝめながらひよいと顔を見合せますと、七年前、佐倉の宿中榎屋しゅくちゅうえんがといふ旅籠屋で親子して助けられたその時の藤兵衛でございますからお由は吃驚いたしました。

由「マアあなたはたしか七年前、佐倉の宿の榎屋の家でお助け下さつた旦那様ではございませんか。」

藤「さういふお前はあの時のお由さんであつたか。ナントまあ、不思議なところで逢つたもの

だ。」

と藤兵衛も不思議な再會にたゞ、吃驚いたすばかりでございませう。お由は嬉しさに思はず床の上へ起き上りまして両手をつき、

由「あの節はいろ／＼とお世話になりました。となまなか言葉ではお禮も言ひつくせぬほどの大恩。ほんとにまあ思ひがけない所でお目にかゝるものでございませうねえ。さう云へば、あの時とちつともお變りがなくつて、いつもお元氣で結構でございませう。」

と病のせるで氣が弱くなつたものかいつに似ず涙をこぼして、何やらうら羞しげに差俯向いてをりますのは、さすがに情なさけをうけた昔を懐しむ情じやうからでございませう。

藤「イヤさう云はれるとまるで夢を見るやうな心持だ。佐倉で逢つたその時はたしかお前が十九の時、なんでも厄年だから成田さまへ參詣に行く途すがら、親子づれで旅稼ぎをすると聞いて、どうせ旅寢の仇し枕を重ねたすれつからしだらうと思ひの外に、藝も身も立派な座敷の取廻し。」

由「マアあひかはらずお口の巧いこと。七年跡もその調子の嬉しがらせを眞に受けて、今日ま



で盡した心の操。さぞ難有迷惑とはお思ひでせうが、まあ旦那、どうぞ勘忍して下さいませよ。」  
 藤「勘忍とはこつちで言ふことさ。あの時は俺も成田から歸ると直に友達が和めぐりに行くといふから、母親育ちの怠け癖で、同氣求めた連中と、阿房をつくして伊勢浪花、京の女郎で長崎の味も見物しようと、うかれ歩きその間に、江戸では大事の伯父が病死さ。留守中には出入のお屋敷を五軒もしくじつて御用止、そんな事とは知らないから、どうせ出序にと西國中國足に任せて歩くうちに、路銀の金は使ひ果し、詮方つきて御出入の國家老へ十兩二十兩と無心の借が十七八個所も出來ての、それが残らず江戸へ知れたから耐らねえ。金を使ひ散らして遊ぶのもいゝが、百里二百里の遠方にゐて、親をも家をも見返らねえ不孝者がどこにある。その上伯父が死んでも葬式の供にも立たず、だいいちそれでは伯母御へ濟まぬと、その伯母といふのは實は家付の娘で阿母おふくろの姉での、義理ある仲の言譯といふんで、こつちは知らずに遊び盡してお江戸入りといふその日に忽ち勘當よ。それから暫く上總の親戚へ預けられてゐたが、ちやうどその時分お前のことも折々は思ひ出して、あの時江戸へ歸つたら必ず來いと言つて置いたが、今頃どこにどうしてゐるだらうと、案じちやゐるたが勘當の身ではどうせ自由もならず、

それからやつと二年ばかり過ぎて宅へ歸り、いろ／＼探して見たが、お前の行方は少しも知れず、吉原深川あたりの岡場所も人知れず尋ねて見たのだが、そつちの方にも似寄りの女はゐらず、もう二度と會へねえ縁だと諦めながらも忘れる間はなかつたぜ。それがまあ、こんな所に無事であるようとは思ひも掛けねえ事だつた。」

由「いろ／＼御心配かけて濟みませんでしたねえ。私はあれから佐倉を發つて小見川へ行き、東の方を廻つて江戸へ歸らうと阿爺おやじさんが言ひますから、はやく宅へ歸りたいと思つて氣がせいたのに、生憎私が風邪をひいて寢込んだり、阿爺さんがまた煩わづらつたりして、やうやく六七十日目に宅へ歸りましたのさ。宅へ歸つてからお尋ねしようと、お前さんのことをいろ／＼諸方で訊ねて見ましたが、どうした譯かさつぱり分らずにしまつて、そのうちに阿爺さんは老病でなくなり……。」

藤「なに、阿爺おやじは亡くなつたのか。」

由「はい、まだ死ぬほどの年齢でもありませんでしたが、やつぱり長の旅と貧故の苦勞が積り積つて、可哀さうな事を致しました。それから今この家にゐる伯母の世話になり、やつとまあ



これまで凌いで来たやうな譯でございます。一度は藝者になつて、阿爺さんにも少しは樂をさせたいとは思ひましたが、そんな浮氣な商賣をしてゐては、萬一お前さんにお目にかゝつた時、それこそ情も誠もない女だと思召されてはとそれを案じて、旅から歸ると直ぐに三味線を捨て、結びつけぬ髮結となつて、女を相手に糊口くちぐちするのも、みんなお前さんに固く契つた操ゆゑでございます。藤さん、どうぞご推量なすつて下さいまし。」

と一別以來の四方山に花が咲いてをりますところへお長が茶を淹いれてまゐります。

長「姉さん、お茶がはいりましたが、お茶菓子は。」

由「あいにく何もなかつたねえ。」

長「いつもの物でも取つて参りませうか。」

由「あゝ。そんなら秋葉さまの裏門を抜けずに、武藏屋の横手を眞直に行くといふさうだよ。」

長「えゝ、此間もさう行きましたの。どちらを買つて來ませうか。」

藤「お長坊や、俺なら何もかまはずに置いてくれ。それに先刻さつき平岩へ頼んで置いたものが直きにもう届くだらうから。」

## 第十七回

由「おやまあ、それはまことにお氣の毒さまに。お長、お前は早く行つておいで。」  
 長「あい姉さん、そんなら兩方取つて來ようね。」  
 由「あゝさうしてお呉れ。お祖師さまへもあげるからね。」  
 長「あい。そんなら藤さん、ちよつと行つて参りますから、姉さんをお頼み申します。」  
 とお長は譯あやありげな姉と藤兵衛をばづすつもりで、氣をきかしていそ／＼と外へ使ひに出てまゐります。

お長が氣を利かせて外へ使ひに出てまゐりましたから、藤兵衛は枕元へ寄添ひ、お由の背中をさすりながら、

藤「ヤレ／＼まあ、知らぬこととは言ひながら、お前にも永々苦勞をさせたなあ。しかし、もうかうやつて邂逅あひまひつたからは大丈夫だ。なにかと案じねえで、大船に乗つた氣でゐなせえ。」



由「さうやさしく仰言つて下さると、ほんとに眞から嬉しうござんすけれど、とかく殿御といふものは浮氣なものだから、この先が案じられてなりません。」

藤「なぜ。さう疑られては可哀さうだぜ。」

由「いゝえ、疑るわけではないけれど、そりやまあわたしの心がらと言へばいふものの、お前さんの御親切を身にしみんと思ひ込んで、一生邂逅はないでも女の意地を立て通すつもりで、馴れない女髪結をしながら、持つて生れた氣性から女伊達だの俠女だのと、朝夕苦勞をするうちに、お前さんはわたしのことは忘れてしまつて、唐琴屋の此糸さんと深いお仲だと、妹のお長がいつも噂でございますもの。」

藤「ナンダその事を根に持つてか。ナニそれもお前が戀しさゆゑに。此糸がちつとお前の面差に似てゐるところから、眞からかうといふ氣はさら／＼ねえが、まあ當座の此方の氣保養さ。それに藝者の米八も世話をしたが、これは實はちつと込入つた譯があつて、腹に理合のあることだが、其奴ア今はちよつと言はねえ。まあ、そのうちに詳しく話す時も來よう。」

と何やら思はせぶりに話してをりますところへ、平岩の出前が岡持を提げて臺所へ這入つて

來て、料理を板の間へ置いて歸つてまゐりますから、お由は床を出て料理を片寄せ、又力なささうに床の上へ戻り、

由「まあ澤山にお料理を頂いて、……早くお長が歸るといゝのに。」

藤「ナンダお前小用かと思つたら、平岩の使が來たのか。さうならさうと云へば俺が運んでやるのによ。そしてまだ用があつたんだ。」

由「御用ならいま直きにお長が歸りますわね。」

藤「ナニさうぢやねえ。平岩の使ひにお前の好きな玉子蒸しを誂へてやらうと思つてさ。」

由「まあ藤さん、お前さん、そんなことを、まだ覚えていらつしやるの。」

藤「ハ、ハ、ハ。浮氣どころか、とんだ情ありだらう。七年あとの合宿で、三日一座の其時に、惚れた氣から食物の好き嫌ひまでチャンと覚えてゐるぜ。」

由「藤さん、あたしや嬉しうござんすよ。」

藤「ドレ／＼。その嬉しい顔といふのを見せな。お／＼可哀さうに、大ぶ瘦せたなあ。」

由「お醫者さんが仰有るにはね、全體氣から出た病氣だから、時折は髪も結つたり湯へも這入



るが、いゝとお言ひだから、二日置きか三日置きにお長の肩へつかまつて、お湯までそろゝ行きますけれど、なんだか自分ながら力がなくつて、やつとのことで歩くんですよ。」

藤「道理で長病ながわづらひにしちやあ、垢も汚れも見えねえで綺麗だと思つたぜ。さあ、またさうやつて起きてゐると、後が障さはるといけねえから、横になんな。薄着うすはちや寒からう、夜着をかけてやらうと。」

藤兵衛何かとやさしく看護をしてをりますところへお長が菓子包みをかゝへて歸つてまゐります。

由「あゝお長ちゃんかい。お前その臺所の板の間にね、藤さんがお取寄せの物があるから、それをこつちへ持つて來てね。こんな穢きたい所だけれど、他ほかの方ちやあなし、まあ御免蒙つて、ここで御勘辨願つて置かうよ。」

藤「あゝ。ここがいゝともく。そしてお前もちつと何か食べて見るがいゝ。」

由「えゝありがたう。けふは何ですか久し振りにお前さんにお目にかゝつたら、大へん心持がしつかりして來たから、少し頂いて見ませう。お長ちゃん、藤さんのお燗を早くおしよ。それ

から冷めたものは雪平ゆきひらかお鍋でお温めよ。」

藤「お長、お前もそこがすんだらここへ來ねえ。」

長「あい。いまお肴を焼いてからまゐりますわ。」

由「さあ藤さん、お燗がつかましたよ。どうぞおはじめなすつて下さいな。」

藤「ぢやあ久し振りでお酌をしてもらひやせう。」

とお由も床から下りまして、御納戸おなんど紬ちゆうの襦じゆ袍ぽうを引かけて長火鉢の側へ坐つて、これからお酒がはじめますが、さて藤兵衛は久し振りの四方山話にその日はここに遊び暮らし、夜になつてから、お由にはこの先月々何不足なく面倒を見てやるから、安心をしろ、またお長の給金も返して元通りお由を手許へ引取る相談などをなにくれとなくいたしまして、その夜は機嫌よく歸りました。お由、お長の喜びは一方ではございませぬ。すると四五日たちまして、藤兵衛何か據所ない用事があると見えてあれきり姿を見せませんから、お由もすこし心配になり、お長ともく心に案じ待ち暮らしてをりますと、ちやうど朝からしとく春雨が降り出しまして、なんとなく心の閉ぢる午過ぎ頃、



「チトお頼み申します。木場の藤さんはこちらにお出ででございますか。」

と門口へ年の頃四十ばかりの見慣れぬ人が尋ねてまゐりましたから、お長が出まして、

長「いゝえ、まだお見えになりませんが、何か御用ならば私どもでも丁度お待ち申してゐるところでございますから、いらつしつたらさう申上げませう。」

と申しますと、かの男はどうやら心配顔で、

男「ハテナ、まだお見えになりませんか。それあ困つたことになつたなあ。悪くするとむづかしいことになるが、公沙汰おぼやけになると藤さんも證あかりの立つまでは暗い所へ行かなくてはならねえが、今のうち早く内済に頼めばいゝが……」

と門口に立つて何やら氣にかゝる獨言を申してをりますから、お由は奥で聞きとりまして、ひよつとしたら藤兵衛の身になにか大事でも起つたかと、この二三日案じ暮らしてゐる折柄ゆゑ、胸にギツクリいたして、

由「お長や。まあその方をこちらへお通しおしな。」

長「あい。そんならもし、こちらへお上んなさいまし。」

男「はい。それでは御免なさいまし。」

と上り口へ上りますから、お長は茶など出してをりますところへ、お由も奥から出てまゐります。

由「まあお茶でもお上んなさいまし。もう今日あたりは見えるだらうと、家うちでも心待ちに待つてゐるところですから。」

男「あゝ左様でございますかい。なるほど、これ結構なお住居だ。どうも藤さんも方々へ金が入いんなさるから、つい無理なこともしなさる筈だ。」

と意味ありげな獨言を聞えよがしに申しますから、お由は胸さわぎを押へて、藤兵衛の身上に何事か起つたかと聞かうとするところへ、臺所口から古纏袍を着ました風體のよくない破落戸が聲をかけ、

ごろ「ねえ、もし五四郎さん、ちよいと。」

とかの男を呼び出しますので、最前の男は立上つて、

男「おい何だ、岡八か。頼んだ理わけならもう少し待たつし。」



「ごろ」それがよ、とても内々には行きませんぜ。」  
男「さうか。其奴あ困つたものだ。」

とあとは何やらひそ／＼話でございます。氣にかゝる藤兵衛の身にふりかゝる「事とはそも何事でございませうや、第十九回に申し上げます。」

## 第十八回

話頭かはつて唐琴屋の丹次郎、近頃では米八の世話でかの中の郷の佗住居を引揚げまして、深川仲町裏に一軒手頃な家を借り受けまして、ここに住んでをります。さう／＼女の仕送りばかりでといふ譯にもまゐりませんから、まあほんの名ばかりの商賣に近所の文使などをいたし、その合間には、もと／＼文字もありその方の趣味もございますから俳諧の點者などをいたし、或ひは二上りの新作、都々逸の新文句を拵らへたりしまして、そこはまた岡場所のことでございますから同好の友達なども寄り集つてまゐりまして、素人茶番など催す折には落の師範

をいたすなど、まあどうやらかうやら憂さ晴らしに日を送つてをります。家が近いから米八も毎日座敷の行きかへりには顔を見せに寄りますが、惚れた男を手許に引取り、逢瀬は自儘になりましたものゝ、さてまた氣になりますのは世間の外聞でございます。男妾でも圍つておくやうに思はれたら、それこそ誠に本意ないこと、しかしまあ幸ひと丹次郎が體裁だけでも素人俳諧の點者などいたしてをりますから世間體はつくろへる譯で、米八も大きに肩身が廣いやうな譯でございますが、なにを言ふにも場所がらだけに、まるで女護ヶ島へ業平を引取つて來たやうなものですから、お長の方の苦勞は一段落ついたかばかりに、これがまた一苦勞で、滅多に目が離されないといふやうな次第。どうも二ついふことではないもので、ちやうどけふも朝からの梅日和、空は青々と晴れ渡り陽ざしは一日々々と暖いが、日蔭がちな路次を吹く風はまだチト寒いといふ二月中旬の晝下り、丹次郎の家の表の障子をそつとあけて外へ出ましたのは年のころ二十一、髪は洗ひ髪の島田に結つて、その鬘がちつとほつれて横へ曲り、湯上りの素顔に眼の縁がほんのりと櫻色に染つて、まだ今の上氣が下らないといった風情、ちかごろ米八と肩を並べて賣出しの仇吉といふ藝者でございます。路次の左右を見返りながら、そつと障



子をしめて、なにやら捨ぜりふめかしく、

仇「その嫉妬はあべこべだよ。」

といひながら片手に浴衣をかゝへて褌をとり、まじめな顔になつて路次を出かゝるところへバツタリ出會つたのは米八でございます。お互に顔を見合せて「おや」「あら」といふ譯で、さすがの仇吉ギツクリいたしました。が、何喰はぬ顔で、

仇「いまお湯へお出でかい。」

と言はれて米八はかねてから二人の仲をうすく、嗅ぎつけてをりますから、これも何喰はぬ顔で、右手に持った浴衣を左の脇に抱へ直しまして、銀笄ぎんかんの首あたまにつけた珊瑚樹の大玉を細い指でチョイと摘つまんで、眉毛を八の字に寄せてたぼの下を搔きながら、

米「あゝ。丹さんはもう起きたかい。」

仇「エ、あゝ、たしかもう起きてお出でだらうよ。」

米「たしかお出でだらうつて、お前さん今あすこの家から出してお出でぢやないか。」

仇「いゝえ。私や外から聲をかけたばかりだよ。と何も正直に言譯をするにも及ばなかつたつ

け。用があれば行きもすらあね。……オ、寒い。なんだか湯ざめがして來た。御免なさいよ。とその儘行過ぎてまゐりますから米八はその小癪な仕打がグツと胸にさはつて、思はず駈け寄り、障子を外からガラリとあけると、當の丹次郎は何か机に向つて俯向いたまゝ書きものに氣を取られてをりましたから、今歸つて行つた仇吉が小戻りして來たのだと思つて見向きもしないで、

丹「ナンダ忘れ物でもしたのか。」

米「ア、まだ言ひ残したことがあるよ。」

と言はれて丹次郎は始めてびつくり、

丹「ナンダ米八か。」

米「さうだよ、私さ。なにも丹さん、そんなに吃驚するにもあたらないぢやないか。私だつて來られない宅うちぢやあるまいしさ。いけなければ路次口へ、「但し仇吉の外入るべからず」と札を出して置けあよかつたよ。」

丹「また詰らねえ事を始めやがる。いま、櫻川の三孝さんが來たからよ。」



米「へえ。三孝さんが島田に結つて来るのかい。茶番ぢやあるまいし、人を白痴にするのもいい加減におしよ。」

と米八、大分中腹で、有合ふ茶碗へ土瓶の茶をついで一口呑みましたが、

米「オ、冷たい。まるでこれあ水ぢやあないか。ばか／＼しい。火鉢の火ぐらるおこしてお置きなさいよ。このとほり夢中であるんだからねえ。」

丹「ナンダ来る匆々、なぜさうまた叱言をいふんだ。」

米「言つたつていゝ譯があるから言ふんだよ。エ、私やもう口惜しい。」

といきなり茶碗を臺所へ投げつけましたから、茶碗は水甕へあたつてガラカチャンと割れます。

丹「おい米八、何を腹が立つか知らねえが、隣近所もあるぜ。いゝ加減静かにしねえか。外聞のわりい。」

米「仇吉さんとは静かにおしなね。私や夫婦だもの、なにも遠慮はいらないよ。」

丹「おい米八、お前も詰らねえことを、素人くさく妬心を言ふが、仇吉は今しがた障子越しに

なんとか言葉をかけて行つたが、俺あろくに返事もしねえのに悪推も程があるぜ。」

米「さうかねえ。わたしの悪推かねえ。して見ると、仇吉さんは外から聲をかけて、なにかの合圖に筈を抛り込んで行つたのかい。とんだ二番目狂言だね。」

丹「かんざし。なんだか分らねえ事ばかり言ふぜ……。」

米「なぜ分らないのさ。丹さん、これを御覽よ。これあ仇吉さんがふだん差してゐる向ふ梅に仇の字を彫つた差込の筈だよ。この筈がなんでここにゐるのさ。」

丹「嘘を言へ。そんなものがここにゐるものか。」

米「アラ呆れたね。さあ、この筈だよ。よく眼をあいて御覽な。」

丹「ふうむ。此奴あ何がなんだか俺にも解せねえ。不思議な譯で疑りをうけるものだ。」

と丹次郎どこまでも空慌けてをりますから、米八は「あゝ口惜しい」といきなり丹次郎の胸に獅噛みついたまゝ、しばらくは物も云ひえないで泣き咽びますから、丹次郎は急にいとしくなり、やさしく米八の背中を撫でてやりながら、

丹「米八、まあさう泣かねえで俺の言ふことを聞きな。なるほど仇吉はこれまで親切らしい事



を言つて、時々ここへも寄つて乙なことを言ふ時もあるが、おれが何でそんなことで外へ心を移すやうなことがあるものかな。考へても見ねえ。だいいち、かうして俺がその日にも事を缺くはかない身の上で、朝晩のこともみんな手前の厄介になつて、中の郷から引越すの何だのと物入りつゞきのその中で、着物の一枚づつも拵へてくれるお前に對して、この俺がどうして浮氣をするなどと、そんな不實をして濟むものかな。だからよ、もう氣をしづめて、……大丈夫だそんな事は、さあもう安心して涙を拭きな。」

米「それあねえ丹さん、私がなまなかお前をかうして置いて、何かにつけてお前の手助けといつたところで、これが夫婦となつて見りやあ恩でも世話でも何でもありやしないよ。だけどねえ丹さん、お前にはお長さんといふものもあるんだし、又そのほかにこんな仕儀があつたんぢやあ、あんまり私が可哀さうぢやあないか。といつて、私がお前をかうしておくから、なんで彼奴、男妾を圍つて置きやあがると、世間の口は煩いからね。もしお前がそんな一言のことでも氣にかけやしないかと思つて、私や丹さん、お前の前だけれど並大抵の氣兼ねぢやないんだよ。それをまあお前さんは、どうすればそんな氣になれるんだらうねえ。それを思ふと、私や口惜

しくつて口惜しくつて……。」

丹「まあその愚痴も女房じみて嬉しいが、もういゝ加減にしねえ。」

と米八

米「止しておくれよ。明日の晩向島へ行つて、澤山仇吉さんをさうしておやりな。」

丹「明日の晩仇吉を。ナンダ思ひもつかねえことを言ふぜ。」

米「え、まだ白ばつくれて。……思ひつかなきやこれを御覽な。」

と米八懐から一通の手紙を出して丹次郎に見せます。

いよ／＼明日は例の  
約束にてお出のよし幸  
ひ米印は木藤の催しに  
て今助大吉櫻川一同に  
て芝居の見物と申候左



様に候へば夕方にかの  
所へまゐり待合申候間  
きつとく聞違ひなく  
しかしお客がわかれと  
なり不申候はゞたのし  
みにいたし候甲斐もな  
く候くれくも程よく  
其座をはずし被下候や  
う願上候かならずく  
米印の氣のつかぬやう  
に

米「名宛はこの通り破れてないけれど、昨夜一座のお座敷で、仇吉さんの懐から落ちたこの手

紙、書き手はお前さんの手で書いたお楽しみめの約束文ぶみさ。さあ、よく目をあいて御覽よ。これでも思ひもつかないと言ふのかい。」

と證據の手紙を突附けられましたから、丹次郎言譯もならずしどもどしてをりますところへ、表の障子をガラリとあけて呉服屋の若い者が、

若「へいお召物が出来ました。」

と越後紬の鼠の棒縞へ、黒七子の半衿のかゝつた袂のある襦袍を出しますから、丹次郎怪訝けげんな顔で、

丹「オット呉服屋さん、お前お門違ひぢやねえのか。宅うちぢやあ詠へた覚えはねえぜ。」

米「大かた仇吉さんでも寄越したんだらうよ。……お前さん御苦勞さんでしたね。たしかに請取りましたよ。それからね、もう一つの羽織の方は衿をよく返るやうにして、早くしておくれとさう云つておくんなさいよ。」

若「へいそれはもうお詠へなすつてあるのでございますか。」

米「あゝ。五六日あとに頼んであるから。」



若「あゝ左様で。畏りました。歸りましたら早速さう申します。御免下さい。」

と呉服屋は詭物を置いて歸つてまゐります。米八は急に機嫌を直してニッコリ笑つて、

米「丹さん、御不承でもちよつと着て見せてお呉れ。丈や袖が間違つてゐるといけないから。」

丹「ナンダお前のお詭へか。道理で變だと思つたぜ。さうか。そりやどうも有りがてえ。」

とこれもニコつきながら立上り、氣の毒さうに小さくなつて襦袢を引掛けるのを米八は見て  
さも嬉しさうに、

米「ちやうど宜ささうだねえ。なんだねえお前さん、そんなに可恐々々着ることもないぢやないか。繼ッ子が他所着でも拵へてもらやあしまいし。」

と云ふところへ表から櫻川由次郎が障子越しに、

由「米さん、こつちかい。」

米「おや由さんかい。お早いね。」

由「ナニもう早かあねえよ。皆んなそろ／＼出掛けるさうだが、俺あちつと用があるから、高雄の茶屋へ行つてゐるからね、さう言つといて呉んな。」

と聲をかけて通り過ぎますから、米八も中腰になり、

米「さあ、私もそれぢやあ支度をしよう。丹さん、お前今日いまの手紙の所へ行くときかないよ。」

丹「なにが行くものかな。こんな可愛いゝのがあるのに。」

米「なんだね不景氣な。子供瞞しみたいに。」

丹「それあいゝが、お前藤公に實め落されねえやうに用心しな。」

米「お前ぢやあるまいし。ぢやあ行つて來ますよ。」

と米八あとへ心を残しながら出掛けてまゐりますが、さてこの喧嘩、どうせこんなことでは納まりのつきさうな様子はございません。

## 第十九回

さて話頭後へ戻りまして、かのお由の宅では、お由とお長の蝶吉とが突然譯ありげに尋ねて



まゐりました五四郎とか申す男を相手に致して藤兵衛のまゐりますのを今か／＼と待つてをりましたが、仲々やつて参りませんから、最前それとなく五四郎が話のうちに藤兵衛の身に何やら氣に懸るの事の起つたやうな言葉つきがありましたゆゑ、お由は忪へかねまして、茶を替へながら、

由「あの寔に失禮でございますが、先程お話のお言葉の前後をうかゞひますと、どうやら藤兵衛さんに何か大事が起つた御様子でございますが、一體どうしたのでございます。」

と訊ねますと、五四郎は得たりとばかり膝をすゝめまして、

五「イエそれがどうも飛んだことだね。御承知のとほりあの藤さんは木場の材木屋では第一番の富豪、それにあの通りの氣性なお方だから世間も廣いし、誰一人指をさすものもありませんが、どうも今度のことはちつとむづかしい理になりましてね。……といふのは外でもありませんが、まああゝやつて諸方附合も廣いしするから自然無駄金が際限なく入るとのこと、大分近頃は内證が廻つたさうだね。人の身代なんといふものは寔に分らねえものですよ。それで今日私がこちらへお尋ね申したのは、外の事ではない、下谷同朋町のお阿といふ婆さんの抱へで

お蝶といふ子の給金を……。」

と聞きましたから、お長はお由と顔見合はせてギツクリ致しました。

由「そのお蝶といふ子のお給金を藤さんがどうかなくなりましたか。」

五「いゝえさ、そのお蝶といふ子の給金を藤兵衛さんが残らず勘定して婆さんに渡しなすつたさうですよ。ところが間の悪い時は悪いもので、その金を藤さんが歸ると其の晩盗人が這入つて盗んで行つたんだね。そりやまあ、唯だかうお話しすれば藤さんには関係のないことのやうだが、悪いことは出来ないもので、その盗人の這入つたあとへお前さん、藤さんの鼻紙袋が落ちてゐたのさ。中には證據の名前の書き物が這入つてゐるからこれは何とも言開きが立たねえ。そこで婆さんも氣がついて、はゝあこれは藤さんが一度渡した金をその晩に盗みに來たのに違ひないと推量したから、早速その紙入を證據に表向に訴へるとゴタクサ返してゐるところへ私が丁度行き會はしたのさ。聞いて見れば満更藤さんと知らねえ仲ではなし、ほかの事とちがつて聞捨てにもならないから、實は昨日から藤さんをお尋ねしてゐるんだが、さつぱり逢へないので困つてゐるんです。何しろ内々にはならないと聞いてみれば、どうもこれも仕方がねえか



ら、まあ半金でもお阿に渡してやつてそれで内済にしたいものだとは私は思つてゐるんで、それでこちらへお尋ねしたやうな譯なんで……。」

と語つてをりますと、最前から表へ廻つて待つてをりました岡八といふかの破落戸風の汚い男が、

岡「五四郎さん、藤さん來ねえやうならお氣の毒だが、代官様へお阿婆さんをやりますぜ。」

と聲をかけますから、五四郎いよく困り入つた顔をいたして、

五「それは困つたなあ。どうだ岡八、お前今日一日だけ婆さんの方を延して貰ふやうに言つて呉れないかな。こんなことになるとは、よもや藤さんは知んなさるめえが、何にしても弱り入つたものだ。」

と腕組をして、いかにも困り入つたやうな思案に沈みますから、さすが利發のお由も、藤兵衛の身にふりかゝる大事と聞いては氣が氣ではございません。同じく途方に暮れてオロ／＼してをりますお長に向ひ、

由「ねえお長、よもや藤さんに限つてそんな事はおあんなさるまいと思ふがねえ。」

長「エ、もうそんな可<sup>こ</sup>恐<sup>おそ</sup>いことが、あの方に限つて人の物を盗るなんて……。」

五「それあもう仰言る通り、藤さんに限つてそんな事のねえ事は分つてゐますのさ。たゞ紙入といふ證據の品があるばかりに、お阿婆さんにしたつて、藤さんが置き忘れてお出でなすつた位のこととは思はねえでもねえのでせうが、そこがそれ<sup>お</sup>女<sup>め</sup>が兎相で盗られた金、取つく島がねえものだから、邪も非もかまはずに、たゞもう一途に藤さんを相手どる氣になつたといふのは、あの婆あが持前の強慾もので、慾の皮が張つてゐるだけに、そこはまた金づくでどうとも話が纏まらうと思ひますのさ。」

と聞いてお由は藤兵衛の此場の難儀を金ですむなら救ひたいと思ひましたから、

由「五四郎さんとやら。それでは如何でございませう、女住居に三十金といふ大金は迎もございませうが、少々ばかりの貯へと、それに私の着物でもどうかしましたら、半金ぐらゐるは纏りませうから、それでお阿さんの方はなんとか内済にして頂くことにして、ねえお長や、悪いものだけれど、あたしの何か着物を出して御覽。」

とこれより貯への金と衣類筭など取集めまして十五六兩の品を風呂敷に包んで四五郎に渡し



ます。五四郎はその品を仔細顔に改めて請取り、

五「これはまあ飛んだ御迷惑をお掛けいたしました。私は藤さんをお尋ね申すばかりに來たんだが、どうも仕方がねえ、お互ひに乗掛つた舟だ。それではこの品を七ツ屋へやらかして、まあザツと半金といふところ。これでお阿を何とかなだめませう。しかし藤さんが全く知らねえ事で、後日本當の科人よふにんが出れば、この品も忽ちお手許へ歸る譯だ。念のためによく一つ數をお調べなすつて、書附にでもしてお置きなすつたら……。」

由「いゝえ。大概覚えてをりますからよろしうございます。それよりもお阿さんとやらの方が一時も早く濟むやうにお願ひいたします。……いづれ藤さんが見えたら、あなたのお話を致しますが、失禮ですがお宅はどちらでございます。」

五「イエナニ私はね、アノお阿婆さんの直きに裏長屋にをります者でしてね。いづれまた明朝までにこちらへ参りますから、藤さんが見えたらよろしく一つ。」

と五四郎が挨拶もそこ〜に風呂敷を背負つて表へ出ようとするところへ、お長を尋ねてこの家へ尋ねてまゐりましたのは丹次郎でございます。丹次郎、門口で出ようとする五四郎と突

當り、

丹「やお前は松兵衛、久しぶりにいゝところで逢つた。まあさう人の顔を見て慌てゝ逃げなくともいゝだらう。」

五「ヘイナニちつとソノ急用で。」

と五四郎風呂敷を背負つたまゝ逃げ出さうとするのを丹次郎は手荒く引戻し、

丹「ヤイこの盗人どろぼうめ、汝うぬあ太え奴だ。汝がお蔭でこの丹次郎は日影をよける今の難儀だ。さあ、汝が何と云はうと、ここで逢つたが百年目だ。これから畠山様へ引摺つて行つて、お拂ひに出た寶の行衛、金子の行き道、しかと申開きを立てにやあならねえ。主人の判を偽にせた重罪、サア俺と一緒に失しやあがれい。」

と引立てようと致すのを五四郎は振り拂ひ、

五「何を言やあがる。古主こしやうといつても五日ごんちか三日みっか、下から出りやあ付け上りやあがつて、覚えもしねえ寶の金のと、畠山はさておいて、鎌倉御所から呼びに來ようが、行きたくなければ行かねえわい。」



と遮二無二駆け出さうと致しますから丹次郎は後から組付いてやらじと致します。往來中で揉み争ふところへ横合から出し抜けにかの岡八といふ破落戸が飛んで出てまゐりまして、いきなり丹次郎の衿がみ掴んで引倒し、

岡「ヤイこの晝鷲め、何をしやがる、面に似合はねえ荒稼ぎ、サア五四郎さん、構はねえからこの間に急ぎなせえ。」

と丹次郎の顔を拳で二つ三つ張り倒し、ひるむを幸ひ「サア逃げろ」と二人が逃げ出す様子をお長は縁先から見てびつくりいたし、門口へ駈け出して丹次郎に縋りつき、

長「まあお兄さん、お怪我はなさいませんか。まあどうなすつたのでございます。」

と泣聲で介抱いたすところへお由も門口へ出て駈け寄りながら、ふと向ふを見ますと、一町ばかり離れた縄手道で、いま逃げ失せた五四郎と岡八の衿がみを掴んで堂と道端へ投出したのは誰あらう、今の今まで待ち暮してゐた木場の藤兵衛でございますから吃驚いたしました。と申すのは、これには譯がございません。いつたいこの五四郎と申す男は、もと丹次郎が唐琴屋落の節、番頭鬼兵衛のために再養子にやられました養家の番頭で松兵衛と申す心立のよくない

奴でございます。唐琴屋の番頭鬼兵衛と馴合ひで萬端仕組んだ狂言の末が、主家を押し潰しまして借金そのほかはすべて養子の丹次郎になすりつけ、預りものの畠山家の拂物を無斷で梶原家へ賣り渡しまして、その金を拐帶いたして逐電なしましたが、瞬くうちに酒色と賭事に金は費ひはたし、この頃は廻り廻つて木場の藤兵衛の店に番頭に住込んでをりましたもの。ところがちやうど藤兵衛が先日、上州から信州へかけての山方やまがたへ急に商賣用で出掛けなければならぬ用事が出来まして旅に出ます折、この五四郎實は松兵衛にお長のことをくわしく話しまして、同朋町のお阿の方へ掛合はせ、留守中お由お長のことを残らず呑込ませて計らはせようと致しました。藤兵衛もさすがに母親の手前、お由のことは内々でございますから、他に知る人のないのを見すました五四郎、持病の悪念がむら／＼ときざしまして、どうせ主人は遠方への旅立だから十日や二十日で歸る氣遣ひはないと、留守を預る支配人の目を掠めて十兩ばかり店の金を胡麻化しまして、お阿へはそのうちから一二兩渡して置いてお長の方へ行かないやうな足留をして置き、さて今日偽はつてお由の家へまゐり、同類の岡八と二人でうまくお由を瞞して金子と衣類を騙り取つたところを、天の配劑とでも申しませうか、藤兵衛は山方との相談が幸ひ途



中で調ひまして、急に立歸つてまゐり、五四郎が持逃の様子を聞いて、これは怪しいと早速お阿の方の埒のあかないことまで聞き糺し、その足で急いで小梅までまゐつたのでございます。お由とお蝶は何が何やらさつぱり譯が分りませんから、門口へ立つてばんやりしてをりますところへ、藤兵衛はかの二人を引摺りながらやつてまゐり、

藤「サア盗人めら、憎い奴だ。かうしてくれろ。」

と五四郎の手を揉ぢ上げるその際に岡八がバツと手を拂つて逃げ出すところへ、向ふからまゐりました一人の御武家衆、行違ひにいきなり岡八を苦もなく引捉へ、

侍「藤兵衛、其奴を逃すな。」

と聲をかけますから、藤兵衛ハツと驚いてよく／＼見ますと、餘人ならぬ本田次郎近常でございますから藤兵衛これはと悔りいたし、

藤「ヤ、これは／＼不思議なところでお目にかゝります。」

とこれよりお由、お長の出向ひによりまして、五四郎を捉へた藤兵衛は、岡八を引据ゑました本田次郎近常をお由の家へ案内をいたし、近常藤兵衛の物語りとなりますが、ちよつと一息入

れて申し上げます。

## 第二十回

さて本田次郎は藤兵衛に案内されてお由の家の座敷へ通りますと、二人の悪者を庭の木立へ繋がせましたのち、威儀を改めて藤兵衛に向つて申しました。

本「さて藤兵衛、餘の儀ではないが、唯今身共がこの岡八を召捕つたのは、主君重忠公の御下知で、かね／＼詮索中の白徒である。また其方が捕へた者は、夏井丹次郎といふものに難儀をかけた不忠の手代松兵衛と申す者によく似て居るやうだが、何故に召捕へたか。定めてよからぬ仔細のあるに相違あるまいが、すでに舊悪ある者ならば、岡八もろともこれより身共が問注所へ召連れてまゐらう。彼奴が悪事とは一體どういふ次第ぢや。」

と尋ねますから、藤兵衛はこの頃松兵衛が働きました悪事の一伍一什をくわしく本田次郎に述べました。これを聞いてお由、お長は無論のこと、中仕切りの襖の蔭でかたへ聞きしてゐた丹



次郎もこれとはばかり驚きました。そこへ本田の供人が三四人、垣根の外から差覗いて表に控える様子を見て、近常はそれを門の中へ呼入れまして、五四郎、岡八の兩人を引渡し、この奴等を牢屋へ連れよと堅く言合めた上、家來は先へ返し、自分は跡へ残りまして、藤兵衛とお由、お長を勝手の方へ人拂ひを致しまして、たゞ二人で段々の物語となります。

本「ときに藤兵衛、かねて其方に頼んで置いたことは、其後ひそかに糺し置いてくれたかな。それとも實否はなか／＼探りがたい様子か。」

藤「へい實はその事でございますが、かのお頼みの一件につきまして、其後くわしく、詮索致しましたところ、唐琴屋の養子で他家へ再養子にまゐり、その家破滅の折柄難儀をうけました丹次郎のこそ、素性は例の血筋のものに相違ござりません。」

本「ム、。それでは榛澤六郎の隠し子で、藁の上から母諸共に他家へ遣はした小兒は丹次郎であつたか。六郎成清が頼んだことではないが、これも同役の誼み、子を思ふ親の心を思ひやつて、年來尋ねしわが誠心、まづ行届いて満足いたしました。しかしな藤兵衛、身共が先日かの寶の一義で丹次郎の浪宅へまゐつた時、年のころ十五六になる容儀美しい娘が、どうやら丹次郎と

深い仲の様子であるやうに見受けたが、聞けば猶そのほかにも心まよはず浮かれ者であるさうなが、さやうな浮氣者ではかへつて親六郎成清へ恥を與へるも同然になるが、親子の名のりを致させて、たとひ家督とならずとも、これが榛澤氏の嫁御ぢやと云はれるやうな女子どもでござるかな。」

藤「へい。其義もいろ／＼と手を盡しまして詮索いたしましたがいづれも實義を見とゞけまして、それとはなしに丹次郎どのへ貢ぎ心にいたしましたことも大方届きました様子でござりますが、猶又しかと相糺しまして……。」

本「いやもう萬事如才のない貴殿のこと、この上ともよろしく頼みますぞ。」

藤「毎度御屋敷様の御恩と申し、別して御最下さいます榛澤さまなり尊君さまなり、このやうな御用ぐらゐは百分一にも足らぬ御禮でございます、……それにつきまして、先達御親造様から實は内々たくしへ仰せつけられました事がございました。と申すのは外でもございませんが、貴君様にも何かお召使ひのお女中へお手をつけられましたことがござりまして、其時のお女中が妊娠いたした様子とか。睨とは分らぬことゆゑそのままに捨て置いたが、後で聞け



ばそのお女中は貴君のお胤を安産いたされ、それを連れ子でいづれへか御縁づかれたとのこと。それを御新造様がお聞き遊ばして、その御行衛も私へ内々で尋ねてくれよとお頼みでござりましたが、これも色々心をつけて詮索してをりますが、今もつて手懸りがございませぬやうな次第で……。」

と云はれましたから本田次郎さすがに顔を赤らめまして、

本「これはまた思ひも寄らぬ妻が頼み、嘸かし迷惑至極であつたらう。左様な儀はこの後ともに決して詮索いたすに及ばぬぞ。最早十五年も昔のことぢや、心にかけても詮なき事ぢや。」

と近常口には申しましたが誰しも變らぬは親の情でございます。今頃どこにゐるであらう、無事であるようかと、我子の上を思ひやる案じにふと顔に雲りが見えました、そこはお武家でございませぬ意地つよく、さあらぬ顔で、

本「イヤ藤兵衛、身共が六郎の實子のことを心を用ひて詮索いたすのは、同役の誼みばかりではない。實は榛澤氏には家督の子息がないからなのぢや。しかしこの近常は愚妻の腹より出生の子も二人まであることゆゑ、その詮索は無用なこと、かならず妻の頼みは骨折りに及

びませぬぞ。」

と近常くれぐれも我子のこととは藤兵衛に打捨て置くやうに言ひ置いて、さて一同を呼び出しまして厚く挨拶をのべてこの日は館へ立ち歸りました。縁といふものは寔に不思議なもので、この本田次郎が女中に生ませた娘といふのが、後日唐琴屋の娘お長だと判明いたしますが、世間といふものは廣いやうで狭いものでございます。さて本田次郎が歸つてから、藤兵衛もやうやく吻をいたしてお由、お長に向ひ、

藤「ヤレ、二人とも嘸ぞ膽をつぶしたことだつたらう。それはさうと、先刻近常さまがお越しになつたとき、丹次郎がゐたやうに見えたが、どうしたらう。」

長「丹さんは私に逢ひに来たところを、松兵衛とやらいふあの悪者に出會つて、取控がうとするとところへあの破落戸が出て丹さんをひどい目に遭はしましたが、つい今のさつきまで次の間に居ましたが、お侍衆がお出でになつては何だか氣が詰ると云つて先へ歸りました。」

藤「さうか。それならそれでいゝ。またそのうちに逢はねばならねえ折もあらう。それはさうと、俺の來ようがもうちつと遅かつたら、お前ら彼奴らにいゝやうにされるところだつたの。」



由「ほんとに瞞されるとは知らずに、お前さんの顔を見るまではどんなに苦勞をいたしましたか知れやしません。」

長「もう／＼悲しくつて／＼、それも私の事からお前さんがどうかされるといふから、私やどうしてお詫びをしてよいかと思つて……。」

藤「さうだらうとも。しかしもう大丈夫だ。彼奴らは罰が當つてあの通り近常様に捕まつて連れて行かれたから、そのうちそれ／＼お刑法しよきになるに極つてゐる。だから悪い事はしねえものさ。悪いことと云へば、さう／＼、あんまりごたついでゐたので忘れてゐたが、實はの、今ここへ来る前にお阿婆の所へ寄つて、金はこの間渡したが、お蝶坊の證文が見えねえといふから假請取を取つて、隣となりの人が請人うけいんで今日までに證文を探して返す約束だから、それを取りに寄つたら、どうだいまあ、あのお阿婆さんが河豚てつぽうに中毒あたつて死んだといふ所へ行合したよ。お阿くまが河豚で死ぬなんて、とんだ落し咄だが、あんなに慾張りやあがつても、死んで見れあ、からつきし意久地のねえものさ。仕合せなのは店請ばかりだ。葬まうひをしまうと直に雜作も何も賣るといふ相談で、長屋の道具屋が來て値をつけてゐるが、長屋中が寄りあつまつて高笑ひをして、

泣く奴は一人としてないどころか、道具屋に葬あひぐるみ引取らねえかと懸合つて嘔わもつてゐる奴さ。あれを見ると、つく／＼人間といふものは、慾を乾くがものはねえなあ。それだから妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と佛さまが……ホイこんな野暮を云つて老い込みたがることもねえ。それよりかお蝶坊、お前も安心しな。もうお前の體はどこからも尻の來る氣遣はねえぜ。」  
蝶「ほんとお蔭様で、なんとお禮を申していゝかわかりません。姉さん、いろ／＼有りがたうございしました。」

由「いやだよこの娘は。藤さんに御禮を云はないで、私に向つて……。」

蝶「だつて、これといふのも私が姉さんの御厄介になつてゐるからのことですわ。藤さんには姉さんからお禮を云つて下さいましな。」

由「それもさうだね。では藤さん、改めて私からお蝶のことはくれ／＼も御禮申します。」

藤「まあ／＼、さう義理堅がてえ挨拶は抜きにして貰はう。しかしさう云はれると俺も悪い氣持はしねえ奴さ。」

蝶「ですけど、お阿さんも可哀さうなことをしましたねえ。私そのうちお墓参りに行つて來ま



すわ。」

藤「なるほど、お前の氣前ぢやあ、いゝ氣味だとは思ふめえ。しかし善惡ともに報ひの來る時節だから仕方がねえのさ。」

由「ほんとにこわいもんですねえ。……お蝶ちゃん、何にもないけれど、お前の今日は身祝ひに、藤さんに一盃上げる支度をおし。」

藤「イヤ今日はさうしちやゐられねえ。またお預けにして置かう。それより濟まねえが、お蝶、うしやへ駕籠をさう言つて……イヤ駕籠より舟にしようかな。」

蝶「おや、なぜ。今夜はこつちへお泊りなさいましな。ねえ姉さん。」

由「なにを思ひ出して急にお歸りなさるんです。」

藤「ナニ實は此方へ遊びに來たんだが、今ふと思ひ出すと今日は巳の日だ。洲崎へお參詣に行かなければねえ。」

蝶「辨天さまですか。」

藤「さうよ。」

蝶「そんなら姉さんと私と一緒に連れて行つておくんないな。」

藤「そりや早けりや連れて行くが、けふは遅いから又今度にしな。餘ッ程急がなければねえから。」

と云ふ折柄打出す七ツの鐘。

由「ほんにもう七ツだね。」

藤「なんだか今日は恐ろしく日が短かい、お蝶坊、辨天さまへ行かない代りに、姉さんにお前の好きなお鰻でも澤山御馳走して貰ひな。なあお由、さうしてやんな。」

と藤兵衛は挨拶もそこ〜に牛嶋の家を出まして、暮れ近く肌寒い大川を船で洲崎の辨天へと急いでまゐります。

お話頭かはつてこちらは藝者の米八、いつぞやから同じ朋輩藝者の仇吉と戀の意恨のもつれで、丹次郎ともいくたびか口舌をいたしました。この頃ではどうやら二人の浮名が世間へもひろがりましたのみならず、仇吉のために八幡の境内で打ち打擲されて人前で辱しめを受けましたその仕返し覺悟をきめ、ちやうど今宵洲崎の辨天へ夜參りをいたします仇吉の跡をつ



けまして磯づたひ、巳の日ではございますが、人目につかぬ夜を幸ひにバタ／＼と馳け出して  
まゐります後ろから、「米八、待ちや。」と聲をかけて帯を捉へましたのは誰あらう丁度夜詣りに  
来た藤兵衛でございます。おどろく米八、振返つて顔を見まして、

米「まあお前は藤さん。どうしてここへ。」

藤「さだめし悔りしたらうが、今途中で聞いた仇吉と喧嘩の様子。口惜しからうが、まあ米八、  
氣をしづめてよく聞きねえ。なんば傾城水滸傳や女八賢傳がはやるといつても、女の喧嘩は色  
氣がねえぜ。俺もこれまではともかくも、聞いて見れば萬更捨てゝも置かれぬ縁故の仲だ。ま  
あ今夜はおれが言ふことを聞いてくれろと言つたところで、日頃口説の譯ぢやあねえ。コレ米  
八、お前が今まで心を盡した丹次郎を、この先ともにどこ／＼までも大事に思つて連添ふ氣な  
らば、藝者の意地や達引は、及ばずながらこの藤兵衛に任しておきねえ。いま櫻川とも相談し  
て来たところだ。立派にお前の顔の立つ仕方は俺がして見せるから、まあよく一つ料簡して見  
るがいゝぜ。」

と思ひがけない藤兵衛の言葉に米八は不審顔で、

米「そんならいつもわたくしへ……。」

藤「かれこれ言つたのは、あれあみんなお前の氣を惹くためさ。いよく丹印を大事にする心  
と極めがついたから、この俺が一肌脱いで世話をする氣になつたのよ。これにはいろ／＼入組  
んだ譯もあるが、それはまあいづれ話すとして、そのつもりで今夜はここから宅へ眞直歸つて、  
時節を待つが身の爲だ。サアそれぢやあ行かうぢやねえか。」

と米八、其夜は藤兵衛に無理に引連れられて歸りましたが、さてその後藤兵衛のはからひで  
大勢の藝者を集めて豪勢に披露をいたし、その上仇吉、丹次郎の手切れ、米八が顔の立かたな  
ど、一分の隙もない藤兵衛の指圖で残るところなく計らひましたのはずつと後日のお話で、さ  
すがは江戸氣質の本場の藤兵衛の意氣な捌き方、また出入屋敷の本田近常から頼まれました心  
につがへた苦心の探索、まづ男の中の男と申しても恥しからぬ仁俠でございます。しかしまた  
女藝者米八の苦心も一方ならぬもので、婦女の鑑と申すはちと憚りがございませうが、男を立  
て通すその操、仇吉との喧嘩もつまりは戀と操の立競べ、この喧嘩は、あまり事長いゆゑに限  
りある丁度では説きつくされませぬ、いづれこの草紙の追加といたしましてくわしく申上



げることには致します。題しまして、

◎ 梅ごよみの  
餘興 春色辰巳園

先づは發布の時を待つて御高覽の程を願ひ上げます。

第二十一回

「めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に、雲かくれにし夜半の月かな。」「逢見ての後の心に  
くらぶれば、昔は物を思はざりけり。」などといふ古歌がございますが、まことに「昔は物を思  
はざりけり」で、小梅のお由、幾とせ振りかて藤兵衛にめぐりあひましてから、今までの女伊  
達めいた氣性はどこへやら、あれからずつと牛嶋の伯母の寮にお長と二人で靜かに暮してをり  
ますが、まことにどうも近頃は以前と違ひまして、何やら一人くよく思ひ案じます日が多い  
やうで、お蝶はまた娘心にそれをいたく心配いたして、間がな隙がな姉の心を引立てるやうに

仕向けてをります。

蝶「アノ姉さん、お前さん此節なんだか妙に鬱いでおいでのやうだが、なにか心配ごとでもご  
ざいますの。今では藤さんといふ後立はあるし、氣丈夫ぢやありませんか。ちつと氣を浮々  
とお持ちなさいな。」

由「あゝ有りがたうよ。私もね、お前が他のことを苦勞にして氣を揉む性だから、私が元氣の  
ない顔をするに直きに案じて、同じやうに鬱ぐだらうと思つて、なるべく浮々しようとしてゐ  
るんだが、つい癡り性だものだから直きと胸が痞へるやうになつてね、此頃では今までのやう  
な奴の氣前が我ながら可笑しいくらゐ出なくなつて、なんだか唯だ心細くなるばかりさ。」

蝶「だつてお姉さん、どうしてそんな……なにか御心配なことがあるんでせう。」  
由「それもないこともないが、今更どうなることでもなしね。」

と二人が茶の間で話してをりますところへ勝手口から、年のころ四十ばかりの商家の内儀さ  
ん風の女が尋ねてまゐります。

内儀「アノちと御免下さいまし。お由さんのお宅はこちらでございますか。」



蝶「はい。どちらからお出でになりました。」

内儀「アノ私は木場の大和町からまゐりましたが、お由さんにちとお目に懸つてお話し申した  
いことがございますのですが、お由さんがお出ででしたら、さう仰有つて下さいまし。」

といふ聲をお由は奥で聞きまして、木場といへば藤兵衛からだらうとお蝶に聲をかけ、

由「お蝶ちゃん、その方をこちらへお通し申し下さい。」

と云ひながら自分も中の間へ出迎へますと、お蝶のあとから上つてまゐりますかの内儀、見  
ればまるで顔を知らない人ですからお由は不審の態をりますと、内儀は何やら泪顔で、まづ  
座が定まつて初見の挨拶を丁寧に取りかはしましたのち、

内儀「早速ではございますが、ちと込み入つたお話なので、御遠慮なさるお方がいらつしやら  
なければ、折入つてお聞き申したいことがございますが……。」

と申しますからお蝶は氣を利かして勝手へ立つて参ります。お由は氣が、りゆる膝を摺り寄  
せ、

由「アノ大和町からと仰言いますと、やはり木場の藤兵衛さんのお宅の。」

内儀「その事ではありますけれど、その前にこの品を一つ御覽なすつて頂きます。」

と手に持ちました袱紗包みから取出しましたのは、昔時繪の織部形と申す三ツ組の懐中盃の  
その下重ねで、これへ「君はいま駒形あたりほととぎす」といふ高尾の名句の下五字の「ほと  
とぎす」といふ文字が記してございます。お由は手に取りあげまして、一目見ましてふと胸に  
思ひ當ることがありますから、盃を下に置き、「鳥渡お待ち下さい。」と自分も奥から手箱を出し  
てまゐり、その上蓋の八重封じに挟んであります書附を披かうと致しますと、かの内儀が「い  
え、その書附はあたしが手で、見まがひもない後日の證據」と半分云ひさして跡は泪聲で  
ございますから、お由は恟りいたし、

由「エ、そんならあなたは、私が五歳の時、お別れ申した母御さんでございませうか。」

と我を忘れて継りつきますと、かの内儀はお由の顔をつくづく見て、

内儀「さあ、アイと返事も出来にくい、わたしが胸を推量して、どうか邪見な母と思はずに堪  
忍しておくれ。」

と言ふなりワツと泣き沈みます。お由もさてはさうであつたかと、これも泪にむせかへり、



由「エ、／＼なんの勿體ない、堪忍どころではございません。親爺おとつさんの達者な時でさへ戀しかつた母御おちかさん、ましてつね／＼氣にしても尋ねる當もないお前が、まあどうして私の在所あちかが知れて、かうして尋ねて来て下さいました。まあ、ほんとに夢ではありませんかねえ。」

と互ひに取纏つて、しばしは泣き沈む親子の愁歎に、お蝶も障子のかげで立聞をして貰ひ泣きをしてをります。やゝあつて二人とも涙を拭ひ、

母「ほんにまあ、歳がひもなく泣いたところで返らぬ昔、さぞ憎い母だと思ひましたらうが、これも浮世の定めと堪忍して、けふかうして尋ねて来た仕儀おとさまの前後を、一通りまあ聞いてお呉れ。」

とこれより母親が泪ながらの長物語りとなりますが、實に縁といふものは不思議なもので、この母親の話からお由と米八とが胤も一つ腹も一つ、血を分けた姉妹だといふことが分つてまゐります。と申すのは、これには深く入組んだ仔細もございしますが、ざつと搔抓んで申しますと、お由が五歳の時、この母親はちやうど二十一歳で、その年次女をうみました。夫が重なる薄命かしかはせから夫婦は談合をいたして一時離別をいたすことになり、夫はお由を伴ひまして田舎の

縁者を心あてに、互ひに倦あきも倦あかれぬ仲をば母親は乳呑兒を抱いて當もなく、親子ちり／＼になりましたが、母親はその後足手まとひの乳呑兒をば里子に出して、おのれは諸所へ乳母奉公、あちらこちら渡り奉公してをりますうちに、不思議な縁から藤兵衛の父親でございす藤左衛門に思はれましてめかけ外妾めかけになりましたと云ふから、實に世の中は廣いやうで狭いもので、かの里子にやりましたお由の妹が即ち深川藝者の米八でございす。米八は里親の養育で成長いたし、十三の時に里親に難儀の事がありました、ために金の凌ぎに唐琴屋へ藝者に賣られましたもの。この頃藤左衛門は老病で、身の廻りが不自由なところから本妻にお由の母親のことを明かしまして木場の家へこれを引取りましたやうな譯で、母親は我子の米八が廓にゐることは明しもならず、忘れたごとくに八年ばかりを過しましたが、彼是思ひ合せると、ちやうどお由が父親と旅藝人となつて佐倉の宿で藤兵衛と契りを結ぶ前の年に米八は唐琴屋の抱へになつたのでございす。人の運命といふものは實に神佛も知らぬほど不思議なものでございす。さて母親はお由に以上の話を一通り致して、さて申しますには、

母「ねえお由、今まで私がだん／＼と話したことはこれはもう過ぎた昔のこと。實は私が今日



わざ／＼尋ねて来たのは、ちつとお前に頼みがあつて来たのだが、聞き届けてはくれまいか。」  
 由「まあ母御さん、何だか改まつてのお言葉ですが、それはもう假令別れて育つても、産の  
 恩ある母御さん、頼むなんぞと仰言られては他人行儀な。どうせ親子の仲ぢやございません  
 か。」

母「それはさうだが、この盃の三組の一ばん小さいのは今話した米八が持つてゐる筈だが、こ  
 の母は二十年あまりも大和町の藤兵衛さんの御兩親には一方ならぬ御恩義を蒙つてゐる。その  
 大恩ある家の跡取の藤兵衛さんに、知らぬとは云へば姉と妹が二人ともお世話になつてゐると  
 聞いては、どうして黙つてゐられよう。大旦那が亡くなられてからもう八九年になるけれど、  
 お上さんは今に變らず私を實の妹と思つてゐると仰有つて、いろ／＼行届いた親切づくめ、何  
 も不足のない宅で、たゞお上さんの御心配は藤さんのお身の上さ。あれだけの御身代で、藤さ  
 んももう立派な若旦那、どこからでもお嫁の來ては降るほどあるのに、まだお婚禮のないのは、  
 唐琴屋だの仲町だの、またそなただのといふものが三方四方にあるからだ、聞いてはどうも  
 捨てゝは置かれない。お上さんの御苦勞は無理もない。それにつけてもどういふ縁でか親子三

人が木場のお宅の厄介になるといふのも不思議な譯だが、これがお米なり、お前なり、また私  
 なりが、いつそ末々まで知らなければ知らないで済ましてもゐられるが、別れてゐてもそこは  
 親子の情で、案じ暮らすうちに段々知れた今の身の上。知つてはさすがに他人らしく行けない  
 のが浮世の人情さ。だからねえお由、ここの所をよくお前汲み分けてね、母御さんが一生のお  
 願ひだ、どうか暫く藤さんが本宅へ腰の落付くやうに、お前の仕打でそこは又どうにでもなる  
 だらう。さうすればお由も實はこれ／＼だと米八の方へも話して見れば、あれも得心しないこ  
 ともあるまいと思ふのさ。この頃聞けば唐琴屋は少し遠ざかつてお出でがないといふ事だが、  
 さうして見ればお米はもと／＼客を相手の女藝者、外の座敷へ行く日もあらう。さうなるとお  
 足の近いのはどうしたつて此處の家だ。そりやもう無理とは初めから分つてゐるが、木場のお  
 宅へ二代かけての大恩を思つて、愛想を盡かすほどでなくとも、ちつとまあ面白くなくあしら  
 つて、藤さんの足が何とか遠ざかるやうにしてお呉れでないか。」

と噛んで含めるやうに母親から言はれまして、お由はたゞアイ／＼と泣きじやくりながら、  
 しばらくは答もございません。



## 第二十二回

さてお由はつく／＼と母親が語ります過ぎ來し方の物語に、亡くなつた父親のことも思ひ出されて一入悲しい思ひをいたし、母親が頼む浮世の義理をつら／＼考へて見ますに、もと／＼藤兵衛と米八の譯はくわしく存じませんから、あゝ何といふ因果であらう、現在妹の契つた男と知らずに七年前、不思議な縁から佐倉の旅籠宿で行末ともにと誓つた堅い約束も、まゝにならぬ互ひの身の運命から邂逅あひまひふことが出來ず、もう所詮縁のないものと思ひ諦めて、一生やもめで暮さうと心にもない女おんな俠なだてなどと人に立てられるまゝ、しがない女髮結たつきを活業たつきに、せめて操だけでも立て通すつもりで世間を堅く過して來るうち、圖らずもお蝶のことから七年ぶりで戀しい藤兵衛にめぐりあひ、やれ嬉しや、日頃の望も通じたと思つたのもほんの束の間、いま二十年ぶりで音信不通、顔さへよくは覺えぬ母親にめぐりあへば、懐しいその母親の口から、思ふ男と離れてくれろと頼まれるとは、いくら浮世の義理とは云ひながら、あゝなんとといふ因果

なことであらう。今更どう縁切つて藤兵衛とこれぎりになられうものか、ならねば母へ不幸なる。と戀と義理との板挟みにお由の胸中はさながら煮え返るばかりでございます。母親はお由の歎きを一通り聞き終り、あゝ現在血を分けたわが娘に心にもないかゝる憂き苦勞をさせるとは嘸ぞ娘の身になつたら辛いであらう。それをさせるこの母の胸の中は猶辛い。しかしこれも大恩ある藤兵衛の身をもた保たもつたい餘儀ない義理しごらみの柵しごらみ。これを通させなければ我が身の誠心が通りませんから、無理を承知の上で泪を押しこらへ、すこし聲を改めまして、

母「コレお由や。もういゝから泣くではない。考へて見れば、親といふ條二十年も、産んだばかりで恩はなし、たま／＼かうして尋ねて來れば、親子の名乗りもするかしないに、思ふ男と縁を切れ、母が恩ある家に對して濟まぬのなんと得手勝手を言ひ出して、嘸ぞ不實な親だと思ふだらう。みんな私が悪かつた。姉妹は他人の始まりとか云ふけれど、お前もせい／＼妹と張り合つて、男を取られぬ用心をおし。年上のお前がその様子では、妹のお米はなほさら得心しまい。これが人並の親ならば、親の威光たいを楯たてにして、どうでも義理を返すところだが、永の薄命ふしあはせゆゑから、子どもに口もきかれぬ生がひもない女親。コレお由、もう泣くではない。この



上はこの母が死んで萬事の言譯をします。」

とすげなく立上らうと致しますから、お由は驚いて母の袂を縫り留め、

由「まあ母御さん、なにを仰有います。死ぬのなんのと氣の短い。まあ勘忍して私の申すことを一通りお聞きなすつて下さいまし。」

と、これから七年前に佐倉で逢つて以來の藤兵衛との奇縁を事細かに語ります。

由「……さういふ譯ですから、世間によくある仲のやうに、浮氣で惚れて我が身の榮耀えいように男を釣寄せて暮らす、てかけ妾めかけと思はれると、私や恥しうございます。しかし母御さんの誠心まごころが届かないとあれば仕方がありません。私やもうない縁とふつり思ひ諦めて、またもとの髪結になり、小梅の宅へ歸つて是までしつけた貸衣裳、損料夜具の渡世わたたりをして、亡くなつたお父さんの御命日には現成庵げんじやうあんへでもお詣りして、一生靜かに暮しませう。」

と泪ながらに言はれて見れば母親も今更無理と承知で言ひ出した事ながら、押して善惡よしあしを定める方法しかたもなく、唯だ泪に咽び暮れるばかりでございます。するとこの時、庭を隔てました隣りの小座敷の障子をあけて、

「アコレ妹おそのどの。そなたが義理を思つて藤兵衛の身打についての段々の心遣ひ、この姉が心から忝く思ひますが、お由さんは私の大事な戀嫁御ぢや。いづれ日柄を選んで藤兵衛が家の内儀うちぎにいたします。」

と聲を掛けるものがありますから、お由親子は驚いて縁の障子を明けて見ますと、庭下駄を穿いて踏石づたひ、枝折戸あけて這入つてまゐりますのは一人の品のよい尼御前、年は五十路あまり、御納戸加賀の羽二重に花色ちりめんの裏をつけて、下着も對の花色無垢むく。しづやかに縁から上つてまゐりまして、

尼「おゆるしなさいませ。」

と手を膝に珠數つまぐりながら座につきますから、お由はその顔をつくぐ、眺めまして、

由「まあ、あなたは此間お隣りでお目にかゝりました御隠居さまではございませんか。」

と不審に思つて問ひます側から、お由の母親は膝を正して、

母「まあお姉さま。思ひも寄らぬこの場所へ、どうして御存知でいらつしやいました。」

と左右から問ひ寄りますと、かの尼御前にはつこりと笑みをたゞへて、



尾「さぞお不審なとお思ひなさらうが、けふわしがここへ参つた心の中は、お釋迦様でもよもや御存知はあるまいて。いや／＼まことに不思議な御縁でありました。年來わしが妹と思ふて共に暮らしたおその殿の娘のお由さんが、藤兵衛と深く約束固めたとは、この母親も今の今まで夢露知りませなんだ。最前から何心なく庭越しに、不慮とは知りながら聞きました段々のお咄、藤兵衛の身をもたせようと、現在血を分けた子に縁切れとは、おそのさん、お前の義理固いにはこの姉がつく／＼感じて貰ひ泣きをしました。それに引換へこのわしは、子に甘いゆゑ藤兵衛がこれまでの道樂我儘。今さら嫁の詮索も實家の舅姑の氣々さま／＼で、いつそそれより子どもの氣に入つたら、女郎藝者でもかまはぬ方が當世かとも思つて見ましたが、また思ひ直して、いや／＼さうではない、三日と尻の落着かないやうな女はいかに倅が氣に入つても宅へ入れもならず、わしもほと／＼思案につきてゐた所へ、この間途でひよつこり櫻川の善孝に會ひましたのさ。その時いろ／＼話をして、世間の廣い善孝のことだからどうか倅の遊び先で、互ひに末始終添ひ遂げようといふやうな女があつたら、一日も早く嫁に貰ひたいからと、くれぐれも頼んだところが、唐琴屋は藤兵衛も足繁く行つたのはほんの一時で、どうやらこれは無い

縁といふから、それでは米八の方はと聞くと、この方はどうもはつきり分りませぬといふ挨拶。しかしもと此糸と同じ家にゐた時に、何か譯があつて深川へ自前になつたのは皆んな藤兵衛がしてやつたと或人の話に、それではわしが尋ねて直に米八の心を聞かうと思つてゐる矢先、人の噂に聞けばこの米八は丹次郎といふ人に操を立てて、表面は男嫌ひで通つてゐる藝者だといふから、これも所詮此方のもではなし、我子ながらまあ何といふ意氣地なしだ、こんな馬鹿には産みつけぬ筈なのにと、わたしもほと／＼思案に盡きて少時そのまゝに打捨て、置きましたが、ふと或人からこちらの噂を聞出して、幸ひこの頃お詣り申す現成庵でお心易くなつたお隣りのお袋さんに打明けてお話をいたし、それとはなしに此間からお近附きになつたこのお由さん。もとは小梅の女伊達とか強いお人だと聞いてゐましたが、お目にかゝればその優しさ、殊にすぐれた容儀、これなら藤兵衛の嫁には過ぎものと、だん／＼近所で聞いて見ると、氣立から何から何一つ不足のないことがわかり、實は今日お目にかゝつて直々木場の家へ這入つて頂きたいと、その相談に來たこの庭傳ひ、障子越しにそれがおそのさんの實の子だと聞いて、罪とは知りながらつい立聞きをしましたが、私やもうこれほど嬉しいことはありませんのさ。



しかしまあ此方は喜んでその氣でも、人の望は心ごころ、肝腎のお由さんはじめおそのさんの心持はどうでございますか。お由さんを藤兵衛の嫁に頂くのは心に染みませぬかえ。」

と言はれてお由も母親も飛立つばかりの嬉しさ、泪ばかりが先に立ち、もう夢に夢見るやうな心持でございます。母親のおそのは泪を袖に拭ひながら、

母「まあ、思ひがけない御隠居さまのありがたい思召で、心に染むも染まぬもございません。勿體ないほど有りがたくて泪ばかりがこぼれます。」

と老の泪のあとについてお由は兩手を疊に突き、

由「このやうな卑しい身を、お慈悲のお言葉で何ともお禮の申しやうもございませんが、お言葉に甘へまして私がさうなつた暁には、藤さんのお蔭で世に立つ米八さんが俄かに不都合になりはせまいかと、たとひ妹と知らなくても、そこは女のはかなさで、この先どう立ち行くかと、それを思ふと氣懸りでございます。」

といふ時表口から藤兵衛の聲で、

藤「イヤその事なら遠慮に及ばぬ。」

由「おや、藤さんがお見えになりました。」

とお由が障子を明けますと、藤兵衛しづかに座敷へ通つて母の前に畏まりまして、

藤「これは、母御さん、お年寄りられていつも私ゆゑにいろいろのお心遣ひ、もう、これはからは藤兵衛屹度心を入れかへ身持を改めます。唯今はまたお由を添はせようとお情深いお志、お由、おまへもよくお禮を申し上げます。おそのさんもまたいろいろと御親切、藤兵衛身に

ありがたく思つて、これからは生眞面目に皆さんに屹度安堵をおさせ申します。また米八がことは、此糸の頼みで自前にさせてやりましたが、その後お出入り屋敷の畠山様の御家老職、譽田の次郎近常さまから頼まれて、心にもない無理を言かけて、心の底を探つて見ましたが、いやなか、もつて亂れぬ心の操、歳の行かぬ女にはまたとあるまじい氣性ゆゑ、及ばずながらこの藤兵衛が證人媒介となり、いづれ丹次郎どのの内室にお興入を致させますが、その譯は今ここで鳥渡申しても分らぬお話。まあそのことは兎も角も、もうかれ、御時分どきだ。さだめし母御さんもおそのさんもお腹がおすきになりましたらう。まあ何はなくとも一口召上つて。……コレお蝶坊や。ちよつと来てくん。お蝶さん、ゐないのかい。」



と藤兵衛食事の支度をさせようとお蝶を呼びますが、お蝶は臺所に立つたまゝ、どういふ譯か返事を致しません。これは返事をしない譯で、先程からお由のことを立聞して、障子の蔭でこれも嬉し涙に泣き暮れてをりましたまではよろしかつたが、その揚句に唯今藤兵衛が米八と丹次郎を添ひ遂げさせるといふことを聞いたから、その一言にハツと吐胸を突かれて、せきくる泪に返事も出ません。一と間を隔てて悦びと歎きとかはるお蝶が胸中、さてこのつゞまりは如何相成りまするか、二十四回の満尾に申上げます。

### 第二十三回の上

お話頭はなしかはつてこちらは唐琴屋の花魁此糸、思ひ思はれました根岸の半次郎はあひかはらず浪々の身の上でございますから、此糸は始終何くれとなくこれへ貢いでをりますが、この頃は半次郎とうとう唐琴屋の二階を止められてしまひ、二人は以前のやうに思ふやうに逢ふ譯にもまゐりません。内證から云へば高金かうきんで抱へた女郎、これへ情夫まぶといふ文なしの虫がついては

賣物に障りますから目に餘り次第容赦なく登樓を差止めますが、じつは番頭の鬼兵衛が内々此糸に思召がありまして、いづれこれを根引して内證の内儀おかみにしようといふ下心がございますから蛇に見込まれた蛙同様で、事々に辛く當ります。堰かれゝば猶つもののが戀の癖、此糸は半次郎が二階を止められて自儘に逢ふことが出来なくなりましたから、致方なく新造の糸花に文を頼みまして、半次郎に姿をかへさせ、そつと忍び込ませて昨夜から部屋へ匿まつてございませ。色男といふものは實にどうも羨ましいやうな、しかしまた氣の毒のやうなもので、半次郎此糸の部屋の戸棚へかくれまして海老のやうに小さくなつてをりますところへ、禿が朝湯の沸いた知らせに部屋へまゐります。

禿「おるらんへ、お湯が出来ました。」

此「アイ直ぐに這入るよ。糸花さん、それぢやあ氣をつけてくれなましょ。」

花「アイお案じなさりいな。お杉どんは今溝店とこだなのお祖師様へお詣りに行きいしたから、まだなか／＼歸りいせん。早く湯からお上りなんして、頭痛がするともいひなまして、少しお休みなんし、昨夜は生憎客人が落合ひなんして、嘸ぞ焦れつたうありいしたらうねえ。」



と此糸は戸棚の方へ心を残して湯殿へ下りてまゐります。新造の糸花はそつと戸棚を明け

て、  
花「半さん、さぞ気づまりでおつせうね。」

半「俺が氣詰りより、萬事お前が心遣ひ、俺あ手を合して拜んでゐるよ。」

とコソ／＼話をしてをります後ろへ、いつ歸つて來たのか遣手のお杉がヌツと這入つてまゐり、

杉「糸花さん。」

と聲をかけたから糸花恠り致して戸棚をピツシヤリ。

花「エ、まあお杉さんかえ。いきなり呼ぶから私や驚きいしたよ。」

杉「脛に疵もつて笹原を走るとやらで、仰山な驚きやうだね。まあいゝから、ちよつくり私の部屋へ來てお呉れ。」

花「アイなんぞ用ざますか。」

杉「何でもいゝからちよつとお出で。」

と遣手のお杉に呼ばれて新造の糸花が可恐恠り廊下へ出ようと致しますと、入違ひにどやどやと此糸の座敷へ踏み込む若者、下働きだの不寝番だの、大勢一度に駈け込みまして、アツと驚く間に戸棚の中から半次郎を引摺り出して、そこへ引据ゑ、大勢して口々に、

「サア／＼此糸さんの座敷には盗人が住つてゐやす。皆さんのお座敷も御用心なさいましょ。」

「サア／＼見せしめのために、この盗人を下へ引摺り出して、内證の前で筋骨を抜くほどのひどい目に遭はしてやれ。あんまり人を盲目にしやがる。太え奴だ。」

と寄つて集つて打つやら蹴るやら散々の打擲を致しますが、半次郎手出しもありませんから片手で拜み、

半「喜介どん、どうぞ拜むから穩便にして下せえ。俺はともあれ、此糸が可哀さうだ。内證へ知れねえやうに、喜介どん、コレこの通り拜むから勘忍して下せえ。」

喜「拜むから勘忍してくれと。呆れた謔言を言ふぜ。盗人を座敷へ置く花魁も同類だ。高金出した奉公人を、太え色男だ。色男は弱いのが通りものと、生ッ白くぶる／＼するのも胸が悪いや。こんな奴は思ひ切り打つて／＼打ちのめして、恥面搔かせ、この廊へ二度と再び足踏のな



らねえやうに、オイ皆んな、此奴を引擔いで早く階下へ下ろせ〜。」  
皆々「合點だ。」

と半次郎を引擔いで二階から引摺り下ろしまして、内證へ見える所で又罵り蹴散らしますか  
ら、此糸は湯殿でこの騒ぎを聞いて氣も狂亂、差込む胸を押へながら湯殿を出ようとするのを、  
内藝者の秀次といふのがあはて、引押へ、

秀「アレサおるらん、お待ちなさいまし。今おるらんがあ席へ出ちやあいけません。それあ  
もう嘸ぞ口惜しいと思ひなんしやうが、家中向ふづらになつておるらんに恥をかゝせるこの仕  
鱈。みんな内證で言ひつけてさせたに違ひありません。だから、おるらん、お前はんが今出ち  
や、かへつて半さんの爲めになりいせんよ。まあ〜辛抱して此場をすまして、跡で恨みをお  
晴らしなんし。」

と言はれて、此糸もやつと心づき、

此「ア、秀次さん、ご親切にありがたうおつす。」

と言つたきり、無念の泪に掻き暮れます。上り口では半次郎を思ふ存分打擲いたして表へ突

出し一度にドツと笑ふ聲。あゝ何といふ情ない仕打だらう。それにしても一體誰の口から洩れ  
たことか。今でこそ二階は止められたものゝ、元は内證や若い者に皆それ〜目をかけて心遣  
ひもした人を、いかに不實な稼業とはいへ、あんまり非道な仕方だ。半さんが忍んでゐたこと  
は悪いに違ひないが、しかし自分は五町の中でも指に折られた花魁といへば、ずるぶん店の爲  
にはなつたものだ。それを思へば少しは大目に見てくれてもいゝのに、目下の子供にさへ顔向  
けの出来ないけふの此仕儀、あゝどうして恥を晴らしてやらうと、泪に胸を痛めながら此糸が  
しほ〜と湯殿を出て廊下をやつてまるるその中間に、番頭鬼兵衛が斜に構へ、その脇で  
判人の蔭八が何か相談事をしてをりましたが、

鬼「おい此糸、ちよつとここへ來な。」

此「アイ湯冷めのしないうちに化粧をして参りいせう。」

鬼「化粧は後でいゝから鳥渡來なせえ。」

此「なんざいますえ。」

鬼「蔭八さん、まあ見なざる通りの仕末だ。これで唐琴屋のお職と言はれやせうか。後見の私



にしたつて、かう踏付けにされちやあ、他の者のしめしが出来やせん。まあ兎も角も連れて行つてお呉んなせえ。私の代になつてから抱へた女なら思ふ存分仕置の法もあるんだが、先の親方にはこれでも儲けさせたこともあるさうだから、それに免じて、まあ住替といふところで勘辨しよう。此糸、お前にはその方が勝手かも知れねえが、他の家へ行つちやあ今迄のやうな眞似は出来ねえぞ。サア話が分つたら、蔭八さんの所へ引取んなせえ。」

と言渡しますから此糸も心を据ゑまして、

此「オヤさうございますか。そんならそれで支度をして……。」

と立ちかけますのを鬼兵衛は引止め、

鬼「オット二階へはもう行つちやあならねえ。……おい子どもや、お杉どんにさう言つて、此糸の寝巻と打襦うちかほを一枚寄越しなせえと、さう言つて來な。蔭八さん、座敷や部屋物は此糸の物だと言ひなさるかも知れねえが、あんまり馬鹿にした仕打だから、何もかもよく調べた上で、渡すやうに鼻がついたら渡しますから、その積りであつてお呉んなさい。まづ今日はこのまゝお前に預けやす。」

とさも憎々しげに言ひ捨て、鬼兵衛は奥へ這入りますその後姿を見送りまして此糸と蔭八は顔を見合はせ、

蔭「へん親方振りやあがつて、大層な面つらをしやあがる。モシおゐらん、ちやうど願つたり叶つたりだ。御不自由でも直ぐに私の所へお出でなせえまし。」

とこれから早速駕籠を仕立てまして、蔭八が附添ひ、此糸は山の宿の蔭八の宅へ引取られてまゐります。こちらは唐琴屋の二階、此糸が出ました跡の部屋を片附けながら、遣手のお杉が新造の糸花に叱言を言ふと見せかけてひそく話でございます。

杉「……だから今言つたやうな譯だから、おゐらんを住替にさせたのは私の情なさけから出たことなのさ。鬼兵衛どんの腹では、此糸さんをお内儀かみさんに直して、手前の後見あひだに位をつけて旦那といはれたい料簡だが、よしんばそれが出来なくとも、半さんは突出してもおゐらんを今まで通りに置くつもりさ。さうなれば此糸さんが二枚も下へ押し下げられるか、またひよつとして無理な都合で新造出してもしなさらなきやあなるまいぢやないか。それもあんまり馬鹿々々しいから、實はおゐらんの爲めを思つて、何もかもぶち壊してしまつたわけなのさ。」



花「まあ、それとは知らずに私やもう腹が立つてく。ほんとにお杉さん、お前はんの御親切、おるらんに代つてお禮を申しますよ。それはいゝが、おるらんの大事の物や頭つむりのものはどうしますえ。」

杉「私が立合ふつもりで萬事やるから、早く手廻しをして着換や何かは、此糸さんと仲のいゝ花魁達にそつと預けておしまひなえ。」

花「差しものはどうしいせうねえ。」

杉「禿の花のによく言ひつけて、尾張屋へ持たしてやつて、お金にして山の宿の蔭八さんの所へ知れないやうに届けて上げな。サア手てはしこ迅くしましよ。」

と面おもては鬼と見せかけて内に含んだお杉が情のはからひで、此糸の持物をすつかり仕末をいたしまして、さて他目にはさも嚴しいやうに聲を荒らげ、

杉「イエ〜お前がたに盲目めくらにされちやあ、私の役がすみません。おるらんはじめお前まで、これまでのしだらを一々分けにやあ、内證の前は言ふに及ばず、二階中へ口が利かれやせん。もう〜グヂ〜した言譯をしなさいますな。」

とあたりへ聞かせる叱言のかず〜、内々は此糸や新造のためを思つて萬事よろしきやうに計らひましたといふ、このお杉、まことに遣手にはまれな親切ものでございます。

### 第二十二回の下

さて山の宿の判人蔭八の家へ引取られました此糸、昨日にかはる今日の淵瀬で、まことにもう不自由づくめでございます。昔はあの山の宿あたりは泥町などと申しまして、泥濘ぬかるみのひどい貧乏長屋が寄り合つてゐたところでございます。蔭八は折節風邪の氣味で綿のはみ出たドンツク蒲團をお柏にして臥つてゐるといふ仕儀ですから、えぼじり巻の山の神お民といふのが手一つで廻りかねた世帯の中へ、此糸を預けられましたからもうてんでこ舞ひでございます。昨日まで魚吉の臺の物も食ひあきた口にするめの附焼、全盛のお職と言はれたのが辰巳屋の貸蒲團にくるまつて、浴衣の上へ寝巻を着て、その上へ蝦夷まぜ出錦でにしきの巻帯をしてゐるといふんですから、トント掃溜へ鶴が下りたやうなものでございます。しかし夫婦ともまことに實體ないゝ人



間で、貧乏世帯の中を何かと氣をつかつて此糸に寒い思ひをさせないやうにまめ／＼と働いてをります。女房のお民、勝手元でなにやらガチャ／＼やつてをりましたが、前掛で手を拭きながら此糸の枕元へ坐り、

民「おるらん、私やすつかり忘れてゐましたが、いま表へ出たら、兼さんがお津賀さんの言傳を頼まれたと言つて、この蓋物とお金を私に渡してね、これでは失禮だからおるらんが何か食べたいと仰有るものを買つて上げておくなさいつて、こら御覽なさい、こんなおいしい物を呉れましたよ。」

と蓋物をあけて見せますから此糸は床の上からにつこり笑つて、

此「おやまあ御親切に嬉しいねえ。そしてまあ延津賀さん所は遠いぢやありませんか。近いと逢ひたうおつすよ。」

とこれを蔭八は蒲團の中で聞いてクス／＼笑ひ出し、

蔭「これあいゝことを仰言るよ。なるほど、おるんの足ぢやあ遠からうね。ここからお津賀さんの所までぢやあ、仲の町を半分道申する位ありませうよ。ハ、ハ、ハ。」

此「おやさうございますか。私やまた大層遠いと思ひいたしました。」

民「ねえ鳥渡、それはいゝが、このお金はおるらんへ上げて置ませうね。」

此「アレサをかしいよ。私が持つてをりいしたところで仕方がおつせんわね。お前はんそれに入る物を取んなましよ。」

民「だつておるらん、折角お津賀さんがおるんに下さつたものを、それぢや悪うございますもの。」

蔭「コレサお民、詰らねえ遠慮をするねえ。延津賀さんの御親切は藝人に稀なことだが、壹歩の金をおるらんを持たして置いたつて始まらねえわな。今に近所の者でも誰か來て泣言をいふか苦しい話をして見ろ、それこそ、ぢやあこれを持つて行きなましなんて抛り出してお仕舞ひなさらあ。だからよ、お津賀さんが何か買つて上げると兼さんに言つて寄越したのは、つまり俺の宅の都合の悪いことを知つてゐるからだあな。」

民「さうかねえ。だつてお前、それはさうだが……。」

と蔭八夫婦一步の金についてとやかく言つてゐるそんな話には耳も止めずに、此糸は蓋物の



中を見て飛上るほどに喜び、

此「まあ、私の好きなものを呉れさつしたよ。」

とニコ／＼顔でをりますのは餘程氣に入つたものと見えます。すべて花魁といふものは色氣はございますが萬事がまことに重々しく、食ひ物の事などあまり騒がないもので、大概の美味い物でもゲジ／＼ほどにも驚かないものですが、此糸があんまり喜ぶからお民も覗き込むと、まことに美味しさうなもの。

民「あらまあ美味さうだよ。ちよいとお前さん御覽よ。コラどうだらうまあ、白魚と玉子と炊りつけて、それへ海苔をませてさ。へえまあ、山葵が下ろすばかりに皮が剝いてあるよ。ちよいとまあ、行届いたもんだねえ。」

蔭「馬鹿野郎。そんなに悔りしなくつたつていゝや。いけ騒々しい。一つで五貫目もある薩摩芋でも見やあしめえし。普段のお里が知らあ。」

民「なにも悔りしやしないけどさ。まあ、ちよいと、これだつてお前さん仲々掛つてゐるよ。」  
蔭「まだ言つてやがる。それより早く煮花を入れて、おるらんこれでお茶漬でもあげる支

度をしねえな。」

民「あいよ。今さう思つてゐる所だよ。ぢきに叱言になるから厭さ。」

蔭「厭だもねえもんだ。いけ騒々しい。」

此「アレサもういゝにしましよ。しかし私も早く夫婦喧嘩がして見たいねえ。さうなつたら、さぞ嬉しいことだらうねえ。」

蔭「ハ、ハ、ハ。花魁の前でとんだ所をお見せ申したが、それあねえ花魁、おるらん達や娘子どもの料簡では、早く思ふ男と一緒になつてさ、とき／＼は拗ねたり喧嘩をしたら、さぞ樂しみなものだらうとお思ひなさらうが、さうなつてこれが子供でも出来て御覽じろ。立派に暮らす御新造さんでも色氣も戀氣もさめてしまつて、エツあれがかと見違へるやうになりますぜ。いはんや貧乏世帯を持つて御覽じろ。昨日まで町内の若衆が血道を上げて騒いだ娘でも、ぢきに大ッ腹を抱へて味噌漉しを袖に、右の袂へ焼芋の八文も買つて歩くやうになると、まだ島田でゐられたものをなんてつてね、後悔して泣くのがいくらも世間にありますぜ。おるらの前だが、うちの家内だつてお前さん、若い時にはこれでもちよいと澁皮のむけた、色が小白くつて、



縹緖はよくはねえが愛嬌があつて、赤い帯かなんか締めて、ねえ蔭八さん、私やお前のためならといふやうなことから、まあ私も何したんだが、それが今となつて御覽なさい、この破れ世帯の中で、髪はぼう／＼、煤ぼけ返つて、手足はあかぎれだらけ、まるで大根下ろしに撫でられるやうで……。」

民「何だつてお前さん。」

蔭「アハ、まだそこに居やがつたか。早く御飯の支度でもしねえ。もうかれこれ……。」

といふ折柄辨天山の七つの鐘がボウン。

蔭「ソレ見ねえ。もうセツだ。いつでもお晝とお夜食と一つにならあ、おらんがなんぼ朝が遅いからといつてお餓じからわな。」

此「いゝえ、私やなんだか食べたくありせんよ。じつは先刻から胸が痛うおつす。」

蔭「また半さんのことでお鬱ぎなさるんだらう。おらん、あんまりくよく／＼案じなさんなよ。今にどうにかなりますわな。そりやいゝが、半さんも今日あたりは來なさりさうなものだか……。」

此「イ、エ私がかうなつたこととは知らずに、まだ麻あつちにゐると思つて、たゞ面目ねえ、口惜しい、これといふのも私のお蔭だなんぞと、今ぢやあ嘸ぞ憎んでゐなんすだらうと思ひいますよ。」

蔭「ナアニ半さんだつて友達か何か頼んで、とうに麻の譯は聞いて居なさいますよ。」

此「それならいゝが、私はまた便りのないのは、ひよつとあの時どこか打ち處うちどころでも悪くつて、萬ましも一の事でもありはしまいかと案じられてなりませんよ。」

蔭「ナニそんな事がありますものか。……それ／＼、喋つてゐる間にやつとお膳の支度が出来ましたぜ。おらん、何にもありませんが一口でもいゝからお上んなすつて下さい。あんまり食が這入らなくつちや、いくら何でも體に毒だ。……それで何ですか、半さんは當時どこにお出なさいます。やつぱり根岸ですかい。」

此「いゝえ、此頃は矢義やぎの城しろさんとここにかくまはれてをりいます。」

蔭「ハテネ。その城さんのお宅は。」

此「たしか巢鴨とやらでおつす。」

蔭「其奴あまた御遠方だね。尋ねるにしたつて巢鴨ぢや急には行かれねえが、ハテ困つたこと



だ。」

と話しをしてをりますところへ入口の障子の外へ誰やら尋ねて来たものがございます。

「アノちつと御免下さいまし。」

民「はい。どなた。」

「アノ廊へよくお出での蔭八さんのお宅はこちらでございませうか。」

蔭「ハテナ娘の聲だが誰だ知らん。」

と言ふうち、此糸は廊と聞きましたから、急いでこれは二階へかくれます。

民「蔭八はこちらでございませうが、どうぞお這入んなすつて下さい。」

「はい、ありがたうございませう。」

と障子を明けて這入つてまゐつたのは誰あらう唐琴屋のお長でございませう。蔭八は久しく會ひませんから顔を見忘れてゐると見えまして、

蔭「サア御遠慮なく、こちらへお上んなさい。狭いところで、生憎私がちつと風邪ッ引きで臥んでゐるもんだから、構はねえからこちらへお上んなさいませう。ハテナどこかでお見かけ申し

たやうなお娘だが……。」

長「久しくお目にかゝらないからお忘れかも知れませぬ。私は唐琴屋の……。」

蔭「オット違えねえ。お長さんでござんしたかい。いや、これあどうもお見それ申しやした。大層まあ美しくおなりなすつて、途中でお目にかゝつたんぢやあ分りませぬ。おいお民、お茶を上げねえか。……あちらもまた飛んだ事でねえ、いろ／＼あなたも御苦勞なすつていらつしやるさうだと噂に聞いて、一度伺ひたいとは思ひながら、なにしろこの通りの貧乏暇なしで。……まあしかしよくお尋ね下すつた。今どちらにお出でなさいませう。」

長「アノ小梅にをります。」

蔭「小梅ね。へーえ、さうですかい。そんならつい川向ふで、ちつとも知りませんでした。それで今日は、私に御用といふ譯もあるめえが、なにか廊へ使ひでもお頼みでお出でかね。」

長「いゝえ、さうぢやありませんが、……アノお前さんにちつとお頼みしたいことがあつて参りました。」

蔭「あたしに。どんな御用です。」



長「アノウ私をどこかへやつてお呉んなさいまし。」

蔭「私をどこかへと言ふと、身賣りですかい。」

長「あい。」

蔭「エ、飛んでもねえ話だ。なんぼお前さんが廓あつちでお育ちなすつたにしろ、鋳あつちから棒に……いや待てよ、鋳あつちから棒にそんな事を思ひつきなるといふのは、これあよくくの譯わけがおりなさるのかも知れねえ。お長さん、まあその譯わけは一體どう言ふのでございます。」

長「はい。すこしお金が入ることがあります。」

蔭「サアそのお金の入用のわけ、また當時のお身の上をくわしくお聞き申した上は兎も角もだが、しかし何にしても悪い御料簡だ。大概の事ならさうまでなさらずとも外に道がありさうな……一體その金の入用の譯わけといふのは何ですね。」

長「じつは、廓まへかたに以前あひだお兄さんが、今度本當のお家へ歸參とやらが叶ふについて、いろいろお金の入るといふことなので、それを私が拵たてへて……。」

と話すところへ、二階でこの様子を聞いてをりました此糸こゝろが降りてまゐります。

## 第二十四回

實はお蝶は、譽田次郎並びに藤兵衛兩人の一方ならぬ骨折によりまして、丹次郎が本家へ歸參が叶ひましたについて、その手土産と致していつぞや養家破滅の折に悪手代松兵衛が横領いたしました金子を、今少しなりとも調達したいといふ旨を聞きまして、その金子調達のために我が身を賣つて男に操をあらはさうと、娘心の一徹に覺悟を定めて蔭八かげはちの許へやつてまゐつたのでございますが、御承知の如くついこの間藤兵衛のためにお阿あの家から身を引取つて貰ひまして、やつと身儘になり、やれ嬉しやとその喜びもほんの束の間、今またここに丹次郎のために再び身を賣らうといふのですから、その志たるや、貞節俠氣とでも申しませうか、歳こそ行きませんがまことに見上げたものでございます。蔭八かげはちに身賣りの話をこまぐと致してをりますところへ、様子をきいて二階から此糸こゝろが下りてまゐりまして、

此「おやお蝶さんですか、まあお久振りでありいすねえ。」



といふからお蝶も惻りいたしまして、

長「おや、おゐらんかえ。いつぞやはいろ／＼御親切にあづかりましたが、お前まあどうしてここに。まことに久しくお目にかゝらないが、まあちつと見ないうちに大そうお痩せなすつたぢやありませんか。」

此「さうございます。この間からいろ／＼と苦勞を致したが、お前はまたどうしてここへお出でになりましたえ。」

とこれからお蝶は丹次郎の段々の話を致します。

長「おゐらん、私はなぜまあこのやうに苦勞ばかりするんでせうねえ。そしておゐらんの御苦勞なさるのも、やつぱり半さんの事についてゞござんすかい。」

此「あゝさうございます。もう／＼そのために口惜しい目に遭ひいしたから、いまだに胸が張り裂けるやうでなりいせん。」

とこれも半次郎との経緯いきさつをくわしく話しまして、互ひにいろ／＼愚痴を語りあつてをりますところへ、表の方へ雪踏の音がいたしまして誰か尋ねてまるつた様子。

「ちと御免なさいまし。蔭八さんのお宅はこちらですかえ。」

蔭「はい、こちらでございます。」

「それなら御免下さいまし。」

と障子を明けて這入つてまゐりましたのは幫間の櫻川善孝でございますから、

此「おや、善孝さんぢやあおつせんか。」

善「ヨウ、おゐらん。ヤレ／＼これあ有りがてえ。お前さんがここにいらつしやりやあ、何もかも分る譯だ。まあ御免なさいよ。」

と善孝何やら獨り喜びながら上つてまゐりますから、蔭八も床の中から、

蔭「善孝さん、御免なさいましよ。まあ／＼ずつと此方へ、と云つたところでこの通り狭い所だが。おい、お民お茶を差上げな。」

善「イエもう私ならお構ひ下さるな。時におゐらん、とんだことでございますたね。私やちつとも存じませんでした。いゝえね、實は私この間千葉ちば之助のすけさまの御分家の千葉半之丞はんのすけさまとふお屋敷へ召されましたが、これまでついぞ參るやうな御縁もないんだが、どうして召して下さ



るかと存じて上つて見ますと、驚きましたね、どうでげす、その旦那様といふが根岸の半さんだから私や膽を潰しましたね。どうも腑に落ちねえから、だん／＼御様子を伺つて見ると、これまでは御部屋住みぢやああるし、それに御病身だてんで若隠居なすつていらつしたんださうですがね、それがあなた急に親御さまもお兄さまもおなくなりになつたんだ。そこでそれ、半さんが御家督御相續といふことで、まあ早く言へば御殿様に御出世なすつた譯なんだから、大したもんでさあ。でまあ、私がお召しにあづかつて、殿様御直々の御内意といふわけで、おゐらん、半さんはお前はんのことを心配してゐますぜ。何分おゐらんことは善孝、其方がよろしく取計らひくれよといふ御勅諭だから、仰せ畏つて私や早速唐琴屋へ行つて掛合つてゐるうちに、昨日ひよつくり行つて見ると、どうです花魁、お前さんが住替になつたといふからこつちは二度悔りさ。それで今日まあ此方へ伺つたやうな譯なんだが、おゐらん、お喜びなさい、永の苦勞の甲斐あつて、お前はんもこれからは千葉半之丞さまの御臺さまですぜ。なんと大した御出世ぢやありませんか。」

此「まあそんなら半さんはいよ／＼御家督御相續で千葉家の跡取りに。それで便りのないのも

分りいした。それはいゝが、善孝さん、唐琴屋の方はどんな様子ですえ。」

善「アレまだ御存知ないんですかい。」

蔭「いゝえ、花魁のことはいづれこちらから参ると私が申して置きましたから、まだ何とも挨拶が……。」

善「ナアニ花魁のことぐらゐることぢやありませんぜ。大へんな騒ぎさ。」

此「おや、どうか致しいしたかえ。」

善「どうか致しいした所の騒ぎぢやありませんや。いやもうとんだ膽の潰れたお話し。ソレ今の旦那ね、あれあ後見ださうだが、あれがお前さん、じつは古鳥左文太といふ盗人の頭ださうでござんすよ。」

此「エ、そんならアノ本店からつけた鬼兵衛どんは、盗人でござんすとえ。」

蔭「其奴あ飛んだことだ。」

善「サアそれがさ、どうして知れたかと云ふとお前さん、木場の若旦那のお店にゐた男で、番頭ださうだが、これが松兵衛といふやつぱり左文太の子分の悪黨でね。此奴が畠山さまの御家



來で本田の次郎さんと仰有るお方に召捕られたところから、だん／＼悪事が續はれて來たんださうだが、そんな譯だから、お氣の毒だが唐琴屋はどうも立ちさうにもないさうだといふ話でさあ。尤も今またここへ來がけに聞いた話によると、榛澤六郎さまがその前から極内ごくないでお調べで、唐琴屋の娘をお尋ねになつていらつしたといふことでね、古鳥左文太は當時後見だから、家財はその家付の娘と、本店へ下されるだらうといふ話なんだが、さうして見ればおるらん、お前はんの方の話も手軽く片が附かうといふもの。ねえおるらん、念を押すまでもないことでせうが、お前はん片がついたら半さんの方へお出でなさるでせうねえ。」

此「さうなりいすと嬉しいねえ。」

善「それさへ聞けばこつちは安心だ。ぢきに片を附けやす。まあ／＼何にしてもどちらもちりも善悪の差別わかちがついて本當にお目出たいや。いづれ近日のうちに何もかも納まるでせうよ。ぢやあ私やこれからまた二三軒廻るところがあるから、これでお暇いたしやす。おるらん、お大事に。皆さん御免なさい。」

と櫻川善孝は話すだけ話すとそこ／＼に歸つてまゐります、

さてその跡で此糸お蝶が悦びは申すまでもございません。永の苦勞の甲斐あつて、よろこびいさむ春の色、めでたく開く梅ごよみ、吉日撰んでそれ／＼に納まる家の大略おほまそを左に搔抓かいつまんで申上げますと、かの小梅のお由は藤兵衛の妻となり。また此糸は半之丞の方へまゐり、お蝶の素性はこれよりのち榛澤六郎成清の調べによつて本田次郎近常の胤であることが分明ぶんめいいたし、これは六郎の息、丹次郎を内々世話をいたした操の正しい娘だといふので、お蝶は晴れて丹次郎の本妻となり、米八もまた一方ならぬ貞實な女といふので、これは親六郎の許しを得て丹次郎のお部屋さまと敬まはれ、四人の女子はお由を第一に、此糸を二番といたし、三番目を米八といたし、四人目をお蝶と、年齢としの順にそれ／＼姉妹の約束をいたし、いづれも子寶多くもうけまして、末めだたく榮えましたといふ、實けに善人榮え悪人滅ぶ、梅ごよみの長物語もこれで大尾でございます。へい御退屈さま。



## 春色辰巳園

## 第一回

引續きまして「梅ごよみの」續篇で、「春色辰巳園」のお話でございますが、この「辰巳園」は原題が「梅曆梅曆 春色辰巳園」とあります通り「梅ごよみ」の餘談でございますが、すでに御存知の如く「梅ごよみ」の第十八回に、作者春水は初めて辰巳藝者仇吉なるものを登場させました。これは米八とお長の間だけでは、米八の達引を十分に現はせないと思つてした作者の細工でございます。尤も出端の仇吉はまだほんの軽い役しか與へられてをりませんで、作者はこれ

に註して、「丹次郎と仇吉が色情いろこはちよつとしたことにて、土地柄なれば論じたまふな、などと申してをります位ですから、この達引が通篇二十四回といふ大分な「辰巳園」にまで發展するとは作者も初めは豫期してはをりませんかつたらうと存じます。それが御承知の通り「梅ごよみ」の第二十回で、米八が仇吉のために深川八幡の境内で打擲され、その口惜しさに米八が仕返しのために夜陰に乗じて辨天様へ參詣に参りますところを、牛島のお由の家から歸り道の藤兵衛に引留められます。あすこは別に八幡の境内で米八が仇吉に打擲された現場については細かに描かれてはをりません。それがこの大分の「辰巳園」にまで發展いたしましたのは、一つには深川の狹斜に於ける二人の藝者の達引が人情本に好箇の材料であることと、それともう一つ、前に申上げた米八の丹次郎に對する實意の見せ場といふことに作者が興を催したからでございます。それゆゑ「辰巳園」にはこれといふ複雑した筋がございません。仇吉と米八の達引を現はすために、二人の喧嘩の場面が三つも出てまゐります。最初のが冒頭の茶屋小池での喧嘩、つぎは茶屋千代本での喧嘩、ここでは「梅ごよみ」でお馴染の淺草山谷堀の清元の女師匠延津賀が仲裁に這入ります。これが次第に昂じまして、最後の大喧嘩が龜本の座敷で始まり



ますが、この喧嘩を扱ふのが例の藤兵衛で、ここで話はグルリと後へ返つて「梅ごよみ」の第十八回、辨天様の夜詣りのところへ逆戻りをいたす譯で、ここまでは仇吉が主役で、これから後は話の筋は「梅ごよみ」に戻つて、米八の情、丹次郎の誠、お長の恕ひ遣りが纏綿とつゞいて、トド米八、仇吉、お長が仲睦じく丹次郎に仕へるといふ解決になる趣向になつてをります。したがつて「辰巳の園」は時間から申しますと、最初の米八、仇吉の喧嘩の部分が「梅ごよみ」の第十八回、仇吉が始めて登場する所から第二十二回、藤兵衛が洲崎の辨天で米八を引留めるところまでの期間と、その後は「梅ごよみ」の第二十四回以後の話といふことになつてをります。手前の現代語譯では、これらの筋と時間とをすつかり釋し分けまして、發端の「惠の花」からずつと筋を通して大團圓に至るつもりでございましたが、何分時日の都合でそれが出来ませんもので、已むを得ず最初の計畫を抛棄いたしたやうな譯で、讀者のために鳥渡ここで御參考までに「辰巳園」の成り立ちを申上げておく次第でございます。このことをお含みになつて讀んで頂かないと、前後の筋が通りませんやうな可笑しな事になりますから、どうかその事を御承知の上で以下お讀みの程を願ひます。

さて話頭おはなし後へ戻りまして、中の郷の佗住居から、米八の親切で深川仲町裏へ移りました丹次郎、文使ひとは名ばかりに素人俳諧の點者などをいたして鬱々と日を過してをりますうち、土地の藝者仇吉とつした仲になり、米八が茶屋の座敷で拾ひました仇吉に宛てた丹次郎の手紙と、仇吉の落して行つた筭かんざしから米八が手證を押へたことは、「梅ごよみ」の第十八回に述べました通りでございます。その後米八、仇吉は互ひに惚れた男への情と義理との達引から、顔を合はすたびごとに角突き合ひをいたすやうな具合となりました、丁度けふも小池といふ茶屋へ客に招かれて一座した米八と仇吉の二人。客が歸りましたあと、二階ざしきに何やら氣まづい差向ひでをります。この小池といふ茶屋は、毎度この話へ顔を出します吉原の幫間櫻川善孝の俣由次郎が出てをります茶屋で、仲町十二軒の内でございます。一體辰巳の料理茶屋といふものは土地柄で料理は小魚などの新鮮なもの、淺蜆、蛤、鰻などが主なもので、割烹では平清などが最も繁昌したもので、料理屋で風呂場を設けましたのは平清が最初ださうで、この開店ビラは蜀山人が筆を執りまして、「老いたるを養ふ菊の下露したつゆは匂ひて中の淵とこそなれ」といふ歌を詠みましたといふ。さて小池の二階に差向ひの米八と仇吉、客の座敷でした、か飲ん



だと見えましてもう大分酔つてをります。仇吉ふと立つて中窓から庭を覗きますと、下の中庭にこの茶屋の娘でお熊といふのがをりますから、

仇「あらお熊さん、ちよいとお出でよ。話があるからさ。」

と聲をかけます。お熊は二階を見上げて、笑ひながら掌へ「よ」の字を書いて、顔をむつと膨らして仇吉に見せますのは、仇吉と丹次郎の此頃の譚を米八が感付いて腹を立てゝゐるといふ意味。仇吉領いて元の座へ戻りまして銚子を取り上げ、米八に向ひまして、

仇「米八さん、お前ちつとなら上るだらう」

と云ひますが、米八何やら考へ事をしてゐて聞えない様子ですから、仇吉はすこしムツと致して、

仇「米八さん、厭なのかい。私のお酌ちやお厭なのかい。」

といふ聲に米八は氣がついて、

米「あら仇さん、私かい。」

仇「フン。私かいもないもんだ。先刻さつきから猪口の遣り場もないやうに、憚りながらの恐れ入

るのと、下から出りやあいゝ氣になつて、高い藝者衆でござい、はをりさんでございが聞いて呆れるよ。」

米「おやまあ、さうかい。私やちつと今考へ事をしてゐたもんだから。……サアそんなら頂かうよ。」

と米八が猪口を取りますのを仇吉はその手を押へ、

仇「米八さん、人が盃をさすのに、考へ事があるから吞まれないとは随分人を莫迦にした話だね。」

米「あら、何も吞まれないとは言やしないぢやないか。」

仇「お氣がつかなかつたのなら猶悪いよ。いつそ吞まれないと言ふ方が、まだしも罪がない位なもんだ。」

米「仇吉さん、お前さんもよくいろゝな節せつをつけるんだねえ。そんな面倒な酒なら私やよさうよ。」

仇「おや、これはまた乙なことを仰言るね。先刻さつきから人に腹さんざ物を言はして置いて、節せつ



をつけるもないもんだ。清元の新し手ぢやあるまいし。」

米「仇吉さん、もういゝぢやないか。いゝ加減におしな。おとなしく受けてゐれば、何だい面白くもない。お前にや澤山言ふことがあるんだよ。だけど此方は勘辨してゐてやつてゐるんだよ。」

仇「なんだつて。言ふことがある。言ふことがあるなら聞かうぢやないか。サア聞かう、なんだよ。」

米「まあじつとお前の心に聞いて見な。」

仇「おや、こりや又分らないことを言ふもんだね。言ふことがあると言ふから聞かうと云へば、なんだつて、お前の心に聞いて見ろつて。……これあ分らねえの行止りだ。サア何だよ、お言ひな。」

米「言はずと知れた私が亭主さ。」

仇「お前の亭主がどうおしだい。死んだら香奠でも上げようかい。」

米「さうだねえ、満更他人でもない仲だから、香奠までも気がつくと思えるね。」

仇「當り前さ、仲間の誼だもの。」

米「仲間の誼もないもんだ。仇吉さん、お前あんまり人を踏付けにしなさんなよ。……まあいゝさ。偉さうにそんな口を利いて、他人に白痴だと後指をさゝれるのがお氣の毒だよ。ねえ仇吉さん、知つての通り私と丹さんとの仲はね、世間ぢや誰知らぬものはないんだから、いくらお前が羽搦きしたつて、丹さんはまあ私に見返る鳥はないと思つてゐるよ。お氣の毒さま。」

仇「ちよいと、米八さん。もういゝのかい。もう喋舌ることはないのかい。あんまり色んな事を喋舌つて、お前の恥を澤山搔くがいゝや。自惚のねえものはないと言ふが、お前のやうにさう行止つてゐれば、いつそ氣を揉むことがなくつて仕合せだらう。まあ私なんぞから言へば手前の亭主を人に奪られるなんて、智恵のねえ間抜けな話だと思ふよ。ところが、お前から言やあ、自分の亭主を人が何とか思つてやつたら、それこそ有がたいことだと思つて、丁度いゝだらう。可哀さうに。お前もまだ、洗うて見たき沖の水だね。」

米「フン。お前もよつほどお世話焼きだねえ。妙正様の坊さんぢやあるまいし、いやに念を入れてお加持をするんだねえ。清元の節附から自惚の御異見まで、澤山聽聞いたしましたよ。」



だがねえ仇吉さん、お前よく積つて見て御覽。まあお互ひにかうしてこの土地で、どうやらかうやら少しは人も知つてゐてくれる者になつてゐて見れば、お前だつて私だつて、かういふ稼業をしてゐるからには、ちつとやそつとの色ぐらゐは、そりや當り前な譯だあね。私や丹さんの事だつて、別に何とも言やしないよ。だけどねえ仇吉さん、お前のやうに、鳥渡したことも何だと言ふと突掛つて見たがつたり、出會ひさへすれば氣障を言つたりするから、此方だつて三度に一度は心持が悪くならあね。なにも私が通人がつた事を云ふこともないけれど、まあ此先ともに、きつぱり廢しておくれとは無理には言はないが、まあなるべく穩便にお頼み申しますよ。」

仇「なるほどねえ。まあ粹とか通人とかいふ人はお前みたいな人のことを言ふだらうさ。穩便にしてくれろと仰有るが、一體何を穩便にするんだい。ねえ米八さん、それは私に言ふとかい、それとも誰に言ふことなのさ。なんだかお前大分お酔ひなすつたやうだね。ここは十二軒の小池だよ。櫻川の善孝でも呼んでやらうか。ちつと氣を髓に持つておくれな。丹次郎だの亭主だのと、なんだか氣でも觸れてゐるやうだよ。ハ、ハ、ハ、まだ若いのに、何ともはやお氣

の毒なこつた。」

と仇吉は酒の酔ひにまかせて飽くまで手強く突掛つてまゐりますから、さすが利發の米八もグツとせきこみ、命と見繼ぐ男を寝取つた女から何のための悪口雑言と思ふと、口惜し涙が一道道と胸にせぐつて参ります。その無念をじつと我慢をしてゐる米八の胸中、その切なさは察するに餘りあります。

## 第二回

さすがの米八も戀の仇吉があまりの雑言に、ジリ／＼と眼を釣上げて額に青筋を出しましたが、根が利發な女ですから、無念の涙をグツとこらへてわざと落着いた言ひ振りで、

米「まあさうだつたかい。そりや悪いことを言つたね。仇さん、勘忍しておくれな。なるほど深川の水のしみた藝妓衆は、また格別違つたもんだね。」

とニッコリ笑つて落着き拂つてをりますから、仇吉はジリ／＼と腹が立ち、



仇「米さん、お前よくさう澄し返つて、人を蔑んでられるね。なんだか知らないが、先刻云つた穩便の譯といふのをお聞かせな。ねえ、聞かして貰はうよ。」

米「まだそれをお聞きなのかい。お前も餘ッ程猛々しいね。いよ、さうお前みたいに強情を張るなら、證據を見せてあげるから、それから何とでもお言ひな。」

と米八何やら肚に一物ある如くヅケリと言ひますから仇吉はさすがに此間仲町裏の丹次郎の家へ落して來た筈のことがあるから、あれを此場で證據に出されるかと、ぎつくり致しました。しかしまた思ひ直すと、あの筈を證據に出されたところで言拔の出來ないこともなし、よしや丹次郎との仲が知れたところで具合の悪いのは旦那の方ばかり、と言つてこの方も別にむづかしい事はなし、唯あまり米八と言ひ募つて、後で丹次郎から蔑まれると恥しいと、惚れた弱味からとつおいつ思ひ悩んでゐますと、米八も心に一物、ここで筈の事を言ひ出して一番仇吉を凹ましてやるのは雜作もないが、さうしたところで別に面白くもなし、またこれぎりに片が付きもしまい、堰けば堰くほど募るのが戀の意地、一方を責めたところで、男の心を取極めなければ益のないことだ、またそのうちに時機を見て丹次郎ともよく談じて手を切らせようと、二

人の女が互ひに肚の中で呼吸をはかつてをりますところへ、梯子をトン／＼と上つてまゐりますのは小池の娘のお熊でございます。お熊は梯子の途中で手摺に手をかけ、

くま「ちよいと、米さんに仇さん。」

米「おや、おくまさんかい。どうも大そう長居をしちやつたよ。」

くま「長居はいゝけれど、どうしたのさ。二人とも何を先刻からぐず／＼言つてゐるのさ。階下ぢやあ由さんがあんな氣だもんだから、米八さんと仇吉さんがどうかしやしないか見て來いと言ふから、二人とも酔倒れてゐますよと言つて置いたが、お前さん方が言合つてゐるのだ喧嘩をしてゐるのだといふと、何かにつけて煩いやね。もういゝ加減にして兩方とも勘忍おしよ。」

米「心配かけてすまないね。ナニ詰らないことさ。」

と言つてゐるところへ階下から女中が呼びます。

女中「おくまさん／＼、ちよつとお出で下さい。」

くま「アイヨ、何だい。」



女中「アノ提灯屋の又さんとこの何がお出なさいました。」

くま「莫迦、何がとは何のこつたね。お哥さんが見えたのかい。」

女中「エ、そのお哥さんが……」

くま「物覚えの悪いつちやありやしない。今直ぐ行くから、お茶を差上げてお置き。」

と言つてゐる所へ又階下から櫻川由次郎の聲で、

由「おい、仇吉さん、母御が迎ひに來たぜ。」

くま「あら仇吉さん、おつかさんが來たとさ。」

仇「おやさうかい。ぢやあ行かう。」

と仇吉はそれを機に挨拶もそこ、おくまと一緒に下へ降りてまゐります。米八もあとから静かに梯子を下りまして雪隠へはいり、仇吉が歸つたあと帳場へまゐります。

米「あ、ほんとに酔つて、い、心持に寝ちやつた。おくまさん、濟まなかつたね。」

くま「ホ、そんなことはないけど、仇吉さんもお酒の上が悪いからねえ。」

米「ナアニそんなでもないのさ。ホ、ハ、ハ。」

由「ハ、笑ひながら何を喧嘩するのだ。打遣つて置きねえな、高く止つて。」

米「あら由さん、お聞きだつたのかい。勘忍おしよ。私や寝てゐた氣だつたんだが……」

由「違へねえ。夢にでも喧嘩をしたんだらう。」

米「寝言が由さんに聞えたかねえ。……だけど、高く止れといふけれど、そんなことをしたら、猶更いけないやね。」

由「い、つて事よ。俺が肩を入れてやらアな。」

米「あら嬉しいねえ。ほんとうかい由さん。」

と言つてゐるところへお熊も先刻來た客を歸して米八の側へ坐ります。

由「お哥さんは何しに來たんだ。」

くま「い、え、別に用はないんだけど、ちよいと寄つて見たんでしょ。」

由「さう云やあ米さんに相模屋の話はしたつげかな。」

米「あ、福田屋中島屋丸本ほか四間のも聞きましたよ。」

由「さうか。なんだか面倒だのう。」



米「ほんとにねえ。……厭だよ私や、また此處へ坐り込んぢやつて。さあそろ／＼行きませう。」

由「なんだ、また急いで歸つて亭主を可愛がるのか。」

米「嘘うそばかり。何がそんなことがあるものかね。ねえお熊さん。」

くま「サア私には分らないわね。」

米「アレこの人は人の悪い。さういふ時には、さうともとか何とかぼつ蹴けを合はせるもんだよ。覚えてお置きよ。は／＼。」

と米八氣がるく立上りまして、ちよいと棲を取り、路次口を出て門の脇から勝手の方へも愛嬌をかけ、

米「どうも皆さんお使ひ立て申しました。」

由「なんだ、豪儀と時代な科白せりふを言ふぢやねえか。」

米「あゝ、私やこれでもお屋敷育ちだもの。ぢやあ左様なら。」

と微醉機嫌の千鳥足、今の喧嘩もどこを風が吹くといふやうな顔をして、ふらり／＼歸つて

まゐります。

### 第三回

こちらは小池を出ました仇吉、もう日がくれかゝつて人の顔がやつと分る時刻、疊屋横町か稻荷横町と申すと八幡町の中の小路こうちで、今しがた小池の二階で米八と言ひ合つた胸のむしやくしやまぎれに、酒にふらつく足どりふらくとやつてまゐります向ふから來ましたのが丹次郎でございます。

仇「おや丹さんぢやないか。」

丹「仇吉か。」

仇「丁度いゝ所で逢つた、濟まないが、ちつと話があるから、ここの家へ寄つてお呉れな。」

丹「ム、そりや寄つてもいゝが……。」

仇「いゝぢやないかね、そんなにお前かみみたいにお内儀こはさんを可恐こはがらなくてもいゝぢやない



か。」

丹「なに、さういふ譯ぢやねえが、今うちへ客を待たして来たからよ。」

仇「だからさ、ちよいとだよ。手間は取らせないからさ。」

と仇吉は早くも横町に軒を並べたとある一軒の家の障子をそつと明けまして、

仇「増吉さん、ゐるかい。」

増「あい、ゐるよ、誰だい。」

仇「私だよ。お前一人かい。」

増「あゝ一人さ。誰もゐないからお這入りな。」

仇「丹さん、鳥渡這入つておくれよ。」

と誘ひますが、丹次郎どうしようかと黙つて立つてをります。そこへ家の中から出てまゐりましたのは年の頃二十六七、つい此頃まで商賣に出てゐたといふ様子で、眉毛は落してをりますが、まあ氣樂にして暮らしたいといふ鹽梅、染めた鐵漿おはぐろはきれいに落して、櫻川善孝の所で取次ぐ丁字車といふ齒磨を楊子箱へ入れながら表を覗きましたが、髪はけふ洗ひ立てと見えて

ちよいと結んだのが後ろへ引繰り返つて、根を新藁で結び、島縮緬の棒縞の廣袖を羽織つて博多の男帯をだらしなくぐる／＼巻にしてをりますが、仇吉とは極く心易い仲と見えまして、表に立つてゐる丹次郎を見て、

増「おや、もしこちらへお這入んなさいましな。」

仇「サア丹さん、ちよいとお這入りよ。」

と仇吉がずいと奥へ通りますから、丹次郎もつゞいて上ります。仇吉は火鉢の前に坐り、

仇「丹さん、お坐りよ。なによ、そんな所に立つてゐて。」

増「もし、お坐んなさいましな。だけど仇さん、お前ここぢや何だから二階へお出でな。ひよつとまた浮かれた仲間が這入つて來るといけないから。」

仇「ナアニさうはしてゐられないんだとさ。まことに強情な子で困るよ。」

増「まあいゝやね。お前がそんなことを言つてるからだよ。サアお前さん、こんな子に構はずに二階へお出でなさいましな。」

と増吉はさすがに年上だけに垢抜けのしたこなし方で、先に立つて丹次郎を二階へ案内いた



し、直ぐに下りて来て、

増「さあ、お前も二階へお出でな。なんだね、今更はにかむ年頃でもあるまい。」

仇「あいよ、今行くよ。」

と仇吉立上りまして増吉に何か耳打を致します。

増「あゝ承知々々。……さうかい、あれが米八さんのかい。私や初めて見たよ。いゝ男だねえ。いゝよ。今に母御が歸つて來たら、お前の家までさう言つてやるから、ゆつくり遊んでお出でよ。」

仇「さうかい。濟まないけれど、それぢやあ頼むよ。」

と仇吉二階へトン／＼上つてまゐりますと、丹次郎柱に倚れて腕組をしてぼんやり考へ込んでをりますから、仇吉は側へ摺寄り、

仇「あら、この人は何を鬱いでゐるのさ。」

丹「なにも鬱いでゐやしねえよ。」

仇「さうかい。それならいゝが、實は私、お前にちつと話して置きたいことがあるんで、悪

止めしたんだけど、いつでもそんなに無理はないからね。」

丹「だからいゝぢやねえか。かうして二階へ上つたから。」

仇「だつて、何だか氣の濟まないやうな顔をしてゐるからさ。」

丹「よく色んなことを言ふ奴だ。なんだ、その話といふのは。」

仇「あゝその話といふのはね、外の事ぢやないけれど、私が日頃お前に言つてゐることさ。それあ私は米八さんには逆も勝てやしないが、しかし一旦お前とかうした仲になつて見れば、少しは私だつてあの人に意地らしい事をいはなくちやならないこともあるのさ。だからそれをお前に極めて置いて貰つて、いくら私が離れない心で達入を言つた所で、お前の料簡がふらふらで覺束なくては、私やもう死んでも生きてもゐられないほど外聞の悪いものになつてしまふからね、そこを察して、丹さん、どうか悪い者に見込まれたと諦めて、私のやうなはかない女でも、きつと離れる心になつておくれでないよ。」

と仇吉は丹次郎の顔を見上げてほろりと涙を滾します。

丹「なんだ。それをそんなに大層らしく言ふのか。なにも死ぬの生きるのといふほどの事は



ねえぢやあねえか。」

仇「丹さん、お前それぢやあ、私がいかに氣を揉んでゐるのに、お前は當座のなぐさみで今にも風の模様次第で別れてしまふ了簡なのかい。」

丹「ナニさうぢやあねえが、あんまりお前が氣を揉むからよ。」

仇「私やいつそ氣を揉んで、死にでもしたら餘程いゝと思つてゐるよ。」

丹「詰らねえことを言ふぜ。……そりやさうと、ここの家は俺あ知らねえ家だが、かうしてゐてもいゝのか。」

仇「よくなくつてお前をここへ入れるものかね。ここも今では只の家だから、お案じでないよ。お前の逢つて悪い人は來やしないよ。そんな事より今言つたやうな譯だから、丹さん、お前きつと心を極めておくれよ。」

丹「そんなに俺の心を極めろと云ふが、お前の身の事も考へて見ねえ。あんまり極め過ぎると却つて困ることが出來ようぜ。」

仇「なぜさ、可笑しいことをお言ひだね。」

丹「可笑しかねえさ。先達お前の身の上はあらまし俺も聞いたが、たとひどうあらうと、おれの一生女房に持たうなんぞといふことは、ならねえ義理ぢやあねえか。それを知りつゝ、ついた事から日ましに實を盡してくれるから、自由になるなら米八が外に浮氣なことでもあつたら、それを楯にして別れようかとも思つて見たり、しかし又お前の身を考へれば、なか／＼さうした譯にも行かずさ、よしまたお前はさとしても、させてはすまねえ浮世の義理だ。儘にならねえといふ事は、初めから今日か明日切れてしまふと互ひに知れてゐる二人が仲。仇吉、俺あ時々家にゐて一人で思ひ出して、泣いてゐる時があるぜ。」

と丹次郎も我知らず男涙を流して言ひますから、仇吉はしばらく物も言へずにしやくり上げさし込む癪に齒を喰ひしばかりながら、

仇「丹さん、ありがたう。……私が言はうとする事を、お前に今更言はれては、言ふも可笑しな譯だけれどね、正直私も時々思案にあぐんで色々思ひ過し、今はかうして仲よくしてゐても、始終添はれる譯ではなし、どうか術よく別れたら、この苦勞はあるまいと思つて見たり、さうかと云つてこのまゝどうせ綺麗に別れるなどといふことは出來ないことだし、いつそ腹で



も立てゝ別れたら、其の方が諦めにならうかとも思つて見るが、所詮狂言ぢやあ駄目だし、私や丹さん、しみじみ死にたくなる時があるよ。しかし私が死ねば、よくも悪くも母御おつかあにこの年まで育てられた恩はあるし、それに手前勝手をしたらお前のためにも悪からうしと、何を考へても私や悲しくなつてならないのさ。」

と男の手に取縋つて仇吉が泣き沈んでをりますところへ、階下から増吉が黄花を淹れて上つてまゐります。

増「おや、どうしたんだえ。そんなに鬱いでからに、兩方がだんまりかい。」

と増吉は聲をかけながら、茶盆をそこに置いて丹次郎に向ひ、

増「モシ丹さんとやら、お初にお目にかゝつて、まだ馴染のないのに、私からこんな事を云つては失禮ですけれど、この仇吉さんもあなたの事では一方ならない苦勞をしてをりますよ。私もくわしい譯は知りませんが、お前さんも米八さんといふものがあると知りつゝ、かういふ譯になつて見なされば、仇吉さんばかりぢやありません、誰しも覺えのあることで、命を捨てる氣になるのが意地づくの戀の道。だからかうしてたまに逢ふ時には、お互ひに恨みつらみは

廢よしにして、嬉しい顔をして楽しむがいゝぢやありませんか。それあねえ、前後あたまの事をいろいろ考へて見たり、取越苦勞をしてゐる日には、氣色を悪くするばかりで、ほんとに詰りませんよ。こんな事をお前さん方に云ふ私だつて、今までには小春紙治のお綱ぢやないが、面白いこと派手なこと、いろいろ譯のありつたけ氣を揉んでも、縁といふ字の出来不出来で、望み通りにはなりはしません、せめて結んでゐる中は、その日を仲よく暮らすのが第一だと思ひますよ。あんまりお互ひに何かと案じ過して、氣をいためるのは身の損ですよ。仇さん、お前もちつとは浮々おしなね。そんなに二人して涙ぐんでゐたつて始まらないよ。厭なお客の機嫌を取るのに辛い思ひする蔭で、楽しい思ひをすることがあればこそ藝者稼業ぢやないか。ちつと氣をはつきりお持ちな。……なんて年嵩らしく餘計な事を云つて、とんだお邪魔をしちやつたね。ねえ仇さん、ぢやあそのつもりでね。」

と増吉はさすがは苦勞人だけありますから、色の諸分を汲み分けて、異見も手軽く口輕に言ひながら階下へ下りてまゐります。跡に二人は顔見合はせて、

仇「あゝほんとに増吉さんは嬉しい人だねえ。」



丹「わけの分つた親切な人のう。……それはいゝが、俺あかうしちやゐられねえ。」  
と丹次郎が立つのを仇吉は引留め、

仇「まあ丹さん、お待ちなね。そんなにうろたへて歸らなくつてもいゝぢやないか。まだ話もあるから、もうちつとお出でよ。」

丹「でも家へ客を待たして置いたからよ。」

仇「嘘をおつきな。家には米八さんが待つてゐるばかりの癖に。」

丹「仇吉。お前も素人じみて、よしねえな。その甚介じんすけは此方こちにもあるが、俺ア我慢して云はねえでゐるんだ。」

仇「あら丹さん、私は何もお前から言はれる覚えはないよ。あるならお言ひな。さあ聞かう。何を私がやきもちを焼かれるやうな仕打をしたのさ。」

丹「また直きに焦れ込む奴だ。痲癩せきを起すと身の毒だぜ。」

仇「その痲癩も誰のためだよ。いゝ加減可哀さうだと思つて呉れてもいゝ筈だよ。」

丹「思ふどころか、此頃は夢にもお前のことばかりだ。」

仇「また茶化す。人の氣も知らないで、憎らしいつたらありやしない。」

丹「その憎いのは地金ぢがねだらう。」

仇「丹さん、お前本氣でそれをお言ひかい。ねえ、それああんまり情ないお言葉だよ。外に男のないやうに、人に笑はれて譏そられてもまた米八さんに憎まれても、私やお前一人に情をかけて貰へばすむと諦めて、いままでは人にお世辭も云はずにいつこく者で通して來たのが、此頃ぢやあ世間に氣兼ねする氣になつて、肩身の狭い思ひまでして、お前に盡すこの實じつがお前には分らないのかねえ。私やもう口惜しい。……」

と丹次郎にむしやぶりつきますから、

丹「おい仇吉、何をするんだ。痛え〜。……手に負へねえ氣違ひだな。」

仇「あゝ、どうせ私は氣違ひだよ。厭がるものを無理矢理に惚れたといふ了簡は、正氣の沙汰ぢやありませんさ。さあ、この氣違ひを治なしておくれ。さあ治してをくれよ。」

丹「もういゝ。分つた〜。俺が悪かつたから勘忍かんにんしな。……おゝ痛え。」

仇「痛いぐらゐる仕方がないよ。そのかはり今のことを吃度くただよ。」



丹「今のことつて何だ。」

仇「あれもう忘れたのかい。薄情な。お前の心を極めることをさ。」

丹「フ、ン。吃度極めなかつたらどうするんだ。」

仇「極めなきや斯うするよ。」

と仇吉筭を振り上げますから、丹次郎その手を押へて、

丹「エ、危ねえ、目を突くわな。」

と兩人揉み合つてをります時、階下から増吉が、

増「仇さん、いまうちの母御をお前の家へやつたから、ゆつくりお遊びよ。」

と聲をかけます。兩人少し静かになりまして、ちよつと間をおいて、

仇「あいよ。ありがたう。」

とこれから姐さん株の増吉が仇吉の後立になりまして、丹次郎との仲を執成し、それが昂じ

て遂に米八と大喧嘩が始まるといふお話に相成ります。

#### 第四回

傾城も藝者も元はといへば人の娘、生所が別にあるといふ譯ではございませんが、みなこれ貧しい活業のため、或ひは親の不運のため、またはその身の幸不幸から娘盛りの七變化、白粉をつけて柔いものを着てべらしやらいたしますのも大概親の不所存からでございます。可愛い我子をどうかして出世をさせたいといふ、これは誰しも親の慾目ですが、娘にいゝ旦那でもつけば親は左團扇で樂が出来るといふこれがそもゝ大間違ひのもとで、まづ十中の八九は可愛いゝ娘は薄情ものの餌となり、或ひは唆かされて逃隠れをいたす、果ては男の慰みものになるといふのが落ちで、そのうちに萬年新造といはれた花の盛りもさうゝ永くは保ちませんから下らなく一生を男の罰で苦勞をいたすといふ誠に詰らぬことになるのが先づ多いやうで。大概これはしかし母親が突つくのが多いやうでございます。深川仲町裏に當時は佗住居、米八といふものがあるにも係はらず、ふとしたはづみから丹次郎と互ひに惚れ合ふ仲となりました藝者



の仇吉、これはもと淺草小島町邊の裏長屋の娘で、ちいさい時には實におとなしい娘でございましたが、生れついたものか音曲が器用で、その時分からあつちこつちのお屋敷などへ招ばれて御祝儀などを頂くところから、親はもとより貧乏世帯ゆゑ、娘が人中で褒められたり可愛がられたりすれば悪い氣は致しません。慾と榮耀が昂じた果は我子を賣物にしようといふ氣が出るのが淺墓な人情で、母親のお八重といふのがしたゝか者でございますから、十四五になると罪もない我娘を人の誘ふまゝに茶屋小屋へ出入りをさせる。近所の狼達が張りに來れば得たり賢しとばかり、まだ色氣もない娘がもうちつと男をたらしたら、あの息子は金を出すだらう、あすこの番頭は氣前がいゝ、どこかいゝ鳥はかゝらないものかと朝夕氣を揉むやうになると、さう／＼素人にして置いては惜しいといふ氣が出ますから、親の榮耀から苦界へ身を淪めさせる。まことにどうも言語同斷な話で、仇吉深川へ棲を取つて出ましてから早くも三四年、もう今ではこの土地の水に揉まれて指折り數へられる苦勞人になりました。今宵も丹次郎と増吉の家の二階で差向ひ、口舌がしられて丹次郎は先へ歸る、あとで増吉とたがひに愚痴をならべあつてをりますところへ、母親のお八重が迎ひにまゐります。仇吉不肖々々に立上りまして増吉

に暇を告げて格子の外へ二足三足出ましたが、丹次郎との口舌の纏れが残つてをりますから、家へ歸る氣がすゝみません。

仇「ア、何だか面白くないねえ。阿母、お前先へお歸りな。私はあとから行くから。」

母「なんだね、この子は。可笑しなことをいふよ。わざ／＼迎ひに來たのに、先へ歸れの何のとちぶくらずに早くお歩きな。」

仇「先へ行つておくれよ。私やまだ用があるから、あとから歸るから。」

母「なんだか大分酔つてゐるぢやあないか。さあ私と一緒に歩きなよ。」

仇「エ、焦れつたい。なんでまたそんなに急ぐんだよ。」

母「ナニ焦れたついと。焦れつたいのは此方のこつた。この頃は旦那の足も遠いぢやねえか。この勘定知らずめ。おい仇吉や、それあお前がほかに旦那を見付けるといふのなら、ちつとも苦にはならねえが、一と月でも半月でも座敷ばかりでゐられたんぢや耐らねえよ。今月は親父の方の講中の預り金も、晦日には耳を揃へて同行に渡さなければならぬから、二兩はせひ拵へると云つて寄越してゐるし、お八十（仇吉の妹）の方から借りた壹兩も、あれが内證で都合



して寄越した金だから、早くあれも返さねえと、おれが眞逆の時に口が利けやしねえ。」

仇「なにそんなに今並べ立てなくてもいゝぢやあないか。」

母「ナニさうでねえ。言つて置かねえと手前はいゝ氣になつてゐるからよ。さう云やあ、此間旦那の置いて行つた壹兩二歩はどうした。あれから何にも買やあしねえぢやねえか。それに叔父さんも二歩呉れたぢやねえか。」

仇「よくまあいろ／＼詮議をするんだねえ。ねえ阿母、よく考へても御覽。叔父さんの金が以前のやうに貰つてばかりゐられるものか。今ぢや私がかうしてゐるから向ふぢや樂だと思つて、冗談にもこの頃は工面がよからうなんぞといふから、此間も帯を一本拵へてやつたら、叔父さんどんなに嬉しがつたらう。その拂ひに二朱と三百文足してやつたから、二歩貰つたつてそれがいつまであるものかね。」

母「ナニ帯を拵へてやつた。篋棒め。それぢや釣を取られたんだな。なにも今そんな事をしないでいゝことを、利いた風な。かうしてゐるうちに末の方法でもしようとはしねえで取られる所ばかり拵へるのもいゝ働きだよ。」

仇「どうしたつていゝぢやあないか。こんな商賣をさせながら、規帳面なことが出来るものかね。……口喧しいつたらないんだからね。」

母「なにが喧しいことがあるものか。今夜はな、家へ行つて手前の了簡をよく聞いて見た上で、親父にしつかり相談しなければあならないんだ。」

仇「何だつて阿母、親爺にさう云ふつて。何とでも言ふがいゝや。なんだ、今まで思ひ切り私に苦勞をさせて、この歳になつて少し位なことを、何もつべこべ荒立てなくつてもいゝぢやないか。いゝよ、今度叔父さんか叔母さんが來たら、どつちが悪いか聞いて見ようよ。それでも私が悪いといふなら、もう私や死んでしまはあ。」

母「コレ仇吉、ふざけたことを言ひなさんなよ。大勢の兄弟の中で手前が一番苦勞をかけやがつて、ちつと大人になつたところで、息もつかずに手前の自由にされたら、此方こそいゝ面の皮だ。」

仇「何を私が自由をしたよ。」

母「エ、喧しい。いち／＼親に逆はねえで、早く歸るがいゝや。」



仇「だから何でそんなに急ぐんだよ。」

母「なんでもいゝから早く歩け。」

仇「へん自分の家へ自分が歸るのに、早く歸つたつて遅く歸つたつていゝぢやないか。」

と詰らぬことを親子喧嘩をいたしながら、夜更けた町をやうやく我が家へ歸つてまゐります。

仇吉は家へ上ると、長火鉢の前へぐつたりと坐り、

仇「ア、く、ほんとにもう喧しいつたらありやしない。」

母「ナニ喧しいと。コレ仇吉、先刻は途中だから黙つて聞いてゐたが、あんまり洒落るなよ。」

仇「洒落やあしないが、口喧しくつてならないからさ。」

母「オヤこの子は、夜更けにそんな大きな聲を出しやがつて、外聞が悪いや。私やね、お前のまへだが、これでも家にゐたつて大抵氣が揉めてなりやしねえんだよ。」

仇「フン何も氣を揉んで貰はなくともいゝのに、そりやお氣の毒だね。」

母「なんだと、もう一遍言つて見ろ。やさしく出れあいゝと思つて、あんまり巫山戯るな。」

仇「こつちは根ツからいゝと思ふことなんかないね。私こそ氣が揉めてく……。エ、口惜

しい。」

と仇吉いきなり口惜し紛れに手許にありました茶碗を投げます。茶碗は臺所の障子にあつてガラガチャン。

母「コレ仇吉、その投打は誰にするんだ。サア口惜しけれあこのおれを投げるとも打つともしろ。黙つてゐれあ、日ましに親を馬鹿にしやあがる。」

とだん／＼大聲に言合が募つてまゐりますから、近所の人が聞きつけまして、二三人仲裁に這入つてまゐります。そこへこれも近所にをります同じ朋輩藝者の春吉といふが様子を聞いて駈けつけてまゐりまして、

春「オヤどうしたんだよ仇吉さん。阿母もまあ堪忍おしよ。」

と親子の中へ割つて入り、双方言ひ慰め、春吉はあとの人に阿母の方を頼み、自分は仇吉を家へ連れてまゐります。

春「仇さん、お前また今夜はひどく酔つてゐるぢやないか。」

仇「春吉さん、濟まなかつたねえ。なにね、お前の前だけれど、此頃はどういふものか、實



に口喧しくつてならないだよ。」

春「どこも同じだよ。年をとると誰しも愚痴つぽくなるんだからね。いゝ加減に氣休めを言つて置けあいのさ。」

仇「だつて、あんまり口惜しくなるから、つい……」

春「お前が勝氣なところへ、阿女あんながなか／＼後へ引かねえ質たちだから具合が悪いね。」

仇「あの業突張りめ。フンいめ／＼しい。」

春「まあいゝさ。それはいゝが丹印たんじりしはどうしたい。私やここで聞いてゐたら、一人で何だか小言を言ひながら出て行つたよ。」

仇「全體それから起つたことなんだよ。」

春「阿母おつかあがそれを喧しくいふのかい。」

仇「それがね、うちの阿母と來た日にや、猫の目のやうにいろんな氣になつて仕末がつかないよ。」

春「さうかねえ。米よの字の方はあれから仲でも直つたかい。」

仇「大違ひさ。まだ／＼この間の十二軒のあとを思ひ切り言つてやらなくちや……」

春「なるほどねえ。まあそれもいろ／＼譚のあることだらうが、元はといへば米八さんが大そう苦勞をしたんださうだから……」

と言つてゐる所へ春吉の妹のお秋といふのが茶を持つてまゐります。春吉、お秋は姉妹で藝者に出てをります。

仇「おやお秋さん、ありがたう。酔つて苦しい時には熱いお茶が何より嬉しいよ。御馳走さま。」

と仇吉は茶碗を取り上げながら、お秋の髪を見て、

仇「おやお秋ちゃん、今日はいつものより風ふうが好くつて、髻こむぎが低くつて大へんいゝねえ。誰だい。私もこんどはさう結つて貰はう。」

秋「あら仇さん、有りがたう。だけど私は毛が悪いから駄目なのよ。……それより今三孝さんが娘大幸記といふ本を貸しておくれたが、藝者の一代記なんだつて。評判がいゝつて云ふけど、狂訓亭といふ作者は野暮なんださうだけど、娘と藝者のことをひどく穴を知つて書くんで



すつてね。」

春「なんだねこの子は。詰らないことを言ふよ。仇さんは洒落本を直ちかに行つて、楽しんだり苦しんだりしてゐるのに、草双紙の話なんぞは耳へ這入るものかね。」

仇「いゝえね、ほんとに心柄とは言ひながら、時々一人で泣いてゐる時があるけれど、これでよく座敷が勤まると思ふよ。」

春「さうさねえ。私やまた色をしたことがないから氣の揉めることはないが、色が出来たらさぞ楽しみにもなつたり、腹の立つこともあるだらうね。」

仇「ちよいと、延津賀さんがお前のことをくわしく書いて、嘉造さんが手傳つて、三冊ばかりになつてゐるとき。あんまり立派な口は聞けないよ。」

春「あらさうかい。そいつは氣恥しいね。」

仇「氣恥しいといへば、私もこの間米八さんと喧嘩をしたことを思ふと、今さら氣恥しいよ。」

春「阿母とも喧嘩をしたり、米ちの字とも物言ひをしたり、みんなこれが丹ぢさんのことからだから仕方がないやね。」

仇「それがさ、此方こつちでこれほど氣を揉んでゐるのに、向ふぢやちつとも察してくれないんだから立つ瀬がないよ。」

春「それでいゝのさ。みんな可愛いゝ男のためと思へば、それも仕方がないよ。」

仇「それあ當り前さ。」

春「あれだ。此方が言ひ出して受けさせられたよ。」

秋「仇さん、もう大ぶ夜が更けたやうだから、今夜は私と一緒にお寝なさいな。」

仇「あゝすまいねえ。それぢやあさうして貰はう。」

といふ折から八幡さまの八つの鐘がポウンと鳴ります。

## 第五回

さてこちらは藝者の米八、とかく丹次郎と仇吉の仲が氣になりますから、けふも朝湯の歸り途、赤い糠袋を口にくわへて京藍二重染の浴衣を抱へながら、丹次郎の家の障子をガラリとあ



け、

米「丹さん、ゐるかえ。」

丹「オヤ今日はまた豪儀と早く起きたな。湯は混んでゐるか。」

米「いゝえ空いてゐたよ。私やここで化粧して行くから、そのうちお前もお湯へ行つてお出でな。いま丁度仇の字が這入つたところだよ。」

丹「又詰らねえことを：彼奴に何が用があるものか。」

米「あんまり用のないこともあるまい。増吉さんとこの二階も悪長かつたからねえ。」

丹「おい米八、お前いやにこの頃は愚痴になつたぜ。八軒の中に唯つた一人の捌け者だと評される身分ぢやねえか。それあ人知らねえ妬介だから構やあしねえが、思ひもつかねえことを言はれると、俺も腹は立たねえが氣の毒になるぜ。」

米「氣の毒なら仇の字の方をふつつりと止めておくれともいはれまいから、ちつと内端にしてお呉れな。」

丹「何ぞといふと仇吉々々といふが、俺あ何もお前に言はれるほどのことは……」

米「ないと言ふのかい。それあ丹さん恨みだよ。それあね、私はどうせこんな我儘ものだから、三度に一度はお前にも氣障がられることもあるだらうが、まあ及ばずながら、かうして苦勞をしてゐるんだから、ちつとは可哀想だと思つてくれてもいゝぢやあないか。」

丹「それあ思はなくつてどうするものか。實は俺もなるべくお前の厄介にならねえやうにと思つて、色々氣を揉むんだが、なにをするにも元手はなしさ、さうかと言つて詰らねえ夜商人でもしたらお前の外聞にも關はると思ふから、實際氣が揉めてならねえんだ。」

米「へえそれで色をお縁ぎなさるのかい。乙な氣の揉みやうだねえ。」

丹「おい、俺がいつ色をしたことがある。詰らねえことも大概にしろ。」

米「私こそ詰らない身の上だよ。」

と何やらぐちぐち朝ッぱらから愚痴の並べ競をしてをりますところへ、表の障子をガラリとあけて、増吉の家の仕込の子供が仇吉の使ひで駈け込んでまゐりますが、米八のゐるのを見てはつと驚き、

子「アラ私は忘れたよ。お前の所だつてか直さんの所だつてか、もう一遍家へ行つて聞いて



来よう。」

とさすがは岡場所育ちの子供のこととて、丹次郎にちよつと目配せをして、あたふたと歸つて参ります。米八はじろりと丹次郎の顔を見て、

米「あれあたしか増吉さんの家の子だね。」

丹「ム、たしかさうだつけ。」

米「さうだつけないもんだ。いつもちよい／＼来る様子ぢやないか。お前増吉さんどうしてさう心易くするんだい。」

丹「増吉とか。それはお前、……ナニ實はの、この間疊屋横町で本を借りてゐる時、増さんの旦那が善孝さんの所にゐての、それから一緒に連れて行かれて、増吉さんの家で酒を飲まされたが、あの時から一二度行つたことがある。今のは、たしかに人違ひだ。」

米「いゝ加減なことをお言ひな。増吉さんは旦那も亭主もありやしなよ。小網町の店にゐる兄さんが、通ひ番頭になつて、今ぢやあ大層仕合はせがよくつて、身分がちやんときまつたから、妹が藝者なんぞをしてゐるといはれては仲間の衆へも聞えがわるいといつて、兄さん

が引込ませて母親さんと一緒に置いてあるんだから、旦那なんぞ取つたらその兄さんが承知するものかね。それあどうせ一度は棲を取つた人だから、情人ぐらゐはあるかも知れないが、お前をあすこの家へ連れて行つて御馳走する人なんか知らない筈だよ、但し、仇吉さんは姉妹のやうにしてゐるといふことは、櫻川の由さんから聞いて知つてゐるがね。」

丹「フウムさうか。それぢやあその増さんの兄さんだらう。俺はまた悪く氣取つて増吉さんの旦那だと思つてゐた。……そりやまあどつちでもいゝが、ときにお米、俺はお前にいつかは言はうと思つてゐたが、いや／＼、何もかも世話になつてゐながら、亭主ぶつて、妬介も出来過ぎたと蔑すみもしようと、なまじ言ひ出して、そんならどうとも勝手にしろと突出されても立派には口の利けない身分だから、今までまあ了簡してゐた譯なんだが、しかしな米八、お前は俺の事ばかり目くぢら立て、言ふけれども、ちつとはそつちの心にも遠慮といふものがありさうなものぢやねえか。いや、かう云つたら、ナニ其方はお客の大事も色仕掛も、みんなこの俺を貢ぐからだと言拔ける氣だらうが、俺は實はお前にさう云ふ氣兼ねさせるのが氣の毒になつて来たんだ。どうだ米八、ここらでいつそきつぱり切れて、お互ひにちつと安堵しようぢ



やあねえか。」

と思掛けない丹次郎の言葉に米八はびつくり致します。丹次郎の顔を今更のやうにじつと見詰め、くやし涙をばら／＼と流して、いきなり獅噛みつかうとしましたが、それを怵へて、痛癢まぎれに鏡臺の鏡を取るが否や脇へバタリと投げ出したと思ふと、そのまゝ唇を噛んでじつと鏡臺へ倚りかゝつたまゝ、しばらく黙つて涙を呑んでをりますから、丹次郎も知らぬ振りをいたして小本か何かを讀んでをります。やゝあつて米八は膝をすゝめ、

米「ねえ丹さん、お前今の様子ぢやあ何かしつかり見留めたことがあるやうなお言葉だが、私はねえ、丹さん、夢にもよそほかの心は持たないからこそこの苦勞をしてゐるんだよ。なんだつてお前切れるの別れるのと、そんなに輕々しくお言ひなのだえ。だから、それがあから私も日頃から、妬心らしいが彼是と時々針をさして置くのに、その都度何だ彼だと白をきつてとう／＼向ふへ抱き込まれて、揚句の果には今の切口上。それはお前はそれでいゝでせうさ、だけどこの私はそれでどうしてのめ／＼と座敷が勤められるものかね。今更いふのも愚痴な事だが、中の郷からこつちへ越して、あれから今日が日まで、冗談にもそんなことを言はれたこ

とのない私だよ。自分ながらも莫迦らしいほど一途な氣性だが、なにを證據にお前は言ふのさ。サアその譯をしつかり言つてお呉れな。どこの座敷へ出てゐたつて、なるべくどんなお客とも對座ではゐないやうに／＼と心掛けてゐるこの年月の氣兼苦勞。私のやうなものでも藤さんはじめ何だ彼だと動きの取れない義理づくめ、それをあんまり情が剛すぎるとまで言はれて、憎まれるほど慎んでさ、野暮藝者だのぐうたらだのと人からは笑はれたり譏られたり、と云つていつこくな色氣もなく、まるで新子が初に出たやうに可恐がつてばかりゐたんぢやお客はつかず、人にも負けまい、風俗形衣も立派にしよう、それでゐて厭らしい事は眞平だといふ、そんな勝手な羽織衆がほかにあるかないか知らないが、私はそれで通して來て、土地でも札附の男嫌ひと名を取るまでには、丹さん、私やどんなに苦勞をしたか知れやあしないよ。いかに惚れたを附込んで我儘を言へばと言つて、それぢやああんまり冥利が悪すぎやしないかい。とこんな事を言へば猶更愛相がつきるだらうけれど、お前も何か腹があつて言ひ出した今の切口上私やもう覺悟をきめたから、丹さん、お前もどうかその氣でゐてお呉んなさいよ。分りました

ね。



と米八にづけりと言はれましたから丹次郎は驚きました。もと／＼當のない出鱈目な言ひ掛りですから、腹の底ではぶる／＼ものでございます。

丹「コウお米、覺悟といつてどうする氣なんだ。」

米「どうすると言つて、お前も野暮人だね。切れる女の心意氣を聞き糺さなくつてもい／＼ぢやあないか。」

丹「いや、それあ不可ねえ。まだ切れきれねえうちは、俺が掛り合ひだ。その覺悟といふのはどうする氣なんだ。」

と丹次郎膝を乗り出して聞きますから、米八腹の中でくす／＼可笑しいが素知らぬ顔で、

米「まあ煩くお聞きだねえ。死ぬとなれば、掛り合ひにならないやうに、いくらでも仕様はありますよ。」

丹「おい米八、お前何も死ぬほどの事はねえぢやねえか。何もお前死なねえだつて……」

米「い／＼だよ。私が自分の身で死ぬのに、入らざるお世話だよ。」

丹「ナニ手前の身だ。おい米八、そんな我儘は言はせねえぞ。これこの通り、互ひに彫つた

入れぼくろ、憚りながら米八が、命の主はこの丹次郎だ。俺の體もその通り、米八といふ主があれあ、おいそれとはならねえよ。」

米「それだから死ぬ氣になるんだよ。だけど一人ぢや死なないから安心おしよ。」

丹「誰と死ぬのだ。」

米「死んで亭主を取殺すのさ。」

丹「違えねえ。うらみ重なる伊右衛門どのか。とんだお岩の聲色だぜ。」

と惚れた同志の痴話喧嘩、はてしもなく言ひ争つてをりますところへ、小池のお熊が大橋の毘沙門様の歸り道で、表から障子を明けて聲をかけます。

くま「丹さん。あのね、由さんが言傳だけれど、この間の唄の文句が出来たらお呉れと言つてゐたよ。おや、米さん、お早う。」

米「お熊さん、もう／＼丹さんが世話が焼けて仕様がないんだよ。」

くま「おほかた虫でも起つてゐるんだらう。お灸でも澤山据ゑておやりな。」

と米八がつけて出す煙管を吸ひ終つて、



くま「御馳走さま。ぢやあ丹さん、頼みましたよ。」

丹「まあ上つて行きねえな。」

米「およし、お熊さん。こんな性悪の男の所へお上りでないよ。」

丹「何を詰らねえ事ばかり言やあがる。」

くま「ホ、ホ、ほんとにお羨ましいねえ。」

米「お羨ましいどころか大違ひだよ。かう見えても極く女好きで困りきるよ。」

と内と外とで話し合つてをりますところへ、先程の子供の使ひを待ち兼ねたと見えて、仇吉が路次口から駒下駄を鳴らして駆け込んで來ますから、お熊は仇吉を目顔で睨みつけ、「エヘン」と一つ咳拂ひをして、米八に見えないやうに仇吉に小指を出して見せますのを、米八は直ぐと氣取つて、

米「ドレ小用に行かう。」

と表へ出る時、ちやうど路次口を引返して行く仇吉の姿を見送つた米八の胸の中、戀が積つてこれから二人が互ひに藝者の穴の極秘を練つて大喧嘩をするといふお話になります。

## 第六回

鹽むきの小赤貝ほつか少なしといへども、この土地に來て見る時は座敷肴のお職にして、絶えることなき流行妓はやりつこ、けさ顔振れの新妓があるかと思へば、夕方引込む自前もあり。ここに稻荷横町といふ新道に、いづれも白狐の通を得た手取り手管の上手連が軒を並べて色を稼ぐその一軒増吉の家の中に、仇吉けふも朝から遊びにまるつてをります。どうしたものかこの間から眼を病みまして、日朝様へ願掛けなど致しますが、仲々捗々しく驗げんが見えませんが、心の中には丹次郎への戀慕、米八との達引が痞つかへとなつて、それでなくとも焦り／＼致してをるところへ眼病と來ましたから、まことに鬱陶しい限りで、俗に齒痛女に眼病み男などと申して、眼病みは男でもちよいと色つばいもので、色の白い若い男が紅絹の片かなんかで斯う眼を拭きながらしほ／＼してをりますところは鳥渡情合のありますもので、まして女でございますから一層しほらしい。春水が戀に寝れた仇吉に眼を病はせましたのはまことに穿つた作者の腕でございま



す。氣の合つた同志といふものは寔に遠慮のないもので、増吉の母親も入れて保養がてら四方山の無駄話、長火鉢の側で茶を淹れまして仲よくやつてをります。

増「サア阿母さん、お茶がはいつたから此處へ置くよ。」

母「あいよ。」

仇「阿母さん、今子供が越後屋（菓子屋）から何か取つて来るから、もうちつとお待ちよ。」

増「さう〜。さうだつね。それぢやあこのお茶はあけて置かうか。」

母「ナニ先へ一杯飲んで咽をしめして置くからいよ。」

増「さうかい、そんならもつと注がうか。仇さん、お前はお茶は厭か。」

仇「いゝえ頂くよ。お茶はお茶、お酒はお酒さ。」

増「女房は女房、情人は情人か。どうしても後から言ふものの方がいゝねえ。」

仇「またかい。やつと途切れたと思つたら……。」

と笑ひ合つてをりますところへ使ひに行つた子供が包みをかゝへて息せき切つて歸つてまゐります。

仇「おや御苦勞さん……大層また息を切らして歸つて來たね、この子は。どうしたんだよ。子」だつてね、あんまり長く待たせるから小僧と喧嘩してやつたら、小僧が追掛けて來たら大急ぎで逃げて來たの。」

増「また喧嘩をしたのかい。困つた子だよ。外へ出ればいつでも喧嘩だ。ちつと嗜みなよ。」

仇「ナニサ私が待つてゐると思つて、急いで來たんだあね。さあ阿母さん、お待兼ねのが來た

から早くお食いな。」

母「ありがたう。ドレ〜。これは老人がはじめるものだよ。」

仇「まあそんなものさ。増吉さんも一つどうだい。」

増「一つは御招判にあづからうよ。」と越後屋の練羊羹と極製のかすてらへ庖丁の目を入れて臺へのせるばかりしましたのを一切摘み、

増「おやまあ、ぞんざいな切り様だね。酒と餅の兩刀だからまあ不承してやれ。」

仇「だけど羊羹の切り方の悪いのは、酒の悪いほど腹が立たないから不思議さ。」

増「違えねえ。練羊羹よりこの薄皮の方がうまさうだよ。」



母「コレサお前、さう一人で精出さなくてもいゝわね。意地の穢い。」

増「ハ、お前の食べるのが少くなると思つて急腹だよ。」

母「巫山戯なさんな。外聞のわるい。憎れ口ばかり聞くよ。仇さん、お前も悪いものを姉妹分にして不可ないね。」

仇「だけどね阿母さん、お前の處は羨しいよ。阿母さんがかうして捌けてゐるからね。」

増「ナニこれでさうでもないんだよ。時々愚痴をいふ時もあるんだが、その愚痴がまた可笑しいのさ。この間も何だか獨り言で、ア、もう死んででもしまひたい、焦れつてえといふから私がオヤ阿母、何がそんなに焦れつたくつて死ぬ程の事があるんだつて聞いたたら、何も言ふ事がないもんだから、自分でも可笑しくなつて噴出してゐるのさ。それだから、この間も兄さんが來た時に、何だか忘れたが私の事を吩咐けると云つて、話してゐるうちに半分ごろから他の話になつちやつてさ、兄さんが可笑しがつて笑つたら、眞面目な顔をして、お前達は寄つて集つて親を馬鹿にするつて腹を立てるから、兄さんが、そんなら阿母さん、お増を懲らしめのために屋敷へでも奉公に出して、ちつと窮屈な思ひをさせたらよからうと云ふと、もう直きに泪

ぐんで、年寄に厭がらせを言つて押搦ふつて怒つてゐるのさ。私やもう側で聞いてゐて、可笑しくつてく……」

母「エ、いゝ加減に親の店卸しをするもんだ。」

仇「ハ、ハ、よかつたね」

と仇吉腹をかゝへて可笑しがり、紅絹のきれで眼を拭きながら、子供に薄皮を取つてやり、

仇「さあ、お前も喧嘩の駄賃をお食べ。」

増「阿母、この子をちつと叱つてやんなよ。仕様が有りやしない。コレ奴や、今度から菓子屋へ行つて待たされても、腹を立つんぢやないよ、薄皮ばかりは出來たてを寄越すんだから。」

母「おい奴や、手前やおればかりムシヤついてるぢやいけねえ。ちよいと一走り肴の方を催促して來な。」

子「いま歸つて來る時早くと言つて來ました。」

増「嘘を言ひな。先刻は菓子屋の小僧に追掛けられて家へ駆け込んだぢやないか。早くもう一遍行つて來な。」



仇「まあゆつくりでいゝやね。」

母「いゝから早く行つて來な。さあ、私もそれぢやあ行つて來ようかね。」

増「あゝ濟まないが、さうしておくれな。」

仇「どこへ行くのさ。」

母「ナニ淨心寺へ日參の御名代さ。ぢやあ仇さん御馳走。ゆつくりお遊び。お増や、私や序でに永代へ廻つて、賀久子さん處へ寄つて、奴のお手本を取つて來ようか。」

増「あゝさうしてお呉れな。そしたらね、何か新作の稿本でもあつたら借りて來ておくれ。」

母「よく色んなことをいふ子だよ、忘れてもいゝかい。」

増「忘れることまで斷らなかつていゝやね。」

仇「アハ、こりや可笑しい。」

母「オット巾着を忘れた。かう粗忽しいんだからね。お増や、その用算笥の上にあるからちよいと取つてお呉れ。」

増「ソラ始まつた。杖藏あたりから歸つて來る奴さ。……杖をあげようか。」

母「ころばぬ先の用心か。まだそれ程は老込まねえよ。」

増「そりやお前は老込まなくつてもさ。……」

母「エ、もういゝわな。……それぢやあ仇さん、ちよいと行つて來ますよ。ごゆつくり。」

と氣さくな母親機嫌よく淨心寺のお祖師さまへ代參に出掛けてまゐります。跡にお増は笑ひながら、

増「ハ、いつも騒々しい阿母だよ。さあ仇さん、もう遠慮する者はないから、心おきなく惚氣な」

仇「ナニお前の處の阿母なんざあ、ちつとも心は置けないさ。」

増「あれでも随分むかしの洒落者だが、歳をとつちやあ駄目だねえ。」

仇「ナアニお前、ここの阿母は通人だよ。それに引代へ、うちの阿母と來た日にやあ、全くもうたまらないよ。」

増「ナニお前、どこのだつて年取ると皆んなさうだよ。」

と言つてゐる所へ子供が先に立つて色々皿の物がまゐります。



増「御苦勞々々々。そこへ置いて行つてくんな。奴や、お前その彌徳利へお酒を入れて、仇さんの方へ遣んな。」

仇「オットよし〜。此方へ寄越しな。私わたいがするよ。」

とこれから長火鉢を中に二人で盃のやりとりが始まります。

増「しかしお前、あんまり過すと、眼に悪いよ。今日は餘ッ程いゝやうに見えるが。」

仇「あゝ今日は大へんいゝよ。日朝さまは有りがたいね。」

増「あんまりのぼせるから眼も悪くなるんだあね。」

仇「さう云はれると、此方ばかり惚のぼ込せてゐるやうだが、どうしてお前……」

増「もう分つた〜。そりやもうあつちでも惚のぼ込せきつていらつしやいますとも。」

仇「いゝえさ、まあお聞きよ。丹印がさ、私のこの眼をどんなに案じてゐるか知れやしないんだよ。」

増「ソウラ始まり〜。」

仇「まあさ冗談ぢやないよ。この眼がつぶれると……」

増「丹さんの顔も見られずか。」

仇「それだよ。それを思ふと私やほんとに気が鬱ふさいでならないよ。」

増「なにお前、潰れるほどの眼で酒が呑めるものか。だいいち、さう抜け〜と惚のぼ氣けてるられるものかね。」

仇「それもさうか。おやお酒が冷たくなつた。」

と氣心の合つた同志が互ひの身の上ばなし、聞いたり聞かれたりいたしながら、やはり話は米八と丹次郎の上に落ちがちでございます。

仇「だけどねえ、私もつく〜考へるよ。そりやもう米八さんに義理と人情をかいてしまへば、世間の口はなんのそのだが、しかし丹さんも米八さんには言ふに言はれぬ恩おんがあるさうだから、いつもお前に話す通り、どうもどつちへもつかれぬ義理で、あの人私にも顔を立てさせてくれる心になりかねない氣性だから、そればかりを思ひ過して、銘々齒痒はい心を出してゐるのさ。」

と仇吉すこし聲を曇らし眼を押へて沈んでをりますから、増吉は勵まし心に、



増「まあ、なんでもいゝからあんまり氣を揉みなさんな。そりやねえ、人間は義理や人情を捨てゝしまへば譯はないさ。だが、あつちを考へ、こつちに氣兼ねをして苦勞するから世の中はまた面白いのさ。色だつて同じことだよ。いきなり世間を捨てゝかゝつちや、それこそ捨鉢で、いとしい懐しいの情合も自然薄くなるといふものさ。お前なんども猶のこと、藝者仲間では下らねえ米八、仇吉、まあどつちに勝負があつてもと思ふ二人だが、お前は不思議な縁で姉妹同様になつてゐるから、寄場の世間咄にも、どんなに色に凝り固まつても、あれは不人情な子だ、わけ知らずだと云はしたくないと思ふのが、まあ私たちの嘘でない心持だがねえ。」

仇「あゝ嬉しいよ。お増さん、私やお前にさう云はれると涙がこぼれる。日ごろ心易くして貰つてゐればこそ、一緒に苦勞して貰ふと思ふと、ほんとに涙がこぼれるほど嬉しいよ。」

増「こんなことを言つて、またお前が鬱ぐと悪い。さあ、ちつと浮々と飲まうよ。」

仇「それはいゝが、阿母は遅いね。」

増「また方々へ寄り歩いてゐるんだらう。いつでもかうだよ。オヤさう云へば奴は何處へ行つたつけ。」

仇「今しがたその本挟みを持つて出て行つたやうだつけが。」

増「さうかい。そんなら大方稽古に行つたんだらう。行くなら行くと思つて行けばいゝに。」

仇「なあに、あんまり此方が夢中になつて話してゐたから、悪いと思つて、わざと黙つて行つたんだらうよ。なかゝ利巧な子だね。」

増「馬鹿ぢやあないやうだが、その代りお轉婆でゝ困りきるよ。」

仇「その代り藝も覚えがいゝだらう。」

増「割方ね。年にしては随分覚えがいゝ方だが、ナニまだ何だか分りやしないさ。まあしかし何とか仕込んでやりたいもんだと思つてゐるが。」

仇「お前のお仕込なら、今にいゝ姐さんになるよ。」

増「いゝえ左様でもないよ。仇さんの前だが、何にしても私達はもう時代違ひになつてゐるから、どうもやりにくいよ。稽古をして來たつて、此方が知らねえ新物なんぞは小言を言ふことが出来ないから、押手が利かなくつて焦れつたくなるよ。」

仇「だつて時代違ひといふほど違やあしないやね。それに假令知らなくたつて、お前なんぞ



の座敷の出立は恐ろしく藝を磨いたものばかりで、磨かなくちやならなかつたさうだから、何と言つたつて子供のためには強味だよ。」

増「なあにさうでないよ。私なんかわづか四年ばかり引込んでゐるが、一年違つたつて様子の變るものだよ。殊にけふ日の羽織衆は一番骨が折れるだらう。どつちかといふと、私なんかどうも一こく座敷だつたから、面倒臭いことが嫌ひだといふ野暮なもの。てんで流行やうがないやね。」

仇「なあに、そんなことがあるものかね。お前の噂は聞いてゐるもの。それに較べると、今の私らの仲間は皆んな樂なものさ。そのうちでも私なんぞは、これといつて藝はなしさ、まあ羽織衆の仲間が附合をよくして呉れるから氣兼ねないやうなものの、船宿やお茶屋で最辰にして貰つてゐる事を考へれば、ほんとに今更遅蒔なお世辭ぢやありやしないよ。これもお前なんぞと心易くしてゐるから、何か行届いた羽織衆と世間で思つてくれるらうと、自力でかうしてゐると思つてゐるやしないよ。」

増「ソラその通りだ。だからけふ日の藝者衆は如才がないと云ふのはそこだよ。さう人を嬉

しがせるといふのが、日頃商賣熱心な證據なのさ。藝ばかりが藝者ぢやないやね。今はまた猶のこと、張りも意氣地も達引も、昔にまさつた人情だから、それに順じて藝もその通りさ。私らなんぞの時分には、「おけさせうぢきなら」で濟んだもんだが、どうしてけふ日は「お前待ち／＼蚊帳のそと」と歌つた口で、住吉「またの月見をたのしみに、日數かぞへて思ひ出す」をやる世の中だから、實に骨が折れるよ。」

と今と昔のこの社會の變遷、風俗人情の穿ち話は、どうやら唯今と變りがないやうでございます。

## 第七回

さて増吉の心遣ひで氣の鬱がる眼病の保養に一杯呑みながら四方山話をしてをりますところへ、表の格子を靜かに開けて這入つて來た一人の男がございます。

男「へい御免なさいまし。増吉さんのお宅はこちらでございますか。」



増「あい、どなた。」

男「へい私は寺町の者でございますが、昨晚このお手紙を頼まれましたが、あまり遅くなりましたのでお届け致しませんでした。今日もまた急な用を頼まれましたので大きに遅くなりまして相済みません。」

増「あゝ、文ですか。そりや御苦勞さま。鳥渡待つて下さいよ。……仇さん、ソラ丹さんから文だよ。」

仇「おやさうかい。……アノ使ひやさん、お前今日急な用を頼まれたといふのは、やつぱりこの人にお頼まれかい。」

男「いゝえ外さまでございます。」

仇「あゝさう。それならよござんす。」

と仇吉何やら安堵の體なのは、もしや急用といふのは米八の用ではあるまいかとふと氣にかつたからで、男もこの位女から心にかけて貰へばまづ男冥利の行止りでございます。使ひの男は外の手紙を二三本撰分けながら、

男「それでは宜しうございますか、お返事でも届けますのではございませんか。」

増「いゝえ返事はいゝんですよ。ぢやあ慥かに請取つたと言つて下さい。お使ひ代は。」

男「あちらで頂いてまゐりました。ぢやあ左様なら。」

増「あゝ御苦勞さんでした。」

と使ひの男が歸ると二人は早速文を読みにかゝります。

仇「なんだか氣になるやうな、焦れつたいやうな……ちよいと御覽よ、いゝ筆蹟だらう。」

増「なるほど書き手だね。さあ早くお讀みよ。」

## 舌代

ついちよつとやうすきく間もなつかしききの  
ふけふこんなゑにしがからにもとやぼなたと  
へもぐちといふよはみにひかされ氣さをしよ  
うちのあくひつ文だんおゆるしあれかし



仇「ちよいとまあ御覽よ、嬉しいぢやないか。」

増「おや、もう眼も何もかまはなくなつたね。日朝様よりこの文の方が有がたいだらう。」  
と増吉ちよいと仇吉の背中を抓ります。仇吉「痛いよ」と笑ひながら先を讀み續けます。

おん目じよりふた日はたてど

仇「アラどうしたんだらう、今朝の文は。」

増「ドレ、お待ちよ。……いやこれは斯うだよ、これはね、こつちから頼んで遣つた文は、今朝まだ届かない中にこれは出た文だよ、昨日早く出たんだが使ひが遅くなつて今朝になつたんだよ。」

仇「ム、／＼さうだらうねえ。まあ後を讀んで見よう。エ、トおん目もじよりふた日はたてど……」

もはやぢがねをあらはしてかなんのだよりも

仇「なんだか縁起がわるいねえ。」

増「なぜさ。」

仇「だつて目出たくと書いてないもの。」

増「そりやお前、男がそんな事を書くものかね。しかしふだんお前が惚氣のろけるのも無理はないねえ。」

仇「あゝもう何だか焦れつたいよ。」

おとづれもなう、きのふぢやうしんじへ参り  
候へどもかげだにみせぬころなさ日てうさ  
まへ日さんもやまの神へは極内ごくない／＼をしらぬ  
顔しつてかしらぬかさうしたものぢやあるめ  
え かしこ  
よふじ  
より上



増「實際あの人は惚れても憎くない人だね。一つとして抜目のない、若い人には珍しいよ。……それはさうと、大分暗くなつて来た。もう二人とも歸りさうなもんだが、まあ灯をつけよう。仇さん、お前は眼が何だから眩しからう。かういふ鹽梅に置かう。」

仇「ナニ今日はよつぽど具合がいゝから大丈夫。いつもは日の暮れになると、しく／＼痛むんだが、けふはそんなでもないから、もういゝんだらう。」

増「さうかい。それならいゝが、またあんまり呑過ぎて悪くなると、お前の阿母があんなに頼んで行つたんだから案じてゐるだらうと思つてさ。どうだい、お茶漬にしようぢやないか。又あんまり食べないでも體に悪いよ。」

仇「あゝ頂かう。」

と言つてゐるところへ仇吉の母が表から迎へに参ります。

仇の母「まあ増吉さん、今日はいちちお世話さまでございましたね。」

増「オヤ阿母さんかい。仇さん阿母さんが來なすつたよ。まだいゝんだらう。……阿母さんあとから送らしてあげますよ。今日は大へん心持がいゝさうだから、今までここでちつと飲つ

てゐたところなんですよ。」

仇「阿母、迎へに來たのかい。」

仇の母「あゝ、なんぼ何だつて朝から日の暮れるまで、こちらだつてお邪魔だあね。」

増「ナニ阿母さん、家ぢやあ晝夜ゐたつてかまやしないんですよ。心置きなくもうちつと遊ばしてお置きなさいよ。」

仇の母「えゝありがたう、だけど、ちつと歸らなくつちやならない用が出來たから、また招んで頂いて……。」

増「おやさうかい。仇さん、なんだが用が出來たとさ。ぢやあ鳥渡行つてお出でな。……今これからお夜食にしようと言つてゐた所なんですよ。」

仇の母「まあ／＼いろ／＼御厄介になつて。……母親さんは何處へね。」

増「淨心寺へ先刻行つたが、まだ歸りませんのさ。」

と言つてゐるところへ増吉の母親が奴の小ぢよくをつれて歸つてまゐります。

増の母「おやまあ仇さんの阿母さん。私や方々寄つたもんだから遅くなつて……。」



仇の母「今日はまた朝からこの子がお邪魔をしてね、とんだまあ御厄介さまでした。」  
 増の母「ナニにお前さん、何もお構ひしないもの。でも今日は大きに眼の方もいゝやうだから結構ですよ。」

仇の母「さうださうで、大きにありがとうございました。奴さん、稽古によく精をおだしだね。」  
 増「うちのは人さんがいらつしてもお時宜もしねえで困りますよ。」

仇の母「ナアニみんなさうでございますよ。……サア仇吉、支度が出来たらお暇申さうよ。」

仇「あゝ。ドレ歸らうかね。ずるぶん遊んだ。ぢやあお増さん、今のことを吃度頼んだよ。」

増「あゝ承知々々。ぢやあ又お出で。」

増の母「オヤもうお歸りかい。何にもないけど、仇さん、お夜食でも食べて行つたら。」

仇の母「ありがとうございますか、すこし又宅に。」

増の母「あゝさう。それぢやあ又。お氣をつけなさいよ。」

と仇吉は増吉母子に機嫌よく送られました母親と共にわが家へ歸つてまゐります。折柄暮れ六つの鐘ゴウン。軒並みに神燈の提灯を下げた格子作りの家々で切火を打つ音カチ／＼。

## 第八回

こちらは藝者の米八、めづらしくも今日は寄場に一人手枕をしながら物思ひに耽つてをります。藝者稼業といふものも他目から見ますれば派手で氣樂で浮いて見えますが、裏へ廻つて見ればいづれも四苦八苦、男のための憂き苦勞から着物の心配、茶屋小屋への義理などと、いつも同じ浮世新道の苦勞の絶え間はございませんやうで、まづ春の初日の出立から、蝶飛ぶ頃を待ちかねて着替は文庫に片時も落着かず、それがすむともうすぐ袷小袖に夏衣裳、はたが遺瀨ないまでに着飾る中に自分一人が地味にしてもゐられませんから、つい負けぬ氣性が昂じて癪となり、また借金となり、結ぶ年季に切れる客、せかれる間夫を苦勞してやうやう離れぬ固めが出来たと思ふとそれが却つて身のつまりとなつて、行けども一一生本街道へ出られない泥水稼業でございます。敵にして強くなければ味方にしても頼母しくないのはどこの世界でも同じことで、こつちが惚れれば人も惚れるのが戀の癖、かの米八も今では深川で人の指にも數へ